
特殊能力？ハイ、馬鹿力です。

panda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特殊能力？ハイ、馬鹿力です。

【NZコード】

N9835W

【作者名】

panda

【あらすじ】

ある単純で強力な能力を持つおれ『ジーク・クルード』

その気になれば国でかなりの職に就けるけどメンドクサイから生まれ故郷でゅつたり

と傭兵業を営んでいたんだけど・・・

あの少女『エリーナ』と出会ってからおれの人生は変わったんだ

処女作です。自分なりのハッピーエンドを目指したいと思います。

魔王とかそんのはまだ先かな…

プロローグ（前書き）

ついにやつちやつた……書いちやつた
作者は色々な意味で初めてです（ネットとか）
いけないところは感想で書いてくれたらうれしいです。

プロローグ

剣・魔法・モンスターが存在する世界『リアース』

地上を住処とする主に人間や亜人の種族、

魔界を住処とし『魔王』率いる魔族、

そして、まだ誰も見たことがないという『天界』にいる天使これら三つの勢力があった。

人間は特に秀でた力を持たず、それでも剣や魔法を使い、特に強いわけではないが多様性があり、亜人は人間を基準に一部の能力が高かつたり低かつたり、種族によっては『固有スキル』を持っている。魔族は全体的に高い能力を持ち、姿が様々、より強い魔族には爵位がつけられる。

天使はおとぎ話や歴史書に登場し存在さえわからない、しかし、天使が出る話には必ず災厄が現れるという。

そしてこれは、そんな世界で生きる一人の馬鹿力と仲間たちがおくる物語である。

プロローグ（後書き）

やつぱり『神様』は荷が重いの削除しました

1話 せじまつ（前書き）

今更書いてなんだけど恥ずかしいですね

1話 はじまり

森

「ラストっ！」

斬るというよりは叩き潰すような大剣の一撃を受けた一メートルほどの岩のような塊は“ゴシャッ”と潰れる音を出して血を吹き出しながら大地に沈んだ。

「ツヒー。ひーふーみー、……。よし、これで依頼されたのは全部かな」

その状況を作り上げた青年は周りにある同じような赤い塊を数えるとそれぞの塊に近づくと素手でそれに生えている角を枝のようになり始めた。

青年がちやくちやくと角を回収しているとき、背後の木の裏で息を荒くし血走らせた眼でその背中を見る青年に殺されたその生き残りがいた。そして目標は武器を收めて無防備な背をこちらに向けている。

距離もさほどなくこれ以上にない条件がそろって勝利を確信したそれは全力で突進した。

青年はこちらに気づき振り向いて構えたが大剣を抜刀する間もないだろう。それは絶対の勝利を脳裏に浮かべ青年へ突つ込み“ドン！”

“という音が響いた。

s.i.d.e青年

「あつぶねーな」

ギリギリでアックスボアを受け取ることができた。相手は魔物だが驚いてるのがなんとなくわかる。

いや、ふつうの人だつたら死んでたぞこれ。

「惜しかったねえ、この奇襲はよかつたけど相手が俺だつたからな。

」

としゃべっている間にも両手で押さえられているアックスボアは前進しようとしている。

「おまえでホントにラストだな」

自分を少しヒヤッとしたこのイノシシ君には賞賛を込めてこの拳で決めてやろう。押さえていたうち左手を上げグーをつくるとみけんめがけ殴りつける。

原形は保っているものの最後の一匹も屍の仲間入りをしたのだった。

side end

「で、ジークよ。結局は何体ぶちのめしたんだ？」

「んー、十三くらい?」

今回の依頼は畠を荒らす魔物の群れの討伐だった。簡単に説明してるけど被害がでかいのでかいの…

「相変わらずテメーは規格外だな。アックスボアあつたら体がまんま石だから剣じや斬れねーし、

魔法が撲殺するしかないんだぞ。……まあ、あの大剣なら鈍器になるか

「最後のは押さえつけてグーでやつたけどな
「…もつあきれて何も言えねーよ」

今、俺はクエストを終えていつものように酒場で友人のダロンと共に飲み交わしている。周りでも同じように仕事を終えた男たちが酒やつまみを片手に騒いでいるがここでは日常だ。そして俺たちも互いの成果をいいあつたりする。

「おまえホンシトにスゲーよな。こんな田舎で傭兵するよつ王都とかで騎士やつたほうがよっぽど儲かるだろ。」

はあ、またこの話かよ。ここは酔つとこつも言ひなしね

「だからいやつらんだる。俺はいつこうチャン騒^{さわ}ができる樂なのがいいの」

「んだよつ勿体ねー。てゆーかテメーのやつてゐると全然“樂”じやねーからな、せつかぐの”加護”持ちなんだから優遇されつだろ……でもつて俺にこいつに紹介しろ、したら俺は……つぶつ

「こいつやつといつ醉つてんな、もう面倒くさいになつてきただよ……

「はいはい、そろそろ帰つて寝るだ

わーつたよと眞こつつ夢の世界へ旅だつていべダロンを見て会計をします

(あー、明日は何しようかな…)

キャラ（前書き）

作者には表現力がないとです……。
みなさんの豊かな想像力にまかせます。

キャラ

ジーク・クルード（19）“加護持ち”

男・180cm

武器

大剣・圧倒的な力

容姿

ボサボサした茶っぽい黒の髪・瞳も黒・笑顔が似合う好青年？

主人公

加護持ちで種族の壁を越えた怪力の持ち主、あまりの力に全力は出したことがない

加護の能力は主に筋力に影響し腕力・握力・脚力など、肉体に関しては他の追随を許さない

魔法の才は皆無

耐久力に関しては人がベースなので頑丈な部類に入るが攻撃が効かないとかはない
おせつかいやき

エリーナ（16）

女・165cm

武器

おもにサポート

魔法

容姿

ショートの青っぽい白の髪・瞳は水色

ジークが依頼の途中で助けた少女。表情が少ない
精霊との意思疎通が出来る特殊体質の持ち主

普通の生活を送つていなかつたので色んなことに興味を示す
魔法は教えてもらえなかつたため治癒しか知らない

救出後

メッチャ元気な女の子

暴食（一部限定）

ジーク大好きっ子

ジェレイス・ドレル（16）

男（魔）・168cm

武器

長剣（魔）・魔法

容姿

短く赤い髪・瞳も赤・少し童顔

エリスについてる護衛みたいなもの、性格は魔族にしては温厚、
やさしそうな顔をしてる

魔族なので身体能力は成人した獣人より少しないくらい

戦い方は職業で言うなら魔法剣士

魔剣を持てるがまだ発動していない様子

おまけ

エリスとの付き合いは彼女が魔界を出るときに会つたときから
一人だったエリスに手を貸し一緒に旅をしていたのは勢いで、彼
女に一眼ぼれしたから

エリス・ヴァーティア（18）

女（魔）168cm

武器

魔法（攻撃系）・ジェスに対する理不尽な体罰

容姿

ポニー テールの金髪・目は強気な金

雰囲気からしてお姫様、言葉使いはジエスに対しては理不尽
誰にでも強気で大人っぽさを感じるが意外といろんなところでウブ
魔力に特化した魔族で後衛タイプ

リゼ・ガルデア(?)

女(魔) 175cm

武器

剣・影を使った固有魔法

容姿

銀髪のショート・瞳は青

正規のエリスの護衛、子爵でも上位の力を持ち影を使うという珍
しい魔法を持つ。

影をゲートとして移動が可能。自身の影を物質化させての攻撃も
可。

顔にあまり感情が出ないのでよく誤解されるが根はいい(魔)人

コーケルト・クアトス(28) “加護持ち”

男 178cm

武器

魔剣・?

容姿

短い銀髪・瞳は七色が揺らめいている

元ギルド階級2の経歴を持つ現騎士団長。加護持ち

その能力は視覚や聴覚、反射神経などが異常（かわすだけなら弾丸とか余裕）、下手したら第六感とか持つてる。

目は特殊でいろんなものを見ることができ（単純に距離・魔力の流れ・精霊・・・）魔法などで姿を隠しても何の意味もなさい。姿を隠すなら存在 자체を消すか彼の視界に入らない遠くに逃げるべし！

ジークとは魔剣一本で戦っていたがあまり武器に不得意はなく、魔法もこなす万能型。

戦場ではその目を生かし弓の魔装具を使う。

元が傭兵のためあまり堅苦しくない（むじろやンチャ）。楽しいこと好き

モブキャラ

ダロン・ブル（21）

男・175cm

めんどくさいから以上

ティーナ・リズニー

女・155cm

武器

ティーナスマイル！！（対象は男限定）

容姿

ショートの栗色の髪・瞳は茶

何気にもツチヤ登場したギルドの受付嬢

デック・オルタン ジッちゃん (55)

男 ドワーフ
• 110 cm

武器

鍛冶道具（おもにジーク用）

容姿

ハゲ！ムキムキー！かつい！怖い！（あれ容姿？）

キャラ（後書き）

ジーク + ユーヴェルト ÷ 2 = 完璧超人？

2話 予兆（前書き）

あれ？ 1話よりメッチャなげー

「ふあ…っく」

いつもより少しだるい体を起こす、きのう飲みすぎたかな…

水を飲み着替えや朝食を済ませると気分転換に散歩する」とした。

俺が住む都市は大陸でも海に面していて資源は豊かだから色々な商人がいたり、此処の船を使って別の地を目指す様々な種族を見たりすることがあった。人生の大半をここで過ごしてると飽きは来ない。そして何よりこの地域の周辺には土地が豊かな分それを糧とする魔物が生息している、だからこそ俺たちのような傭兵の良い拠点でもあり、互いの武を競い合つ場所でもある。

半年に一度行われる闘技大会は近隣の地域のお偉いさんなんかも来て運がいいやつはスカウトされたりする。

(おれも出てえけどなあ…、出場禁止になるならやりすぎなきゃよ
かつたよ

)
ひとつ歩き終えるとおれは何かないかなどギルドへと足を向けるのだった。

「おはようござります。今日は早いんですねジークさん」

「あ、おっはようティーナちゃん。今日も相変わらずかわいく頑張つてんね」

「ふふっ、ありがとござります。」

朝一番、ギルドには人影はないがあいさつをしたのは我らがギルドの看板娘ティーナちゃん、愛嬌があつて男ばかりのギルドにとつて

は欠かせない癒しだ。

…にしても早えなオイ…

「今日は何か入ってない?できれば“おれ向け”で
「そうですねえ……。残念、今日は特にないみたいで」
「――」

“おれ向け”といつのは生活上の力仕事のつて意味で、別に「ドラ
ゴン?バツチ?」といつわけじゃない。

「そつか、残念だけどティーナちゃんのスマイル見たからいつかな。
またあとでおじやまするとするよ」

「はい、いつでもお待ちしております（――）」

ホントいい笑顔だよなあ、マジで悪い気分吹っ飛んだ……。つく、
これで一体何人の傭兵たちがオトされたのか…。

たいていの人は依頼を受け魔物を倒すことが傭兵になる最初の試練
だろうが、ここではまずこの“ティーナスマイル!!”が大きな試
練となつてているのだらう（男限定）

ギルドを後にした俺はある場所を目指し歩いた。途中で5歳のガ
キンチヨから50代のオバチャンまでたくさんの人から声をかけら
れる。

内容は「あそんでえ（ちよ子）」や「前はありがとねえ。はいアメ
ちゃん（あれ?）」など、まあこの怪力を生かしたダイナミックな
遊びをしたり、暇な時に無償で手伝っている結果だらう。

それから様々な誘いをかわしついた目的地は鍛冶場、いつも使つて
いる大剣をときどき預けて調整してもらつてる。

「ちーーっすジッちゃん。ビットのおれの愛剣?」

そう聞きながらも来るであらう衝撃に備え両手で耳をふせいでいる
と…

「バーッキヤローッ・ジーク、またてきとーに剣をブンブン振り
回しやがって!!

いつも大切に使えつひとつんだらう!!…まるで鈍器じょ…省略」

(つるセー、これすぐー近所迷惑じゃね?)

耳をふさいでも聞こえる大音量に頭の中で悪態をはく

目の前ではトンカチ片手にこんがり焼けて引き締められた屈強な筋
肉に頭を丸めているいかついジジイがブチ切れていた。

この表現だけじゃムツ チヤ怖いだらうがジッちゃんは180ある自
分のへその辺りの高さからこちらを見上げている。(それでも十分
迫力満点だ)

そう、ジッちゃんはドワーフだ。この道30年の大ベテラン(55)
で武具をこよなく愛する人だ

「…はあ。おまえ今度はどんな使い方した?見ろ、表面がぼぼこ
だ」

そういうと壁に立てかけられているちょいギークくらいある大剣
を指差した、

「あらり、ホントぼつこぼつだあ。やっぱ力任せにアックスボア殴
るんじやなかつたか」…あれ?

「ほつ、あの岩の塊をバカスカ殴つてたねえ…」

「あれつ、声出してたおれ?」

「ぱちつ

……やつべ、……ちよつ……まつ……あつ『ガスツ』

「 もひーのやり取り何回目だあ？ つうかいいかげん買ひ替えろ… は
すむから」

「 金が溜まつたらつてことで… テテ、強く殴りすぎだりコーン

おれは頭にできたできたでの口笛を指さして言ひが「うひせい、そ
れでお前に使われる武器の気持ちもわからんどう」といわれたため
何も言えなかつた。

仕方ない、予備の剣使つか…

結局この日は特に何をするでもなく氣づけば空が赤みをさしている
せめて明日は、と予定を立てるためギルドへと向かう。

途中、人混みでダロンを見たがきのうがまだ効いてるらしくダル
そうに歩いていたから無視することにした。

そしてギルドの玄関前についていざ入ろうとする中から出てきた
真っ黒のローブをまとった人（？）とぶつかってしまった

「つすまん、だいじょうぶか？」

向ひは数歩あとずれるだけだったが反射的に謝る、が

「 …ふんつ」

少しいらついたのが少しこちらを馬鹿にしたように鼻で笑うと人混
みに消えていった

（何だつたんだ、あれ）

ポカーンとしながら男（多分）が消えたのを見ると

「つと。 依頼、 依頼」

期待を胸に、ギルドに入つた

2話 予兆（後書き）

すいません。
ヒロインはあとわざ少しだよ。

3 話 龍田（龍畫庵）

思いつく間にバンバンかー

夕方のギルドは朝とは違いガヤガヤとにぎやかだ
どれも依頼を達成して仲間同士で宴を上げ酒のにおいがある。

「おっ、ジークじゅーかあー。」こいつ、テメーも飲め
「わりいな、おれ明日がんばるから今日はカンベン」
「なにい、お前ほどの奴が頑張るなんてでけー仕事あつたつけか？」
「んにゃ、今から見つけんの」

んだそりや、ヒガハハとわらって男は元の位置にもどつて行つた

「また来たぜティーナちゃん、さつそく、だけど依頼表見してくれない？」

「今からですか？さすがにちよつと遅いんじゅ……」
「違う違う、明日する分。今のうち決めておこうと思つて」
「わかりました。……はいっ、これが今日の依頼表です」
「んー、どれどれえ……。」

「……ない」

「えつと、どんなのが希望ですか？」

悩んでるのを察したのか尋ねられた

「いやあね、最近おれの剣ダメにしたからこれを機に買い替えよう
とおもつてね」

すこしでも高い依頼がないかなと…

「そうですねえ……。最近はそういうた被害や魔物は出ていません
し……んー……」

しばし悩むティーナちゃん。

時間はたっぷりあるのだが少し冷や汗をかく俺、理由は簡単、後ろのみんなが怖い……

この辺の野郎は皆ティーナちゃんのファンであるため此処に長居するもやつかになる。

そんなことを考えていると「あつた」と嬉しそうな声がした。

「ちゅうどいいのがあつたんです。はい（一コツ）」後ろで“ふおおおおおーーー”と声が上がるが無視

「んー、なになにい……へえ、こりゃあ良い。内容は護衛で……あれ

つ、田的字書いてねーじやん」

「あつ、本當ですね。これ、ついさっき依頼されたものだつたんですけど

「どんな人？」

「真つ黒な人でした」あつ、それ見た…

「へー」

「はい（一コツ）」後ろで“ふお…省略

「よし決定っ」

「わかりました」

近くで聞いていた人は（いや、いいんかい？）と頭でツッコんだだろう

「護衛の数は4人と書いてあるけど……」

「はい、こちらで選んでおきますね」

この子にかかれば2秒で此処にいる大半が名乗りを上げるだろうな

.....

「じやあよひしへ頼むよ」

用がすみ明日に備えるためにあとを離れるとでてすぐこ、
“はいっ！－俺行きますつ” “おれもだつ！－” “テメ－はすつ込
んどうつ”

(.....誰が来るんだろ)

3話 前日（後書き）

まだあと少しだけです…

4話 出会いのアーティスト（前書き）

やつらがロローグが終わった感じ…

いつもよりはやい朝、ジークは依頼のための旅支度を済ませ、いつもの大剣とはちがい一いつの一般的な大きさの剣を腰に刺していた

(……やつぱりしつくりこねえな)

家を出ると辺りに霜がかかっていて、少し冷えた風が吹く中でジークは集合地点を目指して歩き始めた

都市には外へ出る時に通る門がありそこが集合地点となっていた門の下にも霜がかかっていて（十人くらいだろうか？）人影があるのがわかる
徐々に近づいていくと一人が気がついたのかジークに向かってきた、見るからに同じギルドの人間だろうその人物はほつとした表情で話しかけてきた

「あつ、やつと来た～。遅いつすよジークさん、あんたが最も… あれつ？ いつものバカでかい剣はどうしたんスか？」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは、あれば今ジッちゃんのトコにあるんだよ」

（…）いつの名前なんだっけ）…あまり覚えは良くないジークだった…

「あ～、まーた剣をダメにしたんスか？だからあんなつるさかつたわけっすか」

「え、聞いてた？」

「聞いてたじゃないっすよ、あの人の声50メートル圏内はあんまり変わんないんスから怒らせてもほどほどにしてくださいよ」

(そんなにか…、そりやすまん)

「いや、思ひへらこなら言ひてへだせこよ
「なんでわかつた!-?」

顔に書いてるつスよ、などと話してると「ゴホンッ」と中断される、見るところには6人の集団がありその全員が黒いローブをまとっている

「なにあの不審者たち、夜逃げか?」にしては荷物が少ないような…
「ちげーよ、あれが護衛対照で依頼主だつての」

突然の乱入者のほうを向けば、大剣（おれのよりは小さい）を背負い何かエラそーな顔をした明らかにボンボン（坊ちゃんでいいか）とその部下っぽい奴がいた

「テメ・やる気あんのかよ?いいんだぜ別に、この依頼はおれが達成してやるから」

(何だここつ…、こんなのが『ギルド』にいたつけ?)
(新入りっスよ、覚えてないんスか…。てゆづかジークさんおれの
こと覚えてます?)
(……)

小声のやり取りだったがちょっと聞こえてたらしく、坊ちゃんはこめかみにあおすじを浮かべ
「こいつ「その辺にしてもられないだろつか、我々は少しでも早く
場所に着きたいのだ」

痺れを切らしたのか集団は進み始め、坊っちゃんは「チッ」と舌打ちすると部下を連れてあとをついていく。
そして自分たちも続行するのである」と云ふ所付いた。

(一頭だけの馬に荷物を乗せずに入を乗せてる?.. 本当の対象はア
イツか…)

そして青年は少女と出会い、物語が始まる

4話 出会い part1 (後書き)

そろそろかな…

5 話 part 2 (前編)

かうじやべった――――――――――

隊列は馬を引くリーダー格の初老の男、そのすぐそばにB&p・B（坊ちゃん&部下）が控え
馬の後ろに他のロープ達男、そしてそのまた後ろにおれ・ロイズ（
さつき教えられた）の順である

（馬に乗つてるのは体格からして女か…）

一度確かめようとするとロープ男たちの“近づくんじゃねえ！”と
いつ視線で止められてしまつた

森

「こしてもよおロイ、こつひだり行つてると細ひへ、」

「さあ？この先はずつと森や山が続いてるゝスから、歸田鹿当もつ
かないっス」

だよなあ、だから魔物も多いし人が立ち入るとほんとんどない
いはずなんだけど…

「今更ツスけど、ホントに大丈夫なんすかねえ。不安になつてきた
ツス…、ティーナちゃんが言つから勢いできちやつたけど、ぶつち
やけやめときや良かつたっス」 テメ・もかよ…

「まあ大丈夫だろ、魔物は出るけど良い実践ができると思えよ、」

と励ますようにおれはロイの肩を“パンパンッ”と叩く

「いや、そつちはジークさんむいしにいッスケビ、…自分は魔物
よりこの連中のまづが不安つす」

：確かに全身真っ黒の集団がこんな所でピコピリした空氣を発しながら歩いてたら不気味だな

「もしかしたら、こいつらどつかの宗教の信者で、神をいじりよつ
的な儀式でもすんのかもなあ」

などとジークはジョークを言い笑つていたが、
そのとき前の4人がピタツと止まつたがすぐにまた歩き始め、それ
を見てしまつたロイズは（ま、…まさか）と思い、氣をこまかす
ためジークと共に笑つことでやり過（す）ことにした

夕暮れ

「また来たぞッ、かたまれ！今度はかこまれてんぞッ！」

もう5度目の襲撃、さすがに慣れたよつてローブ男たちは集まつて
身構えている

「くそ、さつき来たばっかだろつ！いいかげん休ませやつ
「…全くです…ねつ」

連續の戦闘に愚痴をはきながらも敵をたおすB & amp; B

（…あいつら普通に使えんのな、正直口だけかと思つてた）

そう考へながらも自分も大剣を大きく横なぎにはらいウェアウルフ

数体をつぶす

えつ、いつの間に大剣かつて？ずっと見栄張つてた坊ちゃんと交換したんだよ…

回想

「あー重てえ！…くそ、いつも長剣にしどきやよかつた」
大剣は普通の人じや使えないからむしろ良くそれで魔物と戦つたな
つて感じだけどな…
(あつ、ちょうどいいかも…)

「おーい坊ちゃん、その大剣とこっちの長剣二つと交換しない？」
「んだと？カツコつけよつとすんじゃコ「いいからえんりょしない
い」つな！？」

坊ちゃんの言葉をさえぎり、持っている大剣をヒョイと片手で取り上げ、代わりに腰の長剣を渡す
目の前の信じられない光景に口をぱくぱくさせた坊ちゃんは氣を取り戻すと

「か…、貸してやるだけだぞッ」

回想終了

「……はあ、やっと終わつたあ…」

もつ無理とばかりにおれ以外の三人が腰を落とす、さすがにこれ以上は無理だろ？…
死体を確認し、自分も武器をおためて一息つこうとしている

「あやあつーーー！」

あわてて振り向けばすぐそこには暴れた馬が突っ込んで、のつ
ている人は急な行動に耐え切れず振り落とされかけている

(ヤバいっ、落ちるー！)

落とされればケガするが下手すりや踏みづぶされる

「…っ、あぶねえ！ー！」

ついに落ちるそれを寸でのところでスライディングしそれなりに痛か
つたが受け止めることができ、ホッと息をつく

「っつづ、…大丈夫か？」と尋ねれば、腕の中にはかぶっていたフ
ードは衝撃で外れ、

まるで雪のように白い髪、目は青く、きれいな顔をした少女がいた

……

物种土（温带）

なまくとした過去

おまけ

少しだけある少女の話をしよう

その少女はある貧しい夫婦のひとり娘としてこの世に生を受けた
肌は白く、瞳も透きとおった青、夫婦はたくさん愛情をそそぎそ
の子を育てていた

それから3年が過ぎ、もともと貧しかった家庭はいつそう酷さを増
し、毎日満足な食事をすることもできず三人の容姿はまるで枯れ木
のようにガリガリになつた

それでも幼い少女は笑い、夫婦もその笑顔を見てはがんばるのだつ
た…

だがそんな日常は続くわけもなく、少女は笑うが夫婦の顔から光は
なくなりつつあつた

そんな時…全身を真っ黒のローブでつつんだ一人の男が現れた…
男は言つた…

「その子は魔法の才を秘めている、このまま終わりを迎えるより我
らと共に神に仕えなか?共に歩むなら神はあなたたちに慈悲を与
えるだろ?」

そして男は懷からこぶし大の皮袋を出すとひもを緩め中身を夫婦に
見せる、そこには今の自分たちでは到底稼げない額の金が入つてお
りこれを使えば間違えなく生きながらえることができるだろ?と曰

の前の光景に夫婦は喉を鳴らす

「神は慈悲を『』えるがそれを受け取るかはあなたたちの自由だ… 考えるといい」

結局は選択肢なんか存在しない、受け入れなければ死ぬ
だがそれは娘をこの得体のしれない輩に売るということだ、神など
とほざく不気味な奴に
だがしなければ娘も死ぬのだ…

夫は苦悩の末、涙を流しつつ首を縦に振った

それから娘は男に連れられてある施設で暮らすことになった
そこには自分と同じくらいの子共がたくさんいて、皆同じく魔法の
才を持っていた
娘は中でも精霊と話せるという特殊体质でそれを知られると娘は『
巫女』として扱われるのだった

そこでの一日は簡単で機械的だ

朝起きて、いつも同じ黒一色の服を着て、祈つて聖書を読んで、食事の時も祈る、あとは意味のわからないしきたりを教えられる、周りも例外なく同じ作業を繰り返す。

施設からは出ることはなく毎日毎日同じものを見る。いつもが同じで時間というものがわからなくなるほどに

そして自分は巫女であり周りは自分を自分と扱ってくれない、初めはよく話していた友達さえ距離を置かれ会話をしようにも相手はまともに構ってくれない

・・・ちがう、私は敬ってなんかほしくない。前みたいにお話がしたい

そんな日々を送っていたある日、偶然娘は信者たちのある話を立ち聞きしてしまった。

『我らが主の復活の儀式の準備はできているのか?』

『はい、贊となる“巫女”も選んでいます』

そこからは話の内容なんて覚えてない…、だがこれだけはわかるここで“巫女”と呼ばれる人物は一人しかいない、そして“復活の儀式”とは聖書にあつた『ある特別な少女の命と4人の血肉をささげて我らが主“ゼノ”は再来するだろ』とのことだらう

つまり自分は殺されるために此処にいるのだ、得体のしれない神様を呼ぶために存在するモノ

6歳の彼女では抵抗する力も知識もなく逃げることはできない

儀式までのおよそ十年をなにもないこで暮らしてただ死んでいく…

そして確定された『死』を胸に十年をすこさなければならぬ

…なんで…なんで自分が…、

少女は絶望を胸に生き、よく笑っていた顔からは光が消え表情をかえなくなつていつた。

そして現在、もうすぐ娘が死ぬ儀式が始まる…

そして少女は青年と出会い、物語が始まる

ねむけ（後書き）

こんなでいいかな
感想お願いします。

夜

最後の戦闘で皆の状態と馬の怪我により進むのをやめ、屍のそばに留まるのは危険なためそこから手離れて野宿の準備を始めた

馬は隠れていたウェアウルフに襲われたらしく足をやられていた
いずれにせよ足をダメにした馬は置いていくしかない…、悔しいが
ウェアウルフの作戦勝ちだろ？
ロープの男たちは輪をつくり、どうしたものかと話し中だ

「しつかしキレーだつたつスねえあの子、びっくりしたツス」
「まあな、おれもだよ、…けどあんな子を連れてくるなんてホント
ヒドいこいつ田的だ？」

「…」
「…」
「…」

「「だめだ、わっかんねえ」ツス」
(「ひりや、考えててもしかたねーな」)
「ロイツ、おれメシ調達しにそここの川まで行ってくつから」
「大量を期待するツス」こいつ、たかる気かよ…
「あいよつ、まかせんしゃい」

さて…、行くか…

川

近くにあつた川に着く、川は澄んでいて月の光で泳いでる魚が見えるほどきれいだった

(よし、いけそだな…て、あの子は…)

よく見れば近くに例の少女がいた、水際で空を見ている
風に揺れる髪は月の光と川の反射光によりきれいに映り、その光景
はまるで一枚の絵だ

「なーにしてんだ、嬢ちゃん」

「つ…あなたは?」

突然の声で驚いたようだがすぐに少女は冷静を取り戻す

「ひでーな、君たちを護衛してる傭兵だよ、ジークつていうんだ。
それで?何してんのこんなどこで?」

おれの問いに少女はまた空を見上げてポツリと「空を…見てた…」
と答えた

(空? そんなの見てて楽しいのか?)

どうでもいいこと考へてると少女は何か思い出したような顔をして

「あつ…、馬から落ちたときに…助けてくれた…人?」
(ぎこちないしゃべり方だなあ…、人に慣れてないのか?)

「合ってるよ。その…すまなかつたな…ケガしていないか?」

受け止めたとはいえ危なかつたからな、大丈夫だらうか…

「大丈夫…、受け止めてくれてありがと」

とせつけなく答える少女は無表情で感情の色が見えない
並みの人人が見れば10人中10人はキレイ・かわいいと言つだらう
が少女からは年相応の女の子達のような感情は出さず、まるで遠い
ところを見るように田は虚ろだ

「無表情で言われてもなあ、笑おうぜ嬢ちゃん」とおれは一カツと
笑顔で言つ

「傭兵さん」「ジークでいじよ」…ジークは…何してゐの?」（無表
情）

少女はおれのせつかくのアドバイスをざらつとスルー、質問していく
が表情のせいか全く興味なさそうに見える

「おれか?今から晩メシ用の魚をとるんだよ
「魚?…、釣り?を…するの?」

少し表情を変えた、どうやら興味があるみたいだな…

「しねーよ、時間がかかるってめんべくせこ」

そういうおれに少女は不思議そうに首を傾げ「じゃあ、…どうやら
て?」と聞いてくる

「楽な方法があるんだよ。あつ、そこはかかるから下がつてな」

そういうとおれはゆっくり、あまり音を立てないようにして川の真
ん中まで歩いた

(びっくりすんだろうな...)と思つて口にやけてしまった

side少女

近くで川を見つけたのでそこで暇をつぶすことにした、自分はあまりあの信者たちと一緒にいたくない、どうせあとで私を殺す人たちだ

そう考へても逃げようとしないのはもう諦めているから、もう十年も前から絶望していた私は抗おうともしない

そんな事を思つていると、急に背の高い男が現れ話しかけられている
確かにこの人は落馬した私を受け止めた人だつた。『ジーク』という
らしい

落馬の時のことときを気にかけてくれた、やさしい人のようだ

魚をとるから離れてろといい、彼は大剣を背負つたまま川の中心に立つ（なぜかにやけてる）

“魚”は見たことも、食べたこともなかつたから興味がわいて、私は自然と近付いて水際に立つて彼の行動を観察してると、彼は背負つていた大剣を振り上げ、おもいきり川にたたきつけた

side end

大きな音と水柱が無くなり、あとからプカーンと魚が浮いてくる、大半は衝撃で死んだり、氣絶したりするのだが、信じられないほど
の力で生まれた衝撃は何匹かの魚をグチャグチャにしていた
(見なかつたことにしよう)

そして肝心の少女を見ると離れてろと言つたのに近くにいたらしく

全身水浸しでへたりこんでいた

このとき少女は黒いローブではなく寝るための薄着をしていて……

…つまり服が水で肌に張り付いて体のラインがはっきりしているのだ
細い体だが年相応にでていけれいなラインをしている（ナニがと
は言わん）

うむ、将来は絶対美人になるな……

「つて、違う違う……す、すまん。やりすぎた」

必死に謝罪するおれ、こればかりはさすがに怒るかもしれない
覚悟を決めているおれが聞いたのは「ふふっ」という笑い声
えつ、と顔を上げると少女は無表情でも、怒った顔でもなく微笑んで
いる

「エリーナ……」

「えつ？」

「なまえ、エリーナです。少しの間ですけどよろしくね、ジーク」

と言つと、少…エリーナは戻つて行った
ジークはその背中を見ながら

（普通に喋れんじゃん……）

と驚いていた（えつ、そつちー？）

7話 対話（前書き）

わかってると思いますがB&Bはただの人数合わせです
全然からみません

7話 対話

結局自分もずぶ濡れになつたが魚を7匹手に入れ川から戻る

「とつたどーつ！」

「いやジークさん一体何したんスか？あんな爆音出して、ドーラゴンでもいたんスか？」

あと何でびしょぬれ？とロイズが呆れて聞いてくる

「ちげえよ、川の真ん中でおもにきり剣を振り下ろしだけだよ。知ってるか？」「このつのケツマー獲れんだぜ」

と血濡れのよつこ言つたが

「知つてたッスけど、やりますふつー？」こんな魔物がほびこる森で夜に…あつ自分は2匹でいいッス

…このつはホントに食わせてもらひつ冴あるのか？

「ひとつひと〆ごロイ、わかつた…いらないんだな？」

「すみませんでしたつ！…！」

「いつもの詰尾をつけずに謝られたから、まあ許そつ…

「それよりもジークさん、わたくさんの美少女“も”びしょぬれで帰つてきたんスけど、…もしかしてなんかしました？」

仕返しとばかりにロイがふつてきた話はおれには効果観面、おもわす吹いてしまった
しかもこりつて」とロイは意味ありげな眼をして口を一いつマコとしている

「ちがうーーちょっと話しただけだつ、…離れてるつたのにあんなところにいたから」

(しまつたー！パ一クッて暴露してしまつた…)

「え、話したんスか？あの子と？」

見るからに無表情だから勿体ないっスーと懸念するロイズ、(気はそれたか…セーフ)

「笑うとかわいい子だつたぞ…・・・でも変な子だつたな

説明しながらさつきのやり取りを思い出す…

騒がしかつたのでその方を向くと

『『びじておひられたッー』、『心配しましたぞッ』、『なぜ濡れてい
るっ』…

(なんかメッチャ問題になつてるー…?)

……そして怒られた

……

各自食事をとつており、おれは捕つた魚に枝をさして焼いている
(ちなみこ、ロイは既にすませて見周りをしてくる、… B & a m p ;
B ? 知らぬ)

あの子たちのほうを見ると6人はかたまって手を胸の前でくんで
何やら祈りをむかげている…

(ジニアーダンで言つたけど『信者』つてこののはあながち外れてね
一かも…)

…となると目的は儀式か…とい考えるが“ないない…”と否
定する

彼らが食べているのは質素なスープとパンだけであまり満足でき
るとは思えない

(せういえば、ヒリーナは魚に興味を持つてたな…好きなのか?)

そう解釈すると焼き終わった魚を一本とつて歩き出す

「おじおじ…、育ち盛りの子にそんなメシはねーだろ。ちやんと食
わせてんのか?」

「…何の用だ」

「だからそんなメシで満足できるのかつて言つてんだよ、お前らは
いいとしても

その子にはもっと栄養のあるもん食わせりよ」

「あいにく持ち合わせていないのでな。気にしないでもらいたい」

「ねえな、こいつをやるよ、ほりっ！」

おれは手に持っていたできたての焼き魚を見せ、エリーナへのばす、エリーナは一瞬キヨトンとした後おそろおそろそれを取ろうとするが寸前に横から出てきた手で制され「あっ」と少し残念そうな声を出す

「結構、巫女はそういうものを口にしないのでな」

リーダー格のジジイに言われるがエリーナは取らなかった、つまり本人は食べてみたいのだろう

(今は無理か…)

「わーったよ、邪魔して悪かつたな」

とすぐ口に諦めるおれにエリーナは残念そうな顔をするとまた無表情に戻り

「気持ちだけつかとる、… ありがと」

といひと質素な食事を再開するのだった

sideエリーナ

「……こつ……る、おいつ起きる」

傭兵たちに火の番を任せ、皆が寝静まつたあと意識の外から私は呼び掛ける声に気付いた

「…ん？…誰？」

おもい臉を上げて私を起こしたであろう人物を見るとその人物はジークだった

「静かに」と告げついて来いと言いつと火のもとまで連れてこられた

「…何か用事？」

「ホントは食いたかったんだろ？ほらっ」

そういうジジークは刺してあつた焼き魚をあの時と同じように私へやる

今度は誰もいないので邪魔されず受け取ることができた

「何で…」

あの時はちゃんと断つたはずなのに

「いや、おまえ無表情ぶつてるけどあの時あきらかに残念そうだったからな。魚好きなのか？」

どうやらまた私の心配をしてくれたようだ、口は軽いけど良い人なんだな

「…ちがう、でも食べたことがなかつたから興味があつた」

「あれか?『私達の宗派では肉類は食つたりやこけません』てやつか?
?」

ジークは私たちがどんな人かわかつたのか答えをそのまま言ってのけ、私はうなずいて肯定した

「マジかよ…、人生の半分は損してんなおまえら。まあ、くつてみろよ」

大げさな表現をして驚きながらもジークは“ああ”と勧めてくれ
「でも、私は巫「今はだれも見てねえって、黙つててやるよ(ニカ
ツ)」「…」

結局私は魚への興味と彼の押しに負けて食べるに至った

s.i.d.e end

「あつひ

「焼きたてだからなあ、氣をつけろよ」

あきらかに遅すぎた注意にヒリーナは涙目でじっさを見る

「じめんじめん、ゆっくり食べればいいぞ」

今度は注意しつつ小さくかじる

「……おこしよ」

ホントにおこし、ひっくへリーナは顔をほほりさせっこる

「だり? もつと食え」

・・・・・・・・・・

Hリーナがそのまま食べ終わると、おれは「ひい合」を見てまた話
し始めた

「おれはジークだ。『ジーク・クルード』バリバリの19だ。お前
は?」

「? ……お前は前に行つたけど」

「あれはお互い滅茶苦茶だつたからな、ちやんとした血口紹介しよ
うぜ」

いや、ぶつちやけとおれスッゲー動搖してたからあまり覚
えてないんだよ

「Hリーナ…、私はそれだけ」

「…やうか」

(みんな連中といふんじや、わけありか…)

「じゃあHリイだな」

「Hリイ?」

「愛称だ、エリーナはなんか長ーからな。いやか？」

自分で言つてて思つたがじたつた四文字が長いってどうよ？
親睦深めるつもりだつたけど急すぎたか・・・

「違つ…、私は巫女だからそんな風に呼ばれたことなかつた…」

「巫女？その“巫女”つていつのは何だ？」

と尋ねるとエリイは何故か目に涙を浮かべて自分の不思議な能力、
過去を語つた

7話 対話（後書き）

なんか自分が描いてた展開と違つてきてる！？

設定

- ・ 加護持ち
常識はずれた力を持つ特殊な人たち
能力は様々で同じ能力はない
数は少なく、十数人しか確認されていない
戦闘には向かない能力もあるが戦闘に特化したものはまさに一騎当千の力を体現できる（例・ジーク）
大体は確認された国に保護・または軍事的に利用される

・ 階級

ギルドに属する傭兵に与えられるクラス（剥奪もある）

クラスは1から10まであり、小さな数ほどより強さを示す
ただ強ければいいわけではなく、相応の人格・名声もとわれる

階級 : 例え

10階級：駆け出しの傭兵

9階級：1年ほどで誰でもたどり着ける

8階級：そこら辺にいる魔物・一般兵

7階級：国の騎士

「凡人の壁」

6階級：熟練者・獣人・一般魔族

5階級：歴戦の猛者・下級魔族

「常識の壁」

4階級：王族直属騎士・単独でドラゴン激破・中位魔族 ジーク

「化け物」

3階級：上位魔族（爵位持ち）

2階級：英雄・単独で上位ドラゴン（災害並み）激破

1階級：魔王（天災並み）・歴史上で数人しか確認されてない（

中には魔族がいたといわれる）

上位クラスは百人もおらず、加護持ちや魔装具（例・魔剣）または固有スキルを所持してるものが多い
というか何かしら反則を持つてる

ジークは上を狙えますが階級はそれに見合った成果で決まるので
まだ4階級です

・魔装具

古に伝わる能力を持つた武具
中には自我を持つものもあり様々な形をしている
製造方法はわかっていない

・魔法

魔力はだれでもあるが誰でも使えるわけじゃない（確かな知識と才能が必要）

魔法は詠唱することで精霊に呼びかけて行われるもので、精霊と意思の疎通ができる者は感覚で行ったりする（エリーナ）

・魔石

魔力を留める性質を持った石（補充可能）

武具につけての応用も可能（例・切った時に発火。魔石の属性で耐性付与）

生活に使われ、文明を代表する道具（例・火をおこして調理）

・月

順に 黒 白 土 青 緑 赤 黄 灰

季節が春・夏・秋と3つあり、雪が降る地域は一部

・魔界

別世界にあるわけではなく同じ大地に存在する。魔族だけの列記とした『国』がある

ただし環境上そこに生息する生物（魔獸クラス）はとても強く、肉体的に弱い人間や亜人などは不向き。

弱肉強食を体現する場所

・魔族

外見は様々、人と変わらない魔人や人型におさまった化け物が一般的。

魔族の魔力は特殊で、見分けのつかない人型でも魔力に敏感なら見分けることが出来る。

偏見で力が全ての悪魔のような存在と思われているがそれは全てではない

実際は現魔界を統べる賢王（魔王）によつて秩序が保たれ社会性がある。

魔族は他種族に一方的に敵視されていて（実際前魔王の時まで荒れていた）人間がその筆頭。それを口実にあらゆる国が打倒魔族を掲げその名声・土地を手に入れようとしている。

・獣人・亜人

昔、進化の過程で異種族と交わつたり、環境によつて変化した人間の親戚のような種族

獣人は祖とする生物の特徴を残していく全身が毛深かつたり尻尾があつたりする。（翼人だつたら羽）

顔は人が動物に似てたり動物が人に似てるようでそれは種族による。亜人はエルフが一般、特徴は金や銀の色をした髪。尖つた耳。何故か大体が美形。

- ・魔法先進国“アドリア”大陸を代表する魔法国家。一番魔界に近い所に位置する国打倒魔族を掲げ軍部に力を上げている。
- 魔力量に特化した加護持ち“ミスラ”的所有国。その莫大な魔力を利用し異世界からの『勇者』召喚に成功した後その勇者を魔族との戦争に参加させている。
- 人口の大半が人間で構成されていて獣人・亜人にはあまりよろしくない。

- ・アレスティナ

ジークの出身国。アドリアの隣国で海に面している。

アドリアとは違い人口は多種、同じく魔界に近く位置するため一応アドリアとは同盟関係である。

- ・・・だが実際両国はあまり仲がよくない（種族問題）
- 加護持ちは騎士団長ユーヴェルト・あまり知られていないがジーグ、がいる

軽い好奇心で聞いた話は決していいものではなかつた
事の発端であるエリイが売られたことに関する仕方がないことだ
と思うし本人も理解していた。

だがそこから続く話はおれにとつて不愉快でしかなかつた。

閉じ込められた施設で同じ行動をひたすら繰り返す毎日、そして“巫女”として祭り上げられ1人ぼっちになつた孤独感、4・5歳の子が送る日常では決してない

“巫女”に選ばれた彼女はこの依頼の到達点である場所で『生贊』として死ななければならぬと聞いた時にはフザケルナと叫びたくなつた

しかも驚いたことに生贊にはおれたちも数えられていた

(くそがつ、ジョークのはずだったが…悪い予感は当たるもんだな)
ビンゴじゃないか…

・・・・・・・・・・・・

語り終えたエリイはおれの横で泣いていて嗚咽が聞こえる

(10年も我慢していたのか…、そりやあ無表情な顔にもなるはず

だ)

自分がいつ死ぬかなんてわかりたくない

(ヒリヤ、動かないと男じゃねえな…)

こんな少女が泣きながらつい過去を話したんだ、助けるつきやないつしよ

「…それで?」ヒリヤまで話したんだ。そんな糞つたれな運命に抗つてみないか?」

「…え? ?」

おもいもよりない問いかけにヒリヤは泣くのをやめる

「助けてやるよ。心配すんなって、ヒリヤまで来て無視できつかよ」

「……の?私…助かるの?」そう聞くヒリヤの顔は涙や鼻水でぐしゃぐしゃになつてゐる

安心させるようにおれはいつものような笑顔で励ます

「ああ、だからそんな顔すんなつて。笑つてたら美人だぞおまえ」「……うんっ、ありがとうっつ

涙でぬれていたが今度のは無表情ではない明るい顔だった

このとき、離れて寝ていたはずの男たち5人のうち一人少なかつたのだが、エリイは泣き疲れてそのままジークに寄りかかる形で寝て

しまい、ジークも起こすわけにいかず、その場を離れなかつたため
気づくことができなかつた……

（朝）

「な？ “サツ” むぐー！？」

昨夜の話と自分たちが置かれている状況を3人に話すと反応はそれで

『マジっすか！？』『やつこいつことだつたか…』（ロイズ・部下の順）

坊ちゃんは激怒して大声を出そうとしたので素早くおさえた
察した坊ちゃんは興奮しながらも小声になつて尋ねてきた
『じゃあなんですぐ俺達に言つて逃げなかつたんだよー！？あの女
を連れて逃げればすむ話じやねーか』

「……あつ」「おもわず素の声が出た

(せうすりやよかつた！……でもあの状況じゃ寝るしかなかつたし
……)

などと焦りながら言い訳を探してこむおれを「山」を見るような視線
が集まり三人は同時に

「……バカが（シス）」「グッ……なにも聞えない

「じゃあ朝まで待つた理由は特になかつたんだな
「そうです……」

坊ちゃんは“ハア”とため息をつくと部下に「あいつら縛つとた
と命じる（……なんかムカつくな）

男たちの捕縛をB&Bにまかせてくるとロイズが話しかけて
きた

「まあかこんなことになるなんて……、でもそのエリーナって子も大
変だつたんスね」

「ああ、たまたもんじゃないだろうな」

と一人はジークのすぐ横で寝ている少女を見る、…よく寝てる
するとB&Bが戻ってきた、何かおかしい…

「おこひー・ビリーフ」とだーーひと足りねえぞっ

その言葉に全員に緊張が走る

(まよい、ばれてたかっ…)

あの時すでに聞かれていたのかもしれない、とすると仲間と連絡でもしていたのか…

「おこひ、起きるHリイ…みんなつ用意しりー。」

やつくつしてゐる場合ではなこので強引にHリイを起し

「じひしたの…?」

まだ顔がトロソとしてるが状況を察して聞いてくる

「そのうの話が聞かれてて仲間を呼ばれてるかもしれない。やつと逃げるだ…」

手を引いていつせこに走り出さうとする「まひひ」 とHリイに止められた

「時間がないっ、急げっ」

「あの人たちは私がじひこむかわかるよひしてん、…一緒に逃げるのは危険」

「じゃあどうすんだよーもう時間がないんだぞッ」

坊ちゃんの言葉にエリイの顔に影がさす、そして決心したよひに顔を上げた

「私がおこ「おまえらは二人で行けっ、俺が連れていへーー」ツで

も…」

「“俺が連れていく”っておまえはじつするんだよつ?」

おれが犠牲になるような行動に坊ちゃんは異を唱えるがロイズはすぐこりなずく

「そつちのほうが得策ッス、行きましょう!」

「得策つて、いいのかよ!」

「ジークさんなら大丈夫ッス、むしろ自分たちは早く逃げるッス!」

「!」と走り出すロイズ

ロイズの言葉がよくわからず戸惑っていた坊ちゃんだが「チツ」と舌打ちをするとあとを追いつよつにして部下と走り去つて行つた

「おれ達もいそぐわつ」

8話 発覚（後書き）

おそらく次、バトルが入ります

9話　追手（前書き）

な……長かった……

s i d e 3人

「…はつ……はつ、…」

朝の人気がいない森で3人は走っていた二人を囮にしてる自分に文句を言いたくなるが今はそんな場合ではない相手の素性がわからないから呼ばれる援軍の数も予想できない、こっちの人数を考えると逃げるしかない

「い…、一回休みましょましょ。ここまで来ればもう見つからないかと…」

木々の生えていない大きな広間にでると、あまりしゃべらない部下が声絶え絶えに言う

3人はかなり走っていてもうすでに4キロを超えて、武器を所持しているのでさらに疲労がかかっていたので全員賛成で腰を下ろす

「…くつそー朝からこんな走らせんじゃねえよ！」

「仕方ないっス、ジークさんがあの子を受け持つてる以上こつちは逃げ切らないと」

「…おまえ、わかつてんのか？あいつを犠牲にしてんだぞ！」

「え…もしかしてホントにジークさんのこと知らないっすか？」

真面目に話すのに口イズは“こいつ何言つてんの？”という様な反応をする

そんな態度に怒りうつするが部下も「あの人なら大丈夫でしょう」

と制する

「とにかく、ここも早く離れましょう。追手に会わないにしてもこれは危険です」
10分の休憩に3人は腰を上げまた走り出そうとする…、そこで知らない声が聞こえた

「それは困る…、あなた達にもしてもらいたいことがあります」

「来たかっ」

「誰つス！？」

予期していない声に3人とも驚きながら声のほうに身構える
すると木々の間から5人の男たちが出てきた、5人とも同じ格好で
やはり黒いローブを着ている

(なんでここに現れる!?)

それが3人の疑問である、少女はジークが連れていてこっちの行方は分からぬはずだ

「5人か…、人数からして分けてるつスか?」代表してロイズが尋ねる

「いえ、これで全員です」

その言葉で3人に希望が見えた、相手が5人なら例え魔術師がいても突破できる

「こんなに早く見つかるならこっちが最初つスか?」

「あつちは足が遅いよなので、あなたたちのあとでも追いつくことはできます」

よほどの自信があるのか男は不敵にこたえる

「なら話は早え、たつた5人だつたら逃げる必要はなかつたぜ」

勝機はあると坊ちゃんが前にでる

「もとよりそのつもりです」

男の言葉で相手は何か唱え始める、やはり相手は魔術師のようだ
距離が離れていたので無暗に斬りかかることができず出方を見る
すると男たちの前の地面にシミができ始めそれが徐々に模様のある
円をつくる

「これは、…まさか召喚陣！？」男たちの魔法に気付いたロイズが
驚いて叫ぶ

「なにつ？止めるぞ…！」

「はっ、もう遅いッ」

そして陣からでた黒い霧がはじけた

side end

3人と別れた後自分たちはべつのほうへ進んでいた、これで両方が
追手に会う確率は下がる

本来ならとばして走りたいがエリィに合わせてるため遅くなつてい

「無理しなくていいぞ、休むか？」

心配して尋ねるおれにエリィは顔をよこに振る

「大丈夫…早くしないと追いつかれる」

「やうか…」

つらい顔をして断るエリィに胸が痛む

(くわう…、おれがちゃんとしてれば)

「…ちがう、これは私のせい。だから気にしないで」自分を責める
よつこエリィが言つ

顔にでてしまつたらしく逆に言われてしまつた、励ますのはおれの
はずなのになんてバカなことしてんだ

「心配すんなつて、いつ見ても“すげー”強かつたりするんだぜ
おれ」

誤魔化すよつに頭をなでてやつた

そして招かれやる密が現れた

「探しましたよ巫女」

男の声にエリィは固まり、おれは~~するよつに~~前へ出る

(来たか…)

「あなたが巫女をそそのかした方ですか…、まつたく面倒な」とを
してくれる

男の言葉に手に力が入るのが分かる

そそのかす？ふざけるな、それじゃあまるでエリイは死にたいと願つていたとでも言つのか・・・

「“そそのかす”？馬鹿言つんじやねえ。普通に生きよつとしてるだけだよ」

「それはいけません、彼女には役目があるのです、…そしてあなたにも手伝つてもらひつ」

「はっ！てつとつ卑く“死んでくれ”って言えよ、回つくどいんだよ」

相手はあまり時間をかけたくないのか少しの沈黙を置くと「…やれ」と合図する

5人で同じ詠唱をしている様子を見るとそれは召喚魔法だと分かった

「テメエらが出す奴なんてたかが知れる、せつたと出せよ…」

挑発する俺に相手は笑いだす

「やうですか、ではじご覧いただきましょ。……出の『ベヒモス』」

すると陣から出た黒い霧がはじけるとそれは姿を現したそれを見たエリイは「ひつ」と悲鳴を上げ震えている

高さはざつと3メートル、全長はもつとあるだらつ

4本足で黒い巨体を覆う筋肉でできた天然の鎧、頭から背中にかけて荒々しく生えた獸毛、ギヨロリと動く大きな黄色い目、大きく開きそうな裂けた口にズラリと並ぶ牙、そして目の上に生えた2つの

大きく捻じれた角

魔獸といわれた化け物がそこにはいた

「ベヒモスだと…? クラス5の魔獸じゃないか?」

騎士団が総出でやつと討伐できる化け物だろ? … そうか、だから5人同時詠唱してたのか

驚くおれに男は額に汗をながしつつも笑つて告げた

「ふはは、さつきはあつけなく終わってしまいましたからね。あなたは頑張つてくださいよ」

「…わつきだと?まさかおまえ?」

なぜだつ、そつならないために2手に分けたのに。

「イツら確実に全員捕まえるためにあいつらを優先したのか!!

「ええ、3人は先にやらせてもらいました。實に呆氣なかつた」

よく見ればベヒモスの角は赤く濡れている、3人はあれに貫かれたのか…

「…おい、テメエ覚悟できんんだろ?」怒りが立ちこみ殺さんとばかりに男を睨みつける

「やる気ですか?あなた一人で?」

気圧されるような殺氣を受けて少し怯む男だがそれでも平静を保つ

て聞き返す

「ダメっ！」「げーー！」

エリイが声を上げて必死に止めようとする、人の本能がアレには絶対勝てないと悟っているのだろう

「だめですよ巫女、あなたにはこの方の最後を見てもらいます」

相手はそれをあざ笑うかのように勝ち誇った笑みを浮かべて言う
フシュウと荒く息をたてるベヒモスは狙いをジークへと向ける、目標は背中の大剣も構えずに下を見ていた

「エリイ、離れてろ……」

「ダメー！ジークが死んじゃつよつ」放さないとばかりに抱きついてくる

「信じる、大丈夫だから、なつ。それに言つたら？おれつて“すごく”強いんだぜ」

いつもと変わらない笑顔で言つおれを見てエリイはしばらぐすると
スッと離れ「絶対…勝つて…」といふと涙を流して下がっていく

「もういいんですか？」

「たくはいいからやつれとじろよ

「いいでしょ」

男が指をパチンと鳴らすとベヒモスは猛烈な勢いで地面をかける、

その突進はもはや何にも止められない

それを前にしてジークは避けようともしない

あと数瞬でのところでヒリィはおもわず顔を両手でおさえた

・・・・・・・・・・・・・・

side ヒリーナ

「……ば……、バカな……」

男の驚きが聞こえる

少しずつ手をズラすとそこにはベヒモスの後ろ姿があるがジークの姿は見えない

(やつぱつ……、えつ)

よく見ればベヒモスの下には地面がえぐれて長い2本の線がほどできている。それはさつきまではなかつたものだ
そもそもあの勢いで走っていたベヒモスがあれだけの距離で止まるはずがない

じゃあジークはどこへ行ったのか

「ブオオオオオオオオオオ……！」

ベヒモスが叫んでいるがそれは驚きの故、今まで止められたことのない必殺がたかが『人間』に止められたのだ
そしてベヒモスの向こうで声が聞こえる

「おい……、こんだけか？」

10話 ジークの力（前書き）

時間が…

10話 ジークの力

s i d e 男

(…ありえない、ありえない…ありえない…ありえない…)

田の前の光景にその場にいる自分を含めた全員が驚愕する

視線の先にはベヒモスの角を両手でつかんで突進を止めた男がいる。普通ベヒモスと戦うなら（まず滅多にいない）まずベヒモスの最大の攻撃である突進は避けてそこから攻撃をする。素手で受け止めるなんて聞いたことがない

本当なら一撃で男をしとめてそのあと巫女を生贅にささげるだけだった。

たつたそれだけで終わる楽な作業だったはずなのに…

「何なんだアイツは…？」

焦りを隠せず声を吐き散らし答えを探して巫女を見るが自分たちと同じように驚愕して言葉をなくしている

衝撃の光景に魔獣も驚愕してるのが魔力をとうしてわかる

「何をしているつー早くそいつを殺せ…！」

増加した魔力で力を増したベヒモスは渾身の力で頭を振りはらい、男もベヒモスの急な変化に手を放して後ろに飛んで距離をあけた、おそらく耐えられなかつたのだろう。

「放したなつ、はつ今度は止めると思わないでくださいよー。」

「ああ、メンディからな言われなくとも普通に戦つてやるよ」

そういうと男は大剣を構え不敵に笑つた

side end

先ほどよりも力を上げたベヒモスの突進を今度は受けずにかわしどれくらい力が上がったのか確かめる。

その行動が逃げの姿勢だと判断した男たちが余裕を取り戻す

「そりだつ、そのまま引き殺せ！！」

何度もすれ違いスピードや威力を見るが結局それは自分の脅威にならないことが分かりジークは仕掛けることにした

勢いが止まらず進むベヒモスを追撃して攻撃を仕掛けようとするがそれよりも早くベヒモスは反転して両前足を振り上げおれが来るタイミングに合わせて振り下ろす。その威力に地面にビビがはいり小さなクレーターができるほどだ。

バックステップで後ろに避けたが攻撃の衝撃が地面を揺らしあれが体勢を崩したところにベヒモスは角で刺すように頭を突き出してきた。迫る角を大剣を当ててはじき堪える

接近戦に持ち込み横に回りこんでこっちのペースにしようとするがベヒモスはその巨体に似合わない足さばきで向きを変えたり、ときには壁のような体でタックルをかましてくるなど割と賢いようだ

決定的な攻撃ができるいいがそれでもときどきジークは大剣ではなく素手で殴つたり、回し蹴りを放つて着実にダメージを与えてベヒモスを傷つけていく（むしろ武器よりも生身の体で魔獣にダメージを与えていた）

「そこだつ！」

そして生まれた隙を逃さず横に回るとガラ空きの横つ腹に大剣をたたきつける

転るつもりだったが体が食よりも頑丈らしく浅い傷しか二つかないさすがは魔獣といわれるだけはある。

悶絶するベヒモスだがすぐに前足で後ろ蹴りをする。真横からの攻撃に間に合わず大剣を盾にして防ぎ2メートルほど飛ばされるが着地してすぐスタートを切りベヒモスもこちらに体を向けるがまだダメージが残つていて次の行動が遅れる。そしておれは頭めがけて飛び大きく振り上げた大剣を振り下ろし“バキンッ”という大きな音が響き5分も満たない戦いが終わりを告げた

沈黙の後地面にザクッと大きいとがつたものが刺さる。

それは捻じれた角であつた。

ベヒモスにとつてはいくつもの敵を貫いた勝利の象徴そのものであり、それが折られたと同時に闘争心も碎かれ敵は自分“が”殺す相手から自分“を”殺す恐怖の対象となつた

「ブ、ブオオオオオオオオオオ！」

雄叫びから悲鳴になつた声を上げベヒモスは向きを変える。その先には召喚陣がある、逃げているのだろう。その光景を見て男が「ま、待てっ」と制するが恐怖一色に染まつたベヒモスにはその命令が届かない。

…その姿を見るジークの目は冷たくさめていた

「普通だつたらメンンドイから無視したけど…、お前には仲間を3人やられてるからな。

…悪いが今回は逃がすわけにはいかない」

そう言い放つと走り出し大きく飛んで大剣を振りかぶり召喚陣目がけて投げつけた

ザンッと音をたてて大剣は陣に深く突き刺さり召喚陣は消える

「あつあつまつ、なんてことをしてくれー…」

召喚陣が消されたことに男達が焦り始める。ベヒモスが負けたこともあるが召喚陣が消えたことでさらに顔を青くしている。

召喚陣には空間をつなぐものであると同時に召喚者とその呼びだされたモノをつなぐラインの役目もしていてそれにより召喚者は使役することができる

…つまりそのラインが消えた今ベヒモスには敵味方の区別はない、ただ目に映るものを見破壊するだけの野生の魔獣へと戻つたということが

そしていま目に映るのは黒いローブで体を包んだ人間が5人…、どこからか「ヒツ」という小さな声を合図にベヒモスは駆け出す。

結果…ベヒモスの残つた捻じれた角は再び赤く染まつた

・・・・・・・・・・・・

そして再びベヒモスの目に映るのは同じく黒いロープを着たエリイ。エリイは自分が見られてることに気付くが殺氣を当てられ動けない。

そしてベヒモスが駆ける。…だがエリイは絶望していない、なぜなら今は自分を助けてくれる人がいるから、ジークが自分を助けてくれるから…。

そしてその信頼に応えるように突進してくるベヒモスの前に大剣を手にしたジークが立ち塞がり、今度は今までにない力で”ズウンッ”と風切り音を上げてベヒモスに振り下ろし……決着はついた

1-1話　自由やして選択（前書き）

今作者はテスト中によつ更新が遅れています…

1-1話 自由として選択

最後の一撃にベヒモスは脳天を潰されて絶命し、その巨体は音をたてて崩れ落ちた

「…ふう、手間かけさせやがって」

辺りには無残な状態になつた男たちの死体が転がつてゐる。本当は死なせるつもりはなく捕まえて受けけるべき罠を『えるつもりだつたのだが…

「結局自分の召喚獣にやられるなんて、ふざけてんじゃねえよ…」
逃げられたようで何だかむなしくなつてきて吐き捨てるように呟いた言葉がその場にさびしく響く

「大丈夫か……？」

氣を切り替えるために笑つてエリイの頭をなでようとしたら手に違和感を感じて伸ばした手をひっこめた
見てみれば手はボロボロになり血で赤くなつていた。突進を素手で受け止めた結果だらつ

「あつ」

手の怪我に気付いたエリイは心配した顔をして駆けよつてきて両手でつづるようにおれの手をとり田をつむつた、するとエリイの手が温かくて白い光を発した

「お、おこつよ」れるがー……ってアレ?」

驚いて手を離すとボロボロのはずの手がなんと元に戻っている

「これは… 治癒術? エリイおまえ魔法使えたのか?」

そういえば巫女と呼ばれていたから当然といえばそうかもしれない

「うん。でも攻撃魔法は教えてもらえなかつたからできるのはこれだけ…」

「いやでも凄いぞ? ありがとなつ」

「…………うんっ」

顔をほころばせるエリイを今度はちゃんと撫で本人は慣れたようであくまで優しくな顔をした
ずつとジークにまかせつくりだつたため少しでも役に立ててくれしいみたいだ
そこからすぐ近くで遺体となつた3人を見つけた。儀式で使うつも
りだつたため男たちが運んだのだろう
3人ともボロボロで体に大きな風穴があいている。それぞれの横に
立つと遺品になりそうな物を見つけて回収し、連れて帰れないから
埋めることになった

「ロイズ………… B & a m p ; B、ごめんな助けてやれなくて」

埋葬の準備をしているとエリイが3人に償いがしたいといって近づいて座り込むと魔法を使ったのか傷だらけの体についた汚れを落としてキレイにしてくれた（本人曰く精霊さんに頼んだそうだ）
そしてエリイは埋葬の間ずっと目を閉じて祈るように待っていた

それから身支度を済ませヒリイと向かい合って考えていたことを聞くことにした

「ヒリイこれでおまえは自由だ、もつおまえを縛る物はない、けど…どうする？」

「え？」

その質問にヒリイはこたえきれずに下を向いて考えだす。どうやらわざわまでのことで頭がいっぱいで考えてなかつたらしく

（ハア、やっぱおれつておせつかい焼きなんかな）

答えが見つからず田に見えて暗くなつてこくヒリイを見ておれは微笑みながら手を出した

「おれと来ないか？」

「え？」「不安そうだつたヒリイの顔に光が戻りこつちを見る
「さすがにこんなカワライイ子を一人にするなんてできない主義でね。
まだおれのことを頼つてみないか？」

やさしく書いた言葉がヒリイの中に響く、そしてふるふると体をふるさせ田には涙が浮かんでいた

「おっおい、もしかして嫌だつたか？」と予想外の反応にジークがオロオロする

「私もジークと行きたい！－」

それは今までの少女とは思えない張った声で晴れた顔をしていた

「ああ、みんなへんなことや

1-1 試　自由かじて選択（後書き）

やつといひの話が終わった

「あつジークさんおかえりなさい」

都市についたおれらはまずギルドに向かつた。相変わらず受付で笑顔を放ちながら迎えてくれたティーナちゃんを見たら帰ってきたんだなど実感する

「あれジークさん、ロイズ君と『デルさん』とラッカさんはどうしたんですか？」

「依頼は無しだ、そのことで話がある」

いつもと雰囲気の違う真剣なジークの表情にティーナは何かを感じ場所を変えましょと席を立つた

（あいつら『デル』と『ラッカ』って名前だったのか…）

・・・・・

「そう…ですか。じゃあ、あの人たちは」

頼まれた依頼の真実の目的、彼らの正体、そして大切な仲間の死を同時に知らされティーナはうつむいて何かをこらえようにも手は強く握りこんでいる。彼らを誘ったのは彼女でありその責任を感じているのだろう

「『ごめん、助けてやれなかつた。それと…これを身内の人へ頼む』

そういうて回収していた彼らの遺品となる装飾品を取り出して落ち

込んでいる彼女へと渡した

「はい…確かに受け取りました。責任を持って送り届けます」

それを受け取った彼女は力強く答える。

「ああ、頼んだよ」

ひとしつづけし終えると氣を変えるようにトライアナちゃんがおれの隣に座るエリイへと視線を送る

「それでジークさん、その女の子ですがどうするんですか？」

「それだけ…おれが面倒を見ることにしたよ、エリイも嫌じゃないみたいだからな」

「そうですか、でもジークさんなりきつと大丈夫ですね。ちゃんと守つてあげて下さいね

・・・・・　変なこと　しちゃダメですよ（＝＝）」

笑ってるはずの彼女の背後には鬼の顔が浮かび上がつてなんかどす黒いオーラが見える

（ちがうーなんかいつものやつと違うー…）

「し、しないってイヤマジで…だからそのエガオをやめてください

い」

注意（ところなみの命令）をしてくる我らが看板娘に恐怖を感じ敬語でお願いする

ぶつちやけベヒモスよりこいつの方が怖い、てゆーかエリイが怯えて腕つかんでくるんですけど…

(あれ?それなりにシリアスな場面だと思つるだけど…)

慌てて『ジーグを見てティーナが「冗談です（一|一）」 戻った』
といつて席を立つと今度は真剣な顔をしていた

「今回のことは周辺のギルドや上へ報告します。少しは例の信者たちへの警告になると思つます。ジーグさんたちはゆっくりと疲れを癒してください」

話を終え一人がギルドを去る、いつもは騒がしい建物が今日ばかりは沈黙を放つていた

（～1週間後～）

「ジークーはー やー くーーー！」

皆さん久しぶり、ジークです

たつたこれだけのセリフだと今誰がしゃべったのかさすがに誰かわからぬいだろ？

そしておれがなんでこんな質問をしてるのか、そんな疑問に答えてやる

それはおれも少しひくつこしてるからです

そしてこの片気にはしゃがながらおれを急かしてこるのは誰かといふと・・・

・・・・・・・・・・・・エロイだ

13話 発見

ギルドへの報告をすませるとおれたちは真っすぐ家へ直行してそのまま一先ず寝た

お互いけもの道を歩いてきたのでクタクタなのだ

「次の田」

おれはエリイを連れて都市を廻り歩いた。新しく暮らすことになる土地の紹介を兼ねてエリイの服など日常品を買つていた。（だって持ちモノが今着てるものだけだぞ）

おれには見慣れた光景だがエリイにとつてはどれも新しい発見で驚いている。本人は世間に疎く本などで呼んだものばかりだったらしい。

ときどきおれの手をとつて「あれはなに?」と田を輝かせて聞いてくる姿は子供のようでなんだか妹ができたような気分だ。初対面の時と違い口数も増え笑顔が出ている、本来の性格が戻ったのか新しい生活に自分を変えようとしてるのか、どちらにしても良い変化に違いない

「けつこう歩いたなあ。エリイ、メシ食うか?」

「うん。何食べるの?」

「昨日までおれたちまともに食べてないからな、… そつだな肉でも食べてみないか」

「二ク……肉?」

「そう肉。どうせ今まで肉も禁止だつたらへつまいんだけーあのそ
そるような肉汁に癖になる味は説明できん、これこそ食わなきや人
生損つてもんだ。…食うか?」

「食べるひつ」即答かよ

まだ知らぬ未知の味にエリイは期待を膨らませウズウズしている、

(意外と食いしん坊なのかもな)

そんな事を想像するとなんだか笑えてきた

のちにジークは語る

「肉は勧めなきやよかつた・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「モグモグ・・・・

「・・・・・・・・

騒がしいはずの酒屋では静かに緊張が走りその場にいる全員が同じ
場所を見ていた

そしてその状況を作っていたのは1人の少女だった

「モグモグモグモグ……」

• • • • • • • •

「ゴクンツ

(...# τ_i # τ_i # τ_i # τ_i)

二

「ぬつがあああああーー！マジかっ？またかっ？まだ食つのかーー？」

無情に告げるエリイの言葉にどうとおれられず雄叫びを上げて立つてしまつた

なおも食べたいというエリイの前にはキレイに平らげられた皿が1枚ほど積み上がっていた。

それをこんな女の子が1人で食べたとはとても信じられないからこの目で見てしまつたため認めるしかない

だつて最初運ばれてきたときにダロンに声掛けられて1分ほどで済ませて振り返つたら

「何もなかつたんだもん - ・・・肉は？」つて聞いたら - すぐおいしかつた」つて凄い輝いた顔で言われたよ。

よほど腹が減つてたんだと思つてさ「そんなにウマかつたか。食いたいならこいつぱい食つていいぜ」なんてカツコつけて言わなきゃよかつた！

もともと買い物が目的だったので財布にはそれなりの余裕があつた

のだがエリイの底なしの胃袋を見て次第に皿が積み上がる」と二チラツと確認してしまつ

「ジークは“いっぱい食べていい”って言つたよ?」

「限度があるわつ! おまえスッ、コイ特技もつてたのなつ? 、いつちが腹いっぱいになるわつ! 」

つーかあん時質素なパンとスープだけだつたらーが! ! !

明らかに『努』の感情を見せるおれにエリイは残念そうな顔をしてうつむいた

ちょっとやりすぎたか

そして再びエリイが顔を上げると目に涙を浮かべていた

「・・・・・・ダメ?」

結局あと一〇枚も食われてやつと地獄から解放されたジークだった

「今度もまた行こうねつ(一一四七)」

「…………そうだな。当分はお預けだ」

燃え尽きたよ…………おれも…………金も…………。

………………………………

気持ち良さそうにベビッシュで眠るエリイを見て「やつと寝たか」とため息をつく

エリイのハラハラさせる行動はあれだけではなかつたといふことだ

ほんとあの時の無表情から想像できない

夜エリイの日常品を整理し、「買つて来た服を試して着てみたら?」
と言つたら

突然エリイがあれの日の前で躊躇なく服に手をかけて着替えようとしたので慌てて止めた

「まつ馬鹿!」「で脱ぐなー?」

「?」

エリイは「え、なに?」と不思議そうに聞いてくる

どんな生活を送つてたんだらつか

「こいつを育てたあいつらをマジでぶつ殺したいと思つた

(ハア、いつや別に教えることだがたくさんありますね)

・・・・・つーかおれの方が持つのだらうか?

13話 発見（後書き）

追加

- ・エリイは肉好き

ねむけ やのへ（繪書き）

先の出来事を別視点で書きました

おまけ その2

ある日僕は1人の女性と出会った。
長く伸ばした金色の髪を頭の後ろで1つに結んで
顔はうつむいていて見えないけど服は貴族のような黒いドレスを着
ていた

他に分かつたことといえば彼女が泣いていたこと
そんな彼女につい声をかけたのが始まりだった

「ねえ、大丈夫？」

・・・・・しかし

「気安く話しかけるな下郎！！」

いまだに僕はこのとき彼女はホントに泣いてたのか自信がもてない

・・・・・

鉱山資源で有名とされる都市『リッガル』

昼間に人が行きかう道の中でマントを頭までスッポリかぶつた奇妙
な2人がいた
とうりすぎる人から奇妙な目で見られているが2人は気にすること
なく何かを話していた

「おいジェスさつき頼んだ食いものはまだか？私は腹が減った」
「待つてって言つてるでしょエリス。だいたい僕たちは追われてる
んだから少しばかり我慢してよ」

「そんなの知らん。いいからさつさと行つてこいつ！」

「どうやら内容は普通（？）のようだが察するにあまり仲は良くなさ
そうだ

「もう、わかつたよ。ちょっと行つて来るから絶対ここから離れな
いでね。

知らない人に話しかけられてもついてっちゃダメだよ。それから…」

「いいから早く行け！おまえは母親か！」

「はいはいわかつたから。まつてて」「何すんだこの餓鬼！…」・・・

？」

騒ぎの出所をみるとそこには冒険者風の大きな2人の犬顔の獣人（男）が2人とそのすぐ前で尻もちをついた白い色の髪をしたきれいな女の子（僕と同じくらいだろうか？）がいた。片方の男の腹のあたりが何かのソースで汚れている。

少女は手に串が刺さった肉を持っているのを見るとおそらく少女がぶつかつてその拍子に汚してしまったのだろう。

「おい、どうしてくれんだよガキ。これまだ新しいんだぞ！それを汚しやがって

・・・ん？よく見ればお前良いツラしてるなあ、どつかの貴族の子か？

ならちゅうどいいこれ弁償してもらおつか

「い」「ごめん・・なさい」

「謝罪はいいから金出せつて言つてるんだよ…」

もつここれはカツアゲに近いな

男は自慢の一張羅を汚されたことに激怒して一方的に怒鳴りつけていて少女はそれに怯えながら謝っているが許してもらえず今にも手に持った財布を取られそうだ。

だが周りの人は我関せずとそれを避けて歩き誰も男を止めようとはしなかった。

その光景にエリスはつまらないようなものを見る田で見ていた。

「おいジェス、あの子が持つてる食いものは何だ？」

「クニールつていう味付けして焼いた肉を串に刺した一般的なものだよ。それがどうしたの？」

「ふむ、私はあれが食べたくなつてきた。あの少女に聞けばどうあるかわかるだろう

ジェス、行つて聞いて来い」

つまりそれはあの子を助けて来いといつことなのだらうか……

「でもエリス、あの2人見るからに獣人で強そなんんですけど……」

「

僕はまだ15歳だよ

「それがどうした、お前も戦士だらう。安心しろござとなつたら助けてやる」

「それって僕が行く意味ないじゃんつ。心配なら自分^お」「いいからそつをと行け」はい！

え、情けない？しようがないじゃん。だつてあと数瞬でアイアンクローが決まってたんだもん

もう、根はいい人なのに性格が歪んでるんだ

「あのう、すいません」

「ああ！なんだガキ、俺は今お取り込み中なんだよ。シッシ」

勇気を出して言つてみたが全然相手にされず軽くあしらわれてしまつた

だが見なかつたことにもできないのでつづけて言つ

「大の大人が女の子に怒鳴り散らすなんてみつともないからやめましょう」

それなりにやさしく包んで伝えたが頭に血が上つていた男にはただの悪口にしか聞こえず逆切れを起こしてきました

「なんだと人間？じゃあなんだ、お前らが何かしてくれるって言うのか」

「え？ “お前ら”？」

「後ろのそいつも仲間だろうがよ、同じ格好してんじゃねえか」

相手の指摘に後ろを向けばエリスがいた

・・・・・ てあれ？明らかに僕たちから半径4メートルに人がいない。

危険な空氣に皆非難を始めている

「ちようどいい、こつちはストレスがたまつてんだ。ちょっと相手してくれよ」やばい

「説得失敗しちゃつた…どうしよう…？」

相手が獣人じや分が悪い

「やはじけになつたが、やれやれ仕方がない」

そつするとエリスは片手を前に出して魔法を使おうとする

「やはりって、・・・・・ってだめだ。力を使つたら居場所が知れるー！」

僕の声に反応してエリスは固まった。

するとそのままにもう一人の獣人が素早くエリスに接近した
犬型の獣人のスピードは俊敏で僕は止めることが出来ずに油断した
エリスが拘束されてしまった

「くそっ、放せ！」

「あつぶねえ魔法使えんのかよ、だがこれで使えねえ！」

エリスは暴れて抵抗するが獣人の力は子供が対抗できるものではなく意味をなさない
それに暴れてたせいで顔を隠していた部分のマントがとれていた

「おい、こいつは抑えたからソイシもつやつちま・・え・・・よ?」

一気に形成逆転したはずのエリスを拘束した男が僕を見て不思議そうにしている

いや、正確には僕の後ろの光景に驚いていた

「いやーうちの連れが世話になつたみたいだな、お礼ならおれが代わりにやってやるよ」

そこにはいつの間にか高めで笑顔の青年がいてその足元では少女に怒鳴りつけていた男が悶絶して沈んでいた

14話 支度（したぐ）

あれから1週間がたつた

エリイは見違えるほど明るくなつて感情がだせるよになつていた
(もういちいち『…』で打たなくていいくらい明るくなつたな)

近所の人達にも受け入れられ今ではおれの妹として扱われてる
・・・近所のガキ達と一緒に遊ぶのは精神レベルが近いから
だろうか

ただ昔の習慣が抜けないのか朝起きたら1分くらい窓の前で祈つたり食事の時にもそれが少し出でてしまつていて
本人にとつては癖みたいなものなので別に強要して止めろなんて言わなかつた

ちなみにエリイが自分もギルドに入りたいと言つたのでギルドの仲間となつた

その時の野郎どもの反応ときたら

「ヒヤッホーウー！美少女來たーーー！」
「いくつ？おれとパーティー組まない？」
「どけつ俺が組むんだ！」
「ティーナちゃんもイーけどこっちもスゲーゾー！」
「おいっ、なんでジークが一緒に連れてきてんダ！？」
「しょーかいしろつ！…」

男たちの波に気圧されてエリイは俺の後ろに隠れるよじがみついてる

(「マイシラヤツチャオウカナ）

さすがに頭に血が上つてきた

「チレ・・・ヤルゾ」軽く殺氣を飛ばす

ホントに蜘蛛の子のように散る男たちは何とも言えない光景だった
エリィはもうじくつか依頼と一緒に受けているが主に都市内での手伝いだ。実践はまだいいだろ？
魔法の才があるといつのはわかつたがあいにく教えてくれるやつがないないので

唯一使える治癒術を役立たせていた

護身用で使えるよう誰かに頼みこんでみるか

「あつ、そういうえばエリィ今日から別の都市に行くぞ
「べつのところへえー、なんで？」

「こいつ言つよつになつたなあ

「ああ、『リッガル』って言つてなそこは鉱山資源が有名でな。頼まれモノがあるんだよ
ほら、あのちつちゃいジッちゃん
「あつ、おじいちゃんなんだね？」

エリィが『おじいちゃん』と呼ぶのは鍛冶屋のじつちゃんのこといやあ、連れて行った時は面白いものが見れた

回想

「ちーつすジッちゃん」「“ちーつす”じゃねえ！お前いいかげんに・・・て、そのこ誰だ？」

おろ？怒んなかった？

視線の先には目をキラキラさせたエリイがいた。なんかウズウズしている

「エリイって言います。わあちつちやいんですね『おじいちゃん』」「ふー」

今こいつは何といった？

ジッちゃんは見た目があれで現役バリバリで怒鳴り散らすから誰も『おじいちゃん』なんて言つたことがないしジッちゃんも年寄り扱いされるのを凄く嫌がる

「なつ、誰がお~」「うわあ、ちつちやこのこムキムキですか~」
「・・・むっ」

怒ろうとしたジッちゃんだがエリイののほほんとした空氣に負けてしまが出せないたようだ

相手が怒ろうとしたにもかかわらずエリイは小動物のような雰囲気を出してはしゃいでる

(ジッちゃんが負けた！?)

まさかのエリイの勝敗に驚愕する。

ほう、ジッちゃんはこのタイプはだめなのか。

だったら今度来る時もHリイを連れてくれば・・・」「ゴスッ

「いじえ！？」

なんで殴られた！

「テメエは顔に出すぎなんだよ」

「くそ、いいせーこのことギル、で面つぶらしてやるー。」

「ちょ、おー！」

「行くぞHリイー。じゃあなージッちゃんーーん」

「あの・・・みひじくおねがいしますー。」

して退散

残されたジッちゃんはポカーンとしていた

回想終了

「そ、ジッちゃんの頼みモノ。まあ準備するだ

「むー、昼からフHレ君たちと遊ぶつもりだったのにー」

パーと頬をふくらますその顔はまるでリストのようで保護欲がわいてくる

・・・仕方ない

「あー、そーいえばリッガルにはクールつていゆー『肉』のメシがあつたなー。

ピクッ

串に刺さつて食べやすくてうまいかつお手頃で一ぱい食えるのになー。

シュンッ

そーかーHリイは行かないのかー。残念だつたなー、行きたくない

ならしようがないかー

サッ

そういうて振り向くと

「ジーク何してるの?早く行こ!」

もうすぐ元に支度を終えているヒロイイがいた

(金は多めだな…)

14話 支度（したぐ）（後書き）

今日中にまた投稿したいな

15話 鉱山の都市『リッガル』

side ハリイ

リッガルには馬車を使って3時間ほどで着いた。

本当は近所の子たちと一緒に遊んでいたかったのだが聞き捨てならないことを聞いてジークについていくことになった。

お肉をもち出してくるなんて卑怯だ。

でも、“安くていっぱい食べれる”というのでがんばりつ 何を頑張るといつのだ

ジークは馬車の中で何故か私を見ながらしきりに財布を見ていた

「大丈夫だよな？・・・ やすがに足りるだろ。・・・ でもな・・・ なにか考え方をしているようなのでそつとじつおへこじた

着いたと言われ馬車から下りると鉄と土の匂いがした。

私たちがいた都市ほどではないが人でにぎわっているところが似ている。

都市のすぐ後ろには大きな山がそびえ立つように連なってる。

私たちが住む都市を『海の都市』と例えるならここは『山の都市』だろう

とうりすざめる人は比較的男性が多く筋肉質な体をしている。

「ねえジーク、ムキムキがいっぱいだよ

「ふつ、ヒューは炭鉱で食つてるやつが多いからな、必然的にそりゃるんだよ。

ほら向こうに『テッケー山』があるだろ？みんなあそこで働いてるんだ。あとはそこで取れた鉱物を他の都市に運んだりここにいる腕利きの鍛冶屋がそれ使つていろんなモンをつくるんだよ。

だから武器も安かつたりしてな、ここで一本買つつもりなんだ」

ジークは私の素直な発言に笑いながら答えてくれる。

並んで歩いていると急に良い匂いがしてきた。…………「これは！？」

「おっ、あつたあつた。ヒリイ、お待ちかねのクーラルだぞ。
金を渡しどぐから好きなd「10本くだせいつ！」って早、えつ1
0！？」

ジークが言い終わる前にはもう頬んでしまった。

店員は私の急な注文と10本という数に目を丸くして驚いていた

「じゅ、10本はさすがに……あつもしかしてお嬢ちゃんはあそこ
の兄ちゃんと食べるのかな？」

なら納得とうなづく店員だったが私が「ううん、私一人だよ」とい
うとさりに固まってしまった

「おこおい、別にいいけどそんなに持てるのか？持ちやすこよつこ
串に刺してるのに

そんなに持つたら意味ねーだろ？……すいませんやつぱ2本で

「2本じゃ足りないもんつ」

「いや、威張つて言つたなよ。少しずつ食べればいいだろ。せひ

ジークは受け取った2本のクーナーを一本と膨らみのある袋を私に渡すとどこかへ行こうとした

「あつ、私のお肉ー」

「ヤニかよー? 別にいいんだまだあるんだから。ちゅうと用事済ませてくるから」「じ邊で待つてねよ」

やつこつてジークは手をふりながら去つて行った

「すいません。もう一つください」

「あはは、はいよ嬢ちゃん。熱いから気をつけた

・・・・・

それからジークはちよつとしても帰つてこない。暇だから探検してみようかな?

もともと好奇心が強いヒリィは周囲のものに興味を引かれていてずっと我慢していたが

堪えきれずにその場を離れてしまった。

「へへ、へ

ここはあの都市とは違つけど不思議なことがいっぱいあって楽しい。ジークがないのは不安だけど我慢するよ。

このときエリイは鼻歌交じりにスキップしていて周りを見ていたので前への注意が散漫になっていた。

そして前に立っていた獣人2人に気付かずにそのまま「ボスッ」つとぶつかってしまうのだった。

side end

side ジーク

(あー、思ったより時間がかかつてしまつた)

用事というのは武器の調達のことで武器屋に行つていたのだ。当然買うのは大剣なので安くなると言つても金がかかるので頑張つてまけてもらつたのだ。

「ソレなら辺だつたな。・・・・・あれ? いなくね?」

見渡してもエリイの姿が見えないのでクーナーを売つていた店員に聞くことにした。

「なあちよつと、わつきまで白い髪の女の子がいたはずなんだけど知らなかいか?」

「あー、あのすゞい嬢ちゃんね。ほんとに10本平らげるんだから驚いたよ。

あつ、居場所かい? そうだねえ、わつきソレを離れて向こうにスキンプしていったよ」

(やういえばあいつは好奇心の塊だつたな。1人には失敗だ

つたか)

「やつかりありがとなつ」

「いいえいいえ、それといijせ「ロロシキがいるのも有名だからね。
『氣をつけて』

店員の言葉が不安をあおる。

そういえばあいつの底なしの腰袋を考えて多めに金渡したし何より
あの姿だから獲物にもつてこいだろつ。考えれば考えるほどいや
な」としか浮かばない。

そんなことを考えてると歩行人がとんでもないことを話していた。

「おい、あれ大丈夫かよ。相手は獣人一人だつたぜ?」

「確かにな、それにあんな少女が獲物じゃ」「おいあんた!...」「うお
お!...な、なんだよ兄ちゃん?」

「その少女って白い髪をしたきれいな子だつたか!?」

「なんでそんなの、あ、ああ。確かにそんな子だつたよ」

間違いないつ!..

「やつに連れてけ!..」

有無を言わさず案内してもらうとそこは人だかりの中にぽつかりと
空間が出来ていた。

見ればガラの悪い犬型の獣人が2人いて1人はエリイの手をつかみ財布を奪い取ろうとしてその前に何か話しているマントの人が何か話しかけている。

もう一人の獣人は後ろに立っていたマントの人へ接近していった。
おそらくマントの2人がエリイを助けってくれようとしたのだろう。
だがすきを突かれて1人のマントが捕まり一気に勝負が決まつてしまつたようだ。

エリイを見れば怯えながらも必死に抵抗して頑張っていた。

・・・・もうあれだよね？ヤツチャツテイイヨネ？

我慢の限界に来たおれは“おそらく……”の時にはすでに行動を起こしていた

チヨンチヨンとエリイをつかんでいた獣人を後ろからつつく

「あ？ なんだよ！ 外野はすつ k 「ドスッ」 ・・・ つか」

「つ！ジーグ！！」

我慢の限界だったのはエリイも同じだったようで俺にしがみついて泣き出してしまった。

舌暴は面えていたせいに、一瞬は体を一〇〇%汽し彦も涙でタクタク

絡まれたのが獣人なのでさらに怖かつただろう

「おい、 いのちは抑えたかソイツもうやつちま・・え・・・よ?」

向こう側でもう一人の獣人がこっちを見て不思議な顔をしている。

今おれはどんな顔をしてるのだろうか

「いやーうちの連れが世話になつたみたいだな、 お礼ならおれが代わりにやってやるよ」

・・・・・まあシケイは確定だな(笑)

1-6話 オシオキのちに田舎こやしと正体（謹書モ）

キャラ設定追加します

16話 オシオキのちに出会いそして正体

「さて、そこな獣人さんや。覚悟はできるかな（一ノ口）」

そこには沈黙が出来ていた。立っている獣人は何が起きたか分からず顔を白黒している

「なつなんだよテメー！ルドに何しやがつた！？」

「べつにー。ただ殴つただけですけどー。へーこの犬さんはルドくんつていつのかー」

ジークは場違いなまの抜けた声で相手を馬鹿にするように答えた・・

・あ、倒れてる獣人を踏んでる。

仲間がやられてるのを見て獣人は拘束していた人を放してせめよつてきた。

「殴つた？ふざけるな！普通の人間が獣人に素手でやれるわけねーだろ！」

仮にも俺達は6階級なんだぞ！－

「わーすごいねー。でもなんできみたちはこんなことしてるのかな？」

不気味なほどに笑顔を顔に張り付けて拳をボキボキ鳴らすジークはまさに不気味だった。

異常な雰囲気を纏うジークに獣人の野生の感が“こいつはヤバイ！”と警告をつげる。

「そ・・・それは、そのガキが・・・俺達にぶつかってきたから」「まあそんのはどうでもいいさ。俺が言いたいのはな・・・」

押しとどめられた怒りが爆発しジークは獣人に殴りかかった

「エリイにアザができたらどうしてくれんだコノヤロー！――！」

「ちがつそれはテメ・がやつたルド「ドギヤツ」ギャイン！」

問答無用の『ジーク怒りのアッパー』をあごにモロに喰らった獣人は人混みの頭を越え

きれいな放物線を描いて10メートルほど飛んでいった。

人々が見つめる先には大の字になつて1発KOしている獣人。

本人は獣人で6階級だつたらしいがあのとんでもないアッパーは見事に決まっていた。

・・・生きてるだろうか？

・・・・・

かくしてカツアゲ事件を済ませたジークは助けに入ってくれた二人組と一緒に食事をしていた。

マントの2人はもう頭を隠してはいけない（男が『ジエス』、女が『エリス』というらしい）

他の客の中での出来事を見ていた人たちはチラッと見てはビクビクしている。

「いやー助けてくれてありがとな君たち」

「いえつ僕たち結局何もできなかつたし・・・逆に助けられたり、いーんでしようか？奢つてもらつちゃつて」

「本人がいいと言つてるのだから奢らせればいいだろうに。すまない、これとこれをくれ」

「え・・・エリス、この人助けてくれたんだよ」

「いって、出て来てくれてなかつたらエリイがどうなつてたかわ
かんなかつたし、

ほら、エリイお礼言つとけ

「あの・・・ありがとひざやります!」「ど、どういたしまして

「うむ、いい子だ」

それよりそつちの子は助けはこらなかつたんじゃないか?」

「あ・・・どうでしようかね?」「ほう

なにか触れられたくないところを突かれたのか少年のほうは言葉を
濁し始め、

少女のほうは感情のまま動いていた男が意外にもよく“見ていた”
ことに感心して呟いた。

「まあ言えないことだつたら言わんでいいぞ。格好からして“ワケ
あり”なんだろ?」

「すいません。あのつ、ジークさんつてすごく強いんですね。

6階級の獣人を素手で倒すなんて何したんですか?」

話を変えようと少年は逆に質問を始めた。

「だから“ただ殴つた”だけだつて、別に魔法つかつたわけじゃね
えし」

「魔法も使わずにー?」

ジークの意外な答えに驚くジェスだが、さらに続く言葉はどんでも
なかつた。

「「うとら4階級なもんでね、あんなの何匹いようが一緒に」

「4・階級」

驚愕の答えに言葉を失うジエス。

それもそうだらう、

6階級でさえ国の騎士以上なのに4階級といえば単独でドラゴンを撃破できるといわれる種族関係なしの異常階級である。

そんな桁外れの存在が自分たちと一緒に食事をしてかつお話をしているのだ。

いつの間に仲良くなつたのかエリスとエリイは隣同士であるで姉妹のように話している。

いつも強気で冷静なエリスもさすがに驚いていた。

「ねえエリス。『4階級』ってどれくらい強いの？」

「そ、そっさな・・・魔物でも魔獸に属される化け物を一人で倒せる。

我らの種族でいえば伯爵か侯爵に匹敵する力はあるだらうな」

「エリス！」

「なんだジ・・・しまつた」

「？」

まさに隠していたことを言ってしまったことにエリスがはつとする。エリイのほうはよくわからなかつたようだが4階級に属するジークのまづはいやでもわかつてしまつた。

「あのやあ、もしかしなくてもお前ら魔族だつたりする?」「「」から小声

「えつ、驚かないんですか?」

「驚いてないわけでもないけど、魔族は見たことあるからな。

わかつてゐよ魔族にもお前らみたいのがいるつて」ことくらこ

内心ドキドキしてゐる2人をジークは安心させるよつにニッと笑う

「言わないから安心しどけつて。何よりお前たちはエリイの恩人だからな」

「・・・ありがとうございます。ジークさんみたいな人間がいてくれてうれしいです」

それでも小声で話すのは人間と魔族が決していい関係ではないからで、もし人間の領内で魔族が見られれば問答無用で殺されてしまう。むしろジークのような理解者があかしいのだ。

ジークの反応にジェスはホッと胸をなでおろし、エリスもすまないと言つた。

食事を終えてジェスとエリスに別れを告げたジークとエリイはそのまま帰つていた。

「ねえジーク、エリスとジェスいい人だつたねー」

「また会いたいなあ」と笑つてゐるエリイ、まあそつだなと言うところだろうが・・・

ピシィ「あうっ」

エリイは俺から受けたデコポンに可愛い声を出して怯む。

「全く・・・、ホントに危なかつたんだからな。しつかりしてくれ

「よ

怒つてはないが心配そつた声でいつ

「うさ、・・・『めんなさこ』 よし許す

あれ達は帰る途中にすゞこ発見をしました。

「ジーク、見て見てージェスとエリスだよー」

「はあ？ こるわけないだろ・・・て、張り紙かよ。えーとなにな
に・・・

『この2人求む！（注意）女は生きて、男は生死問わず』・・・
・・・

「エリイ・・・

「んー、なにー？」

「多分また会うと思つ

「ほんとつ？ やつたー」

おれの悪い予感はよく当たるんだ・・・

16話 オシオキのち出金こそして正体（後書き）

爵位

低い方から

男爵・子爵・伯爵・侯爵・公爵

17話 嵐の前の静けさ（前書き）

更新遅れています。

長く続いたんですけどやっと終わったので今日から更新していきたい
と思います！

17話 嵐の前の静けさ

リックガルの出会いから3日過ぎ、予想していたあの2人との再会はなかつた。

あの2人は魔族だから身を隠していたのかと思つていたが手配書が回つてるとするとそれ以外の理由があつたのか。にしても魔族を生け捕りにするなんて国もどういう魂胆だ？

「ねーねージーク。何だか最近いつもよりもぎやかになつてきてない？」

街中を一人で歩いているとエリイはいつもと違う雰囲気に気付いた、そうかもうそんな時期だつたな。

「そういえば言つてなかつたな。ちょうど明後日にこの都市の闘技上で大会があるんだ。

前に見せたら？『デッケー丸い場所』

闘技上は都市の中心に位置し、参加者たちが戦うリングを3メートルの高さの観客席が円に囲み客席は段を増すことに高さも増し一番高いところで6メートルもあり、見ただけで迫力を感じさせる。

間近で見たときエリイは驚いて口を開けてぽかんとしていたな。

「うん。それで大会つて？」

「ここは傭兵の都市でもあるから腕に自信のある奴らが集まつてお互いの武を競い合つんだ」

「へー。じゃあジークは出ないの?」

「つ、痛いところを突いてくるな・・・

「まあ・・・おれはいいんだよ、十分強いから

「なんで? ジークなら優勝できるでしょ」

「それはまた今度で。それよりこの時期は出場者以外にも商人やいろんな所のいろんな人たちが集まつてくるから出店なんかでもるんだぞ。滅多に見られないものが見れるりするかもな?」

知りたがり屋のヒリイにはまだ楽しめるだろ? 田を輝かせて両手でウキウキと弾ませている。

「お肉もあるかな?」

「ほんとお前は肉好きな。あるよ、だから楽しみにしてた」

「ああ、出費が、話それたからいつか。

「でも這田は気をつけろよ、金持ちも集まるからそれを狙つた奴らも出てくるんだ。」

「ほら、リッガルの時みたいになりたくないだろ?」

「はあー」

不安の塊だからな、一の舞は起こしたくない。

それから渡し忘れてたジッちゃんの頬みモノを届けにあれ達は鍛冶屋に訪れていた。

ほつたらかしにしていたからまた大玉玉を食らい頭に立派なタンコブができてしまった。

もはやおれがここでタンコブを作るのは来た時の定番となつているのではないだろうか。

「あのなあ、今回は仕事で頼んだんだ。この時期は注文が多くて大変なんだぞ、つたく

「だつたらギルドで依頼しりよーフジーに言つてきたから私情かと思つたろーが！」

「たまたまテメーが近くにいたんだよ、テメーが悪い

「ジッちゃん・・・さすがのおれもキレる」とつてあるんだぞ」

「ああんつ、なんだ怒つたらなんかあるのか？」

「んだとジジイ」

一人の間では火花がなり今にもたがいに掴みかかるとしていた。

「ケンカはダメだよー！」

「「「」」

見かねたエリイの仲裁に2人が止まる、結局おれとジッちゃんはエリイに弱いらしい。

咳を鳴らしてジッちゃんが気を取り直し仕方なくやめた。

「でもホントに大変そうだね、ここ人があいつぱいいるよ」

「大会に向けて装備品を鍛えなおしたり新しく新注する奴が多いのさ。大変なことには変わりないがこれが生きがいだからな、腕が鳴るつてもんよ」

エリイの言葉にジッちゃんはまるで自分が誉められたかのよつこ言つ、確かにこの時期の鍛冶職人たちは大量の仕事に追われているが楽しそうにしている。

「ところでジーク、テメーも新しくしねーのか？」

「え？ああ、リッガルで買った」

「なんでだよ！」

「アンタの所の利益になりたくないんだよ！」

「ンだとテメー！」

「やんのかオラフー！」

「いいかげんにして！」

結局ケンカしかしないおれとジッちゃんは引き離され、いたら邪魔にしかならないのでわざと立ち去った。

「あれ？ ジークじゃん、またエリイちゃん引き連れてデート？」

「あ、ダルンなんだ」

「茶化すなダルン」

声掛けられその方に向くとダルンがいた。買い物の途中だったのか手には大きな袋を抱えている

「うそつせじヨーダンだつて。いつもも明後日に向けて準備してから忙しいんだよ」

「なんだお前今度の出るのか？ いつもはでないのに」

ダルンは意外にも6階級で双剣を使った素早い攻撃をしてくる。

まあ確かにダルンほどなら上位を狙えるだろう。

「知らねえのか？ 今日王都の騎士団が来てるらしいくな、なんでもその中で何人か出場するらしいんだ。

だからここで活躍して稼ぎ先を見つけようかな

「騎士団？ それも王都の？ 珍しいな、いつもは來ても出場はしないの？」

「訓練の一環じゃねえの？」

「やうだな、もひーの頃厄介事によく会つから考え癖がついたよ」

「そのお人よしを直したらお別れできるかもな」

「余計なおせわだ」

「頑張つてねダルンさん」

「おひ、ヒリイちゃんに言われたら頑張つやうぜ」

まかせなさいと力を誇示するようなポーズをとつて決めるダルン、なんか調子のいいやつだ。

「それじゃジーク俺は用事があるから行くな」

「ああ、おれの分もがんばれよ」

「ははっ、やうあるよ」

ダルンと別れたジーク達はとくに何もすることがなかつたのでそのまま家に帰りその日を終えた

・・・はずだった

18話 再会それは必然

「ん・・・あー。なんだまだ夜か

今日は早めにねたが逆に寝すぎて夜中に目が覚めてしまったのだ。
窓を見ればまだ魔灯の光がぽつぽつと光っている。
エリイも同じくらいに寝たはずだが起きる様子はなくすやすらと眠
つている。

またすぐに寝ればいい話なのだがジークの目は完全にさめてしまっ
たため横になつてもなかなか眠りにつくことが出来なかつた。

しかし、じばらぐすると外で何か音がするのが聞こえた。それは金
属がぶつかりあつ音やときどき人の声も聞こえる。
人が消える夜には聞けない金属音。この時期は鍛冶職人が夜も惜し
んで鉄を打ったりするらしいがあいにくここは遠すぎて聞こえるこ
とはない。そしてその音は段々と近付いてきている。
つまり・・・

「厄介事か」

ジークは事の正体を確かめるため起き上るとエリイを起しあらない
ようにそつと部屋を後にした。

sideジース

「エリス! ここは僕が引受けるから早く逃げて……」
「しかしつ「いいから早くつ」くつ、スマン」

援護に回ろうとしたエリスだが逆に強く逃げろと言われ仕方なくその場を任せて走り出す。

その肩には彼女よりも大きな女性が腕をまわして、腹をやられたのか血を大量に流している。

エリスは捕まるわけにもいかないし、何より仲間がけがを負つてるので自分が頑張るしかない。

対峙するは銀色で統一された鎧を身にまとった騎士5人。1人1人の力は僕には及ばないが巧みな連携を繰り出され防戦一方になつている、幸い相手は街中ということで騒ぎを大きくすることが出来ず魔法を使わずに剣や槍などで連携して襲つてくる。

それぞれをいなし、かわし、うける。反撃を試みるがすぐに敵の援護が回つて止められてしまう。自分が足止めになればそれで勝ちになるが相手はそれをよしとはしなかつた。

「くそ、やむを得んな。多少の被害なら仕方ないだろ。各自魔法の使用を許可する！」

リーダー格の男の命令に反応して騎士のうち2人下がり詠唱を始める。ジェスが止めようと奮闘するが3人の騎士が必死に守り手が届かない。

「風よ、その身を刃とし我が敵を切り刻め『エア・スラッシュ』」「水よ、その身を変え我が敵を貫け『アイス・スピア』」「つ！」

途端に目の前の騎士たちが飛びのきその先からジェスめがけて数本の氷の槍と見えない風の刃が殺到する。すんでのところで横に飛んで氷の槍はかわすことが出来たが目視できない風はかわせずジェスの太ももに掠めてしまい切り裂かれてしまった。

「ぐつ」

「機動力は削いだ、どどめを刺すぞ！」

勢いづいた騎士たちは武器を掲げどんどん距離を詰めてくがジェスは足のダメージでにげられない。

（ツ、このままじゃ…）

勝機と見た先頭の騎士が走り出ししそのあとに続いて残りの騎士たちもジロスにどじめを刺すべく走り出す。

初撃はかわせるがそのあとに続く騎士たちの連携はきっとかわせない。

「ガツ！？」

ジェスの横でビュンと音がしたかと思うと先頭で走っていた騎士が突然後ろにはじけ飛んだ。

突然の事態に騎士たちは攻撃を止め倒れた騎士を囮むようにして警戒を始める。

「どうした！？」

「くそつ、詠唱した様子は見られなかつたぞ！」

(違ひ、僕はなにもしていない。・・・じゃあ誰が?)

夜の利く僕はすぐに倒れている騎士を見る。
被っていた兜は何かに当たったのか大きくへ口みその衝撃で騎士も
気絶したようだ。

(・・・ん? 近くに石が落ちてる?)

疑問にふけっているとその答えは後ろから歩いてきた。

side end

「おたくらこんな夜中に何してんだよ、つーか家壊すな」

緊張が走る場にそこにはいなかつた人物の声が響く、ジェスが振り
返つた先には暗いせいでそこまで見えないが身長が高い男が10メ
ートル離れた場所に立っていた。

男は手に拳くらいの石を数個あつてそれを上に投げて取つてを繰り
返している。状況からして騎士を奇襲した犯人はこの男で間違いな
いだろう。

騎士たちも予想外の乱入者に警戒を高め身構えている。突然の奇襲
に仲間をやられ気が立つた騎士の1人が今にも戦闘を始めようとす
る。

「チツ、別の仲間がいたのか」

「仲間? 何のことだよ」

「とほけるな! 我らを襲つたのはキサマだらう!」

「待てつ、すまない貴殿はもしやここの住人なの?」

「ああそうだよ。外がうるせーから来て見ればどんちゃん騒ぎして

るわ武器どころか魔法まで使って家を傷つけるわ、ケンカにしては度が過ぎてねーか騎士さんたちよお」

男の挑発的な態度に冷静な騎士は少し考えると話し始めた。

「それはすまなかつた。だが私たちは今罪人を追つている最中でな、抵抗するため仕方なかつたのだ」

「罪人？ 見るからにガキだが騎士が5人がかりで殺しにかかるほどのものなのかな？」

男はあくまで引かないようだがその言葉に騎士たちが笑みを浮かべる

「見た目はただの子だがソイツの正体は魔族だ。つまり貴殿がソイツを助ける必要はない。さあもうお帰り下さい。魔族は私たちがきちんと討ちます」

正体をばらされたジェスはついに逃げ場をなくした。
自分が魔族と分かつたなら助けてくれたこの男も敵に回るのは明らか、この6人を相手にしてはもう勝機はない。

体から力が抜け脱力したジェスに騎士は勝利の笑みを浮かべ無防備になつたその肩を掴む。

その光景を見ていた男は特にリアクションするわけでもなく平然としていた。

「知つてたさ。指名手配されてた2人組の片割れの方の『ジェス』だろ？」

「えつ、・・・なんで名前を」

ジェスは急に名前を呼ばれて驚きが隠せなかつた。

確かに手配書で容姿は知られているが名前は知られてはいないはず。なのにこの男は自分を知ってるという。

男はすんずんジェスと騎士の間に入りジェスを掴んでいた騎士の腕をとつた。

このときジェスは初めて男の顔を見てその正体に気づき驚く。

「何をする？」

「一つ勘違いしてねえか？おれはこの騒ぎを止めに来たんじゃない」「？・・・では貴殿は何をしに来たんだといつのだ？」

騎士はまたしても邪魔されたことにいらだち男を睨みつける。気づけば男はにやりと笑い空いた方の手を振り上げていた。

「恩人を助けに来たんだよ」

19話 種族は関係ない

ジェスを掴んでいた騎士を力づくで引き離す。そしてよろけて無防備になつた（鎧フル装備）腹にうねりを上げた拳が容赦なく突き刺さる。

鉄の鎧はその意味をなさず圧倒的な破壊力で破壊され、騎士は衝撃で吹き飛び2回バウンドしてやっと止まつた。

突然の出来事に周りは時間が止まつたかのように静かになりその状況を作り出した本人、ジークが動き出すとともにジェスが気を取り戻した。

「じつジーク！？なんでここに！」

「説明はあとだ、今はあつちに集中しろ」

動搖するジェスの横にジークが並んで身構える。

視線の先にはジェスと同じくらい動搖しうるたえている騎士たちがいた。

騎士らはまさかこの男が少年を魔族と知つてなお助けるとは思つてもみなく、さらにただのパンチで仲間がやられたという事に驚愕が隠せないようだ。

「きつキサマ！人が魔族を助けるなんて正氣か！？」

「種族は関係ねえ、おれはただ助けたいと思ったから助けただけさ」

驚きが次第に怒りへと変わり頭に血が上つた騎士たちが堪えきれずそれぞれ武器を構え始める。

接近戦は危険と判断した騎士がすでに先ほどジェスに放つた『アイス・スピア』を詠唱していく

上官の制止を聞かず感情に任せて発動させた。

魔力をさつきより多く籠められたそれはたった一本だけだったがそれを帳消しできるほどの中速と大きさを持っていた。
しかし10メートルの距離を一瞬で無にして殺到する氷の槍をジーグは先ほどと同じように殴つただけでそれをコナゴナに打ち砕いてしまう。

「なにつ！？」

「退け、それとも・・・ヤルか？」

「ぐつ！？」

ジークの顔から笑みが消え代わりに殺氣をたたきつけると騎士たちが怯む。

彼らは相当な場数を踏み度々魔獣クラスの魔物とさえ戦つたことがあるが今彼らが感じる殺氣はそれを上回る、隣にいたジェスも思わずその場から飛びのこうとしたくらいだ。

「・・・退くぞ」

「ですが！」

「こちらに勝ち田はない、もし戦つたとして魔族はやれるにしきらの男は桁違いだ。それにこちらの全滅は免れない」

「・・・わかりました」

命令を下した騎士も怒りと屈辱で唇を血が出るほど噛みしめ堪えていた。

騎士たちは屈辱に耐えながらも倒れた仲間をかつぐとそのまま暗闇の中へと消えていった。

・・・・・

「Hリイ様子はどうだ？」

「うん。大怪我してたけどこの人すごく体が強いみたいだからもう大丈夫だと思うよ」

騎士たちを撃退した後おれはジェスに事情を聞きすぐにエリスともう1人の仲間を探した。

遠くに逃げてると思ったが仲間の女性はが大きな怪我を負ってるらしくしかも道に血が点々と続いており

それを辿つていった結果すぐに見つけることが出来た。見つけた時は身構えられもう少しで魔法を発動されるところだったがジェスが横にいるのを見ると納得してもらつた。

初見の女魔族のほうは血の量からして命にかかわりそうだったの急いで家に連れ帰り寝ていたエリイを起こして魔法で治癒してもらいベッドで寝てもらつて、どうやら腹を剣で貫かれたらしい。

「さすがは魔族デタラメだな」

「いやつジークがそれ言うの？」

ひとまずジェス達の治療を終えたが、ジェス達は長旅と今夜の戦闘で心身共に疲労が溜まり2人そろつて目が虚ろになり首を力く力くさせていたのでとりあえず寝かせてあげた。

・・・・・

ある屋敷の部屋

「なに？失敗した？」

「はつ言い訳はしません我々のミスです」

「べつに責めはせん。何かしら不測の事態でもあつたのだろう? 報告を続ける」

そこには1人の20後半ぐらいの男とそのまえに片膝をついて報告をしている3人の騎士がいた。

そして男は騎士たちが撃退されたという報告に驚いていた。

「あの伯爵級の魔族は私が戦闘不能にしたはずだったのだが、まだそんな余力があつたか」

それなら納得がいくと頷く男

「いえ、あなたが戦われた魔族は確かに戦闘できる状態ではなく、少年の魔族が1人で我らを迎撃に来ました。」

その行動は想定内だつたが、想定内だつたからこそ男は逆に疑問を感じた。

「ふむ、それを予想してお前たちを編成し送り込んだつもりだったが、あの少年の魔族にそれほどの力量があつたとは。私としたことが見誤つてしまつたか」

「いえ・・・それがあと1歩のところまで追い詰めたのですが。突然の奇襲にあいました」

「奇襲か、だとするとまだ仲間がいたとは。それでその魔族はどんなどつた?」

次々と驚かされた結果にやつと結果が出た。

新手の魔族がいたなら失敗は必然、彼らに非はないだろう。だがまたしても部下は予想外のことを言つてきた。

「それなのですが・・・我らに奇襲を仕掛け、敵を助けたのは人の男でした」

「なんだとつ、人が魔族を助けた！？」

「ありえない、人と魔族は敵同士で会えば必ず殺し合いが起きるほどだ。そんな常識を覆す言葉に男は初めて大声を出してしまった。

「はい。その男は奇襲とはいえ石と素手だけで仲間を2人倒してしまい魔族と肩を並べて立っていました。あの殺氣は並みの魔獣よりも上だつたと思います」

「そうか、その評価だとその男はよほど腕の立つ者だったのだろう、撤退は正しい。」

報告はもういい、負傷者を手当をしてやれ

「はつ」

1人だけになつた部屋に静けさが戻りしばらくして出た声は笑い声だつた

「ふつ、私が読み外してしまつとはな、珍しいこともある物だ。

しかし・・・人が魔族を助けるとはさすがに予想外だつたな、しかも報告からして最低でも5階級以上の強さはあるとみた。

はははつ、暇つぶしで田舎の祭りに来たはずだつたがこれは思ったよりも楽しめそうだ」

朝起きたおれはとんでもないものを見てしまった。

目が覚めたジークはボサボサの頭をガリガリ搔きながら部屋を移動してるとき不意にある物へと目が止まつた。目線の先には普通のベッドくらいのソファーがあり、いつもはなにも置いてないただのソファーだったが今日のそれは薄い毛布がかかって大きな膨らみがありといふべきが凹凸していた。

気になつたジークは近付いてぱつと毛布をはぎ取つた。
そして問題はそこに寝ていた。

「…………」声にならない

すやすやと寝息を立てぐつすり眠る少年と少女がいたのだ。
ソファーはベッドほどあるとは言つたがもとより人が2人寝るには満足な大きさではない。

結果的に寝ている2人は落ちないよつこむの身を寄せ合つて、片や腕を相手の背中や腰に回し（男）
片や抱きつくように両手を相手の背中にまわし自分の顔を相手の胸に沈め足をからめてくる（女）。

つまり・・・・ぶつちやけ男と女が朝から抱き合つてました！
いかがわしい雰囲気を醸し出していました！（パ

ニック中）

ジークはそれを見た瞬間眠気が吹き飛びはぎ取つた毛布を持つたま

ま停止してしまった。

(マテマテマテマテ！誰だこいつら、あつジエスとエリスだ。
じゃあなんでこんな所で寝てるんだ、あつおれがここで寝せたんだ。
じゃあなんで「イツら抱き合つてんだ！おれが知るかつ！…」)

2人を見たジークは頭をフル回転させ一秒で思案した結果パニック
しか起きず

結局導き出した答えは

「おれは何も見なかつた」
ファサ 毛布をかけなおした

「ああ、今日のお外は何だか気持ちよさそうだな。よし散歩でもし
てくれるか」

そこからジークは外に出るまで決してソファーを見なかつた。

その日の朝、ある家から鍛冶屋の雷ジジイよりも大きな女の悲鳴と
何かが吹き飛ぶ音が都市に響きわたつた。

・・・・・

「ねえ」

「・・・・・」

「あのうエリふさん？」

「なんだジエス（ギロー）」

「うつ、その・・・あはからなんでか凄くひから上がひたひんだ

けど、何か・・・知らない？」

「ほう、聞キタイか。ソウカそつか自分がナニヲシタカシリタイノ力？」

「やつぱいいです」

ジーク宅の朝の食卓は混沌と化していた。

席はジークとジェス、向かい合つてエリイとエリスで並んでいる。ジェスは顔を大きくはらし横から見たら誰かもわからない有り様で対するエリスはいつも冷静で余裕のある顔ではなく顔を赤い野菜のように赤く染め鬼のように睨みつける目は少し潤んでいる。

ジェスが目を覚ました時破壊された壁の下で倒れていて気付いたら顔に激痛が走り人相が変わるほどはれ上がってしまった。爆音で目を覚ましたエリイが駆け付け治癒しようとしたがエリスによって止められ放置されてしまったのだ。

エリイ曰く昨日の怪我の方が軽傷だつたという。

そしてどこからか帰つてきたジークはその状況を見てジェスに近寄り肩にポンと手を置くと

「『知らぬが仏』って知ってるか・・・
「え、何? 僕何したの! ねえジーク! !」

何があつたのか分かつてゐるジークの反応にジェスは尋ねるがお前のためだとはぐらかされてしまい、結局ジェスは自分に何が起こつたのか分からないままテーブルにつきエリスからの無言の威圧感に怯えるハメになつた。

もつとも、近くのジークとエリイもその理不尽な威圧感を体験し迷惑をかけていた。

「や、ついで言えばジオス達はなんどこの都市にいたんだ？」

朝食を終えなんとか空氣を変えようとジークが苦し紛れに話題を持ちだした

「え・・・あ、ふらいもともとほほに寄る予定だつたんでふけど。
途しゅうでやふはに見ふかつてひまつてひげながら来たんでもふ」
「ジオス何言つてゐか分かんないよー。大丈夫？」

辛そうにジオスは話すがその辛さは昨日を思に出しての無念からな
のか
それとも単に腫れた顔が痛むのか、どちらにしろ真剣さに欠ける話
し方だつた。

「ヤレ】からはヤレ】の馬鹿に代わつて私が説明しよ!」

声に反応しそこを見ればドアの前に腹を刺されベッドで寝ていたはずの女魔族が立つていて。
魔法で治療されたとはいえ怪我が完全に完治してゐわけではなくまだ安静にするべきだというのに
彼女は剣を腰にさし何事もないよう立つてゐる。
その顔は痛みを感じさせない無表情だが以前のエリイとはまた違
鋭い眼には強い意志を持つていて。
おそらく必要以上に感情を表に出さない仕事至上のよつた性格なの
だろ。

堂々とした姿にジーク達は制止するのも忘れ、そのまま彼女はテーブルにつくと話し始めた。

「まずは礼を言おう。人だというのにエリス様を助けてくれて感謝する。そして君も私の怪我を治してくれたのだうへ・ありがとう」「おつ清々しいねえ。おう、どういたしまして」「えへへ、体もうよくなつたんだね。よかつた」

意外にも礼儀正しく感謝を告げる彼女に好印象を覚える2人、どうやらとても良い魔族のようだ

「自己紹介をしよう。私はリゼ、『リゼ・ガルデア』だ」「ジークだ、『ジーク・クルード』。よろしくな」「私はエリーナ、エリイって呼んでねリゼさん

「そついえばリゼはケツコーな怪我だったる、どうしたんだ?」「そうだな、恩人である君達には知る権利がある。話すとしよう。

すべてを話すことはできないがここに来る前からの事を話すとしよう
エリス様の話によるとリックガルで君たちは出会つたようだがその時
私は追手の撃退をしていてな
傍での護衛はジェスに任せていた。まあ逆に助けられたようだが

と横を見てすぐに視線を戻すリゼ

エリスの機嫌を取つていたジェスが反応しビクッと震える

「うつ

「追手はかなりの頻度で襲つてくるが私はこれでも子爵の上位に属している。

たいがいのやつらは何ら敵じゃなかつた

「子爵級だつゝ、じゃあなんでそれほどの力を持つあんたがあんな怪我してたんだ？」

中位魔族を相手にできる奴なんてそういうぞ

あの騎士達でも良くて6階級ほどの強さ、とてもじゃないが中位魔族には30人くらいで戦わせても勝てるか怪しこうだ

「ああ、私もそう思つていた。だがあの時騎士の中に1人別格がいたのだ。私はそれに気付かず戦つていてな油断していたところをやられてしまった。しかもその騎士たちは私たちの追手ではなくこの都市に来ていた途中だつたようだ」

「すると、あいつらとあんたを倒したつていつ奴はこの都市にいるのか。
そういうやダロンのやつが今度の闘技大会に国の騎士も参加するつて言つてたな」

「おれらくされだら」

「うーん、じゃあお前ら少しでも早く」はせ出るべきだな。幸い今この都市は明日の闘技大会でいろんな種族とかでいつぱいだし逃げるなら今が好機だ

「やつしたかったのだがな・・・」

当たり前の考えにリゼは顔をそらし言葉を濁す

「ん?なんか問ひ 「それはダメだ……」つおつ!なんだよエリスつ

突然身をこじらせて乗り出し呑きつけるよつエリスがジークの言葉を否定する

それを見たジエスとリゼは同時にため息をついた。

対するエリスはジークを睨み拳を胸の前あたりでフルフルさせていく。

「それはダメだ、今日ここを出たらここに来た意味がない
・・・・明日の闘技大会を見れないではないか!!!」

（沈黙）

自分たちの立場をまるで無視し言い放った言葉にジークは口を開けてぽかんとする

「え?もしかしてそれ見に来たのかお前ら。逃亡中のくせに?
そんで偶々騎士たちと遇合させて昨日のあれなのか?

・・・・・・・」「「「はあ」「」

ため息が重なつたのは決して偶然ではないだろう、そして誰と誰が重ねたのかも聞くまでもない
のほほんと聞いていたエリイもこの時はさすがに困った笑みを浮かべて「あ、あははっ・・・」と乾いた笑いを出していた。

「エリスはこっちの文化や行事に対する興味を持つてるんだ。

だから闘技大会を知った時はここに来ることは即決だつたんだよ」

いらない情報ありがとうジェスくん

エリスはその意思を変えず本人の中では闘技大会を見ることが決定事項のようだ

結局ジークはエリスに根負けし今日の逃亡計画はとりやめとなつた。

20話 またもや風（後書き）

リゼは多く見積もつて伯爵級、あくまで子爵級

21話 黒歴史そして仕返し

闘技大会は参加者も多くなるので前日から予選が行われ100以上いた参加者は何組かに分けられて任意の数になるまで戦いあう。そうして最終的に参加者は16人になり、当日にトーナメントで抽選で選ばれた相手と戦い優勝者を決める。

だから大会は1日前から行われ闘技上は歓声が響き、その中にエリスたちを含めたおれらもいた。

そこはおれも楽しんでたからいいけどさ・・・

いくらたくさん人が集まるからといってもマントで正体を隠した魔族を連れて歩くなんて心配でたまらなかつた。

参加者にはやはり騎士も混ざっていた。

勝ち残つたのは1人だけでリゼにあれがお前を倒した奴かと聞いたが首を横に振られた

「いや、奴は騎士達とは違う格好をしていた。何より強さはあんなものではない」

「そりやそうか、子爵級をやつたやつだ。見たところ参加した騎士たちはだいたい並みだし」

ちなみに勝ち残つた16人はほとんどが獣人やエルフ（魔法バンバン使ってたな）

人間の勝ち残りは何と我らがギルドのダロン・顔に仮面をした男知り合いの方は見ていたが仮面の男の方はノーマークだったのでその戦いは見ていない。

白熱した予選に興奮し機嫌を良くしたエリスが感想を語つ。

「やはり残つた者は大半が獣人・亜人か。それからするとあの人物の2人はなかなかの腕前だな」

それに対しエリイは何故か不満げにおれを見ていた。何だ？

「どうしたのエリイ？」

その様子に気付いたジェスが質問する。

「ジークが出たら1番だもんつ」

「あつ、いわれてみればそうだよね。この大会賞金も出るし傭兵には出世口にもなるんでしょ？」

ねえジーク、なんで出ないの？」

エリイ……いらんことをつ・・・！

「それはだつ」「ジークさんは一度この大会に出たことがありますよ」「だれだつ、つてティーナちゃん！？」

急に後ろからティーナちゃんが現れた。話を聞いていたのかきちんと話に合わせている。

仕事の方は？あつ、この2日は休みだつた……
やべ！この子言つ氣満々！？

ジユ「どちらさまでしょうか？」

「はい、この都市でギルドの受付をしていますティーナです（一ノ瀬）」

「

ジエ「あ、はいっよろしくお願ひします！」 頬真つ赤

ティーナスマイルに負けたジェス、やはり初見の男は撃沈か。

「・・・・」

「いたつ、何するのエリス！？」

「テレテレするな気持ち悪い」

過去をばらされそうになり心配していたが、何故か変な空気になつていく場をエリイが「あつ、ティーナちゃんだあ」と言つてティーナと2人でホワホワした雰囲気を出したことで回避された。

せつセーフ・・・

「それよりもジークが一度出たことがあるってどうこと？」

「おいつジエス！せつかくそれたのに…」

焦るおれに周りは顔をえる・・・つーか笑つてる。
ティーナちゃんを止めようとしたがこの流れはもう止めることはできなかつた。

「今から6年ほど前、ジークさんは13歳ですね。傭兵なり立てだつたジークさんはこともあらうか
この闘技大会に参加したんですね」

もつなにも言つまじよ・・・

「それでそれで」

早く先が聞きたいと急かすみんな。

ジェスあとで路地裏こいや・・・

「当然周りは大反対で止めたんですが聞かなくて、大剣1本持つて出場したんですね」

「13歳で大剣持つてたんだ・・・」

「誰もが予選で負けるだろうと思つてたんですけど・・・ふふつ」

堪えきれず口に手を当て笑いだす受付嬢。

ジークはもう止めようとせず耳を塞いでいた。

「予選は滅茶苦茶でした。ジークさん以外その組に勝者はいませんでした」

「・・・なんか想像できる」（ただテキトーに振り回しただけだらうな）

「本戦なんかもっと凄かったですよ、ほとんど一撃でしたから。獸人亜人関係なく吹き飛んじゃいました。ジークさんはそのまま優勝、会場は茫然としてましたよ」

淡々と続くおれの過去話にジェス達は驚愕したり納得したりしてゐる

「でもジークは優勝したの?·自慢できるではないか、なぜ秘密にしたかったのだ?」

当然の疑問にエリスがティーナに質問する

「そこですよ。最初は本人も喜んでたんですけど・・・

この大会は皆さんお分かりのように様々な方々の出世口にもなる重要なものです。

ですからジークさんが参加した時の参加者は見せ場なんて全くなくてそれを審査員達が議論した結果、ジークさんは以降出場禁止になってしまったんです

「そこまでなんて・・・、ジークの怪力は規格外だね

「ジークかわいそー」

「ん？ それではスカウトの方はどうだったのだ？ そんな規格外が放置されるはずがないだろ？」「

リゼが疑問をこぼすと暗かつたジークがさらにドーンと沈んだ。ティーナも言いにくいのか困った表情で続けた（やっぱり言つんだ）

「まあ、まだ幼かったジークさんはショックだったそうでその場から消えるように走り去つて行っちゃったんですね。それはもうすこしい速さで」

「スカウト“しなかつた”のではなく“できなかつた”のか・・・」「確かにそれは言いたくないかもね」

予選とおれの黒歴史物語が終わり腹をすかしたおれらは出店を回つた。

普通に金を払おうとしたらわしつきの謝罪として金は自分が持つとジエス達が言つてきた。

「どうか、なら遠慮はしない。

・・・・仕返しだ

「・・・いいんだな」

「うんいによ。ジーク達には世話になつてばっかりだしね」

笑顔で遠慮しないでほしいと返すジェス、エリスたちも同意りしへも言つてこない

ふつ、お前たちはお礼の選択を間違えた！

そしておれは復讐を実行に移すべくある人物へと振り向いた・・・

「だとよ・・・エリイ、何が食いたい？」

「お肉！」

・・・・・・・

「おかわりっ」

今、エリイに初めて肉を食わせた時の悲劇が繰り返されている。
テーブルに積み上げられる十をゆうにを越えた皿（もちろん肉料理、
それも高め）、周りの客は皿が重なることに声を上げる。
エリイは皿を輝かせて次々と出される肉をその口の中へ収めていく。

（ほんとコイツの体どうなつてんだろ？）

対してジェス達は皿の枚数が増えたことに顔を青くさせている。

おれは笑ってるがな！

「はははっ、相変わらずエリイは肉が好きだなあ。うんいに、こ
こはジェス達が払ってくれるからな、

あいつら金持ち（出まかせ）だから遠慮せずにどんどん食べなれや。あつすいませんおれもおかわり。

・・・ん?なんだお前ら手が進んでないぞ、どうした」 すつらい

笑顔

「どうしたの?お腹の調子が変なの?」

(腹の調子が変なのはお前だろ?!)

声に出てないそれは全員が思ったことだった。

全く遠慮しないジーク達(半分以上がエリイ)にジョスたちはプルプル震えていたが今の言葉でとうとう限界が来てしまった。

「食べれるか?一ヒューカ!」などと知っていたでしょうジーク!

「お前らは限度といふものを知らんのか!?

「さすがに食べすぎだ」

それはおれも最初に言つたな・・・

反応は2つで2人が怒りと1人が呆れだつた。だがそれでもジーク達の食べる手は止まらない。

「いやつ、だから止めてって言つてるじゃん。

あつすいません、勘弁して下さー、もう食べないでください」

・・・魔族の土下座なんて初めて見たな

22話 決勝戦そして発覚

闘技大会は本戦を迎えた

試合が一巡した時点で勝ち残った8名は

- (人) 仮面男
- (獣) 5人
- (亜) 2人

僅かだつた3人の人のうちダロンと騎士の2人が負けてしまつた。それでも様々な種族が集まるこの戦いで基礎能力が劣る人がここまでこれただけでも称賛ものだらう。

そして残つた仮面の男の実力は相当なものと分かつた。

何しろ奴は無傷だ。攻撃は防がずただかわすだけ、当たりそうに見えたりしてゐるがそれはただ単に奴が最低限の動きでかわしてゐるからにすぎない。奴と対戦した選手たちは魔法も剣も何一つ奴には届かせることが出来ず急所に鋭い一撃をもらつて負けている。

ある意味コイツが一番不気味だ。

そして魔法を主に使つていたエルフ達はほとんどが負けてしまつた。理由は単純、魔法は強力で殺傷力が高い。

ルールで殺しはもちろん反則負け（犯罪）なので使える術が制限されてしまい、使つたとしても威力を抑え過ぎてしまい相手はそれを見越して全力で突つ込んでくる。

といふかここまで来ると相手は呪文の詠唱をさせる暇なんか『えてくれない。

結果接近戦であるエルフはこの大会では不利となってしまい負けてしまう。

それでも勝ち残った2人はそれを克服していた。

つてな感じで結局は身体能力でズバ抜けた獣人が多く残った。

・・・・・

「・・・ここまでとはす”いな」

「ああ、獣人とエルフが接近戦でやりあうなんてそう見れるものじやねーぞ」

目の前では狼の獣人とエルフが試合をしている。

ただその戦い方はお互いの体を使つた格闘戦だ、獣人が圧倒的かと思えるがエルフの細身の体からは考えられないスピードと力で獣人と打ち合い時には投げ技も使用し応戦している。

珍しいエルフもいたもんだ。

戦っているエルフは今までの試合で魔法を使用していたが明らかに戦い方を変えていた。

大会後半からのタイプチェンジ、あのエルフにとつての奥の手ということだ。

「ふむ、あのエルフは肉体強化の術でもかけているのか？」

「いえ、それでもエルフの身体能力では到底追いつけるものではないはずなのですが……」

「あのエルフの人、魔法は使っていないみたいだよ」

「ん？ エリイおまえあのエルフが何してるかわかるのか？」

「よくわかんないけど試合が始まった時、あの人の体に精霊がはいつてつたよ」

「そんな魔法あつたつけ？ エリス」

「精霊を纏うなんて聞いたことがない。おそらく秘伝の術もしくは、・・・まあこっちの方がarieしそうだが固有スキルだろう。にしてもエリイよ、精霊が入ったことがなぜわかった？」

「そういえばエリイは精霊が見えるんだったな」

忘れてたな、エリイは下手すりや会話もできるんじゃなかつたつけ？

「・・・おまえたちは事あることに私たちを驚かせるな

何気なく言った言葉にエリスは呆れため息をこぼす。
手を額に当ててうつむいてると「なんか馬鹿にされてる気がする。

「魔族のお前らに言われたくないけどな」ボソッ

「だまれ人外」

「んだとお！おれは馬鹿力なだけだ！！」

ふざけるな、どう見たって“いけめん”でカツコウイー好青年じゃないか！！

「馬鹿力で済ませるなたわけ。エリイに聞いたぞ、お前あのベヒモスを真っ向から受け止めたそうだな十分人の域を超えておるわ」

「それ魔族でも無理なんんですけど、ていうか今のほんとジーク？」

「そうだが（キリッ）」

「・・・人外でしょ」

人外に人外と言われてしまった。（しかも魔族のお墨付き）

「そこまでにしておけ、見るエルフが徐々に押されているぞ」

「おつマジ？」

見れば獣人と互角に打ち合っていたエルフが防御に回っている、その額には脂汗をかき段々と出力も落ち初め勝負が決まりそうだ。

「魔法と違つて精靈を纏うのは体力の消費が早いか。となると持久力も持ち合わせた獣人が有利のようだ」

「みたいだな。あつ、良い蹴り入った、惜しかつたけどエルフの負けだな」

体力の疲労にガードが甘くなつたエルフへ会心の一撃が入りそのままふつ飛ばされてしまった。

『勝者、フヨオール！みなさんが勝者に拍手を。そしてその体からは考えられないすばらしい格闘戦を見せてくれたコルダ選手にも拍手を！』

両者に贈られる大きな拍手、倒れた相手が勝者が手をとつて起こした後互いに熱い握手を交わすという気持ちの良い終わりをして両者は退場した

・ · · · · · · ·

『それではっ！最後は勝ち残つた4人一斉の決勝戦を始めたいと思います！』

・ · · え？なに、他の試合はつて？気にするな、ていうか察してくれ。

『決勝戦の出場選手を紹介します。

1人目は狼の獣人、そのすば抜けた速さと自慢の拳で相手を沈めてきた、フェオール選手！

2人目は熊の獣人、その手に持つ巨大な戦斧で敵をなぎ払う、タイン選手！

3人目はエルフ、魔法の詠唱は早すぎて止めるとは出来ない、ヴァレン選手！

4人目は何と人だ！彼に触れたものはまだいない、レーガン選手！

さあ！彼らはどのような試合を魅せてくれるのかっ。

それでは・・・・・はじめ！――――

side フェオール

司会の声と相手めがけて駆ける、俺が狙うのは・・・エルフ！
そして同時に大きな体のタインが仮面の男に狙いを定めて走り始める。

実は俺とタインは試合前に話をしていた。内容は“互いに違う相手を倒さないか？”だ。

別に仲間ではないがタインも了承してくれた。

理由はある、それはあのエルフと人の選手がそれぞれの脅威になるからだ。

あのエルフの高速詠唱は並みの速さでは止めることができず、出でる魔法は中級を超える。故に力重視のタインはただの的にされるだけ。

そして仮面の男はとにかく反射神経が逸脱している。大会中に俺と同じタイプの選手が戦っていたが奴は嵐のように迫る攻撃を全てかわしつくしてしまった。速さが売りの俺では戦いづらい。だが圧倒的な力で巨大な戦斧を使うタインならもしかしたら可能性があるかもしれない。

結果

俺＝エルフ、タイン＝仮面の男
で互いの天敵を倒してそれから俺たちで戦おうといふことになったのだ。

エルフは自分が狙われることに全く動搖せず構えをとる。
距離は10メートルほど、狼の獣人である俺にとつては無いにも等しい！

「フレイム」

「つー！」

とつたに横に飛びのき飛んでくる炎の固まりを回避する

「あつ、下級に至つてはほとんど無詠唱か！－」

近付ける隙を与えないよう小刻みに様々な魔法を放つてくる、容易に近付くことはできないが相手も魔法を俺にあてることが出来ない。そうして時間が過ぎる。

だがそれでいい・・・

互いに力を消耗するが俺は獣人、そんなことで体力が減ることはない。

そしてエルフは魔力を消費する、使う魔法は下級ばかりだが俊敏に駆けまわり隙あらば懷に潜り込んでくる俺に神経を限界までに集中し魔力と共に精神も擦り減らされていく。

そうしてどちらも攻めることができず、先に痺れを切らしたのはエルフだった。

「くつ、悪いがあなた1人にこれ以上手間をかけるわけにはいかない。喰らえ！『バーニング』！」
「ぐああああああ！――！」

とつさに防御に入ったが突然俺の前で爆発が怒り吹き飛ばされた。

中級魔法を無詠唱で！？

詠唱なしということで標準が定まってないおかげで直撃は避けることが出来たが吹き飛ばされたせいでエルフとの距離が生まれた。そしてトドメに移るエルフが笑みを浮かべ勝利を悟る。

「これで終わらせます」

詠唱と共にその身に膨大な魔力を集める光景にゾッとする。

この量なら上級、それも広範囲のが来るだろう。言葉どうりエルフは次の一撃で俺どころか近くで戦つてる2人もるとも倒す氣だ。阻止したいがダメージが抜けずすぐに立てない。

「ツガ！？」「

あと一息で魔法を発動させようとしたエルフの体が力なく倒れた。そしてエルフを倒したのは近くでタインと戦つていたはずの仮面の男だった。

side end

「ふう危なかつた。一撃で全員を仕留めようとはほつまらない真似を」

その言葉にエルフと戦つっていた獣人が我に返り体制を立てなおし周りを見回す。

そして近くで息を荒くさせ地面に膝をついてるもう一人の獣人を見つけると傍によつて仮面の男への警戒を始める。

「2人して挑むか？良いだろう、うまくいけばお前たちの攻撃でもしかしたら当たるかも知れんぞ？」

明らかに挑発、そしてそれに応えるように膝をついていたタインも立ち上がり獣人2人して仮面の男に駆けだした。

・・・・・・・・・

「あの2人は仲間だつたのか、ふんつ獣人がつまらぬ真似をしようて」

「マジテシマンネーみたいな顔してんなコイツ、あの仮面野郎と気が合つんじゃね？同じこと言つてるぞ」

「いいや悪くねーよ、あれは互いの天敵を当たらせただけでその後2人でやりあうつもりだつたんだろうさ、よくあることだ。・・・・・もつとも“アイツ”は別格だつたみたいだけだ」

「そうだね、あの人結局攻撃は当たるどこか掠つてすらないよ」

もはや遊んでるなあれ、楽しんでないか？

「確かに・・・やれるチャンスはいくらでもあつたはず。それにあの言葉からしてそうかもしれん」

あれほどの実力ならやううと思えばすでに決着はついてる、ってことは本当にやうだつてことなのだらうか？

「・・・・奴だ」

いつも無表情に近いリゼが緊張のこもつた雰囲気で呟く。その顔には冷や汗を流し若干の焦りも見え隠れしている。

「奴つて誰だ？」

「あの雰囲気、そして強さ・・・間違いない・・・つー！」

おれの声をまるで無視するリゼには余裕がなく、ゆっくつと右手を刺されていた腹の傷に当っていた。

「間違いない・・・奴が私を倒した騎士だ」

22話 決勝戦そして発覚（後編）

間をあけて下さいません。
この一週間にいかと忙しくて・・・

23話 優勝 もう一戦 おれ！？

「あああああああつあああああ……」

闘技上に獣の雄叫びと連続した風切り音が響く。

個々では勝機がないと見た獣人2人が手を組み仮面の男に襲いかかっている。

次々と繰り出される拳や巨大な戦斧、連携はあまりなっていないがそれでも常人には到底さき切れない猛攻、それは決勝戦にふさわしい威力と速さを持っていた。

だが、それでも、その攻撃が届くことはない。拳は空を切り目標を失った戦斧はそのまま地面を抉る。

男に変わったことと言えばやっと武器を使い始めただけだ。しかも使用法は攻撃ではなく逆に相手の攻撃をいなすこと、さらに渾身の力が籠もった戦斧の一撃を真正面から受け止めたこともあった。

力の違いは明らかだ

そこから男が優勝を勝ち取るのに時間はかからなかつた。

「やはり満足には至らない・・・か

突然男は距離をとると深い落胆のため息をついた。

それはまるで遊びに飽き、遊びに飽きておもむちやを片付ける「ジビ」も
のそれを思わせる。

そして相変わらずの構えない棒立ちで一匹の獣へ指をクイッと曲げ
る。分かりやすい挑発だ。

「「舐めるなあああああ！」！」

その行動に耐えきれなかつた獣人2人が怒りを露わにして駆ける、
その目には理性を宿していない。もはや唯の獣、一瞬の交差のあと
剣を振り抜いた姿勢をしていた男がチーンと剣を鞘に納めると同時に
2人の獣人は崩れ落ちた。

『しつ勝者っ、レーガン選手！－！』

動搖しながらも仕事をまつといする司会者。普通なら大きな拍手や
歓声で熱気を帯びる瞬間だがこの時は静まり返った場に司会の声が
むなしくとうりすがる。

『それでは優勝者であるレーガン選手から一言もらいたいと思いま
す。では』

そつこいつと司会は音声拡張の魔道具を渡す（2本持つてた）

『今大会で優勝したレー・ガンだ。にしてもこの静けさ、やり過ぎたか？

すまない、どうやらやつて置いたままお気に召さなかつたようだな』

自分がやつたことには自覚があるらしい。

悪いと言つて頭をかいてるだけでそれっぽい態度は少しも見えない。その態度にさらに静まり返る会場。

ここに来てる人達の大半は白熱した華のある戦いを期待していたのだ。だが期待は空回りした。

確かにレー・ガンは圧倒的な強さを持つていた、ただ、攻撃をヒヨイヒヨイ避け続け、最後に一発で仕留めてしまつ戦い方はここにいる人達の気を冷めさせるだけだつた。しかも参加者達を侮蔑するような言葉にあまり良い感情がわかない。

『そこでなんだが、謝罪の代わりに皆にはもう一戦ご覧いただき

『おーーーーっと……まさかのもう一戦予告だ————！』
して、その対戦相手は誰なのでしょうか。しかしレー・ガン選手が戦いたいという人物はどれほどの強さなのか……。』

一転、空気が変わる。離れていた観客の心も徐々に続く言葉に興味を引かれしていく

『強さは保障しよう、まだ私は対面したことはないが、もとよりその男と戦うつもりだつたのだ。』

『して、その相手とは一体どんな人物なのでしょうか？』

『知ってる者は知っているだろう。その人物は6年前に13歳という若さでこの大会に出場し、驚くことにそのまま優勝したらしい。そして今でもこの都市について所属しているギルドではランク4だといふ。

その人物の名は・・・ジーク・クルード!』

s i d e ジーク

あつさりと優勝を決めたレー・ガンという奴は司会から魔具を受け取り、

『つまんなかった?ごめん、もう一回するから機嫌直して』みた
いなことを言い出した。

あいつに負けた奴らが聞いたらゼッテ・怒るな・・・。

「強いなアイツ、おれもあんな奴とはやりたくないなあ。まさに柔と剛つてヤツ? そこまでヒヨイヒヨイ避けるなんて器用にもほどがあるぞ」

「まさに言葉どおりだな、奴の反射神経は以上だ。いかに力が強からうとそれが当たらなければ意味がない。獣人2人相手に一撃ももらわなかつた。あ奴はおそらくまだ実力を隠してるだろ?』

「油断していたとはいえ私を一撃した人物です、かなりの実力だと」

一応リゼ達には逃げなくていいのか?と聞いてみたが敵の力を見た
い、それにここは人混みの中だから大丈夫と言わされたのでほっとく
ことにした。

そういえばさつきリゼがアイツだって言つてたな。だとするとアイ
ツも騎士なのか?

実力が桁違いなのは確かなんだけどなんであんな戦い方すつかな?

『知ってる者は知っているだろ?。その人物は6年前に13歳という若さでこの大会に出場し・・・』

ん、あれ?なんか知ってるような話が聞こえたような。しかも割と最近おれの心を抉った気がする・・・

「ねえジーク、あのレーガンって人が話してるやつ、なんか聞いたことあると思うんだけど」

ちょっと顔を引き攣らせかつレーガンを指しながらこっちを向くジエス。他のメンバーも同じく一点を見ている。

「奇遇だなジエス、私もアイツが言う経歴持った人物に心当たりがある」

ウンウンと頷くほか2名。え?誰のこと?そんな現実逃避もむなし
くレーガンの言う人物の経歴がドンドン語られていく。

『その人物の名は・・・ジーク・クルード!』

途端、ざわめきが起る

「はあっ……？？」

誰よりも驚いたのは他でもないおれの方だ。おい、そんな目で見るな！おれだって知るか！！

「まてまてまてまて、おれはアイツなんか知らねえぞっ。なんでおれ？マジであれ？」

『出た―――っ！―――なんと！まさかの！そのまさか！レーガン選手の御所望はこの都市が誇る最強のギルドランク4の傭兵、『魔人（！？）のジーク』だ―――！――ええ、私も覚えています。6年前の今日、つわものが集まるこの大会に少年が大剣一本で出場し、対戦相手を種族問わず一撃で葬つていったあの光景を…。圧倒的な強さで優勝した彼はあまりの強さに出場禁止にされてしましました』

司会の説明にさらにヒートアップしていく会場

なに勝手に人の過去ばらしてんだつ、昨日に続いておれの心えぐんじゃねえ！！

・つうか“魔人”てなんだ！？初耳だぞ、ゴラ――（司会のノリ）

「えつ、ジークは魔族だったの？」真に受けるなエリイ！！
「魔族に並ぶ人外である！」ザケンなエリス！！

そんなことを思つてると司会が思い出したように聞き返した。それはおれがこの状況から逃げ出せる起死回生の一言だった。

『ところでレーガン選手？肝心のジークさんはどちらにいるのでし

よ
う
か
?

「つ！」

やうだよ！あれ知らねえよあんな変態仮面！

考えてみればおれはあいつと初見だ。話すらしたことない！

だったらアソシもこっちの場所・顔も知らないはず。 そうだと、当てずっぽうに言つたはずに違ひない！

うか・・・・・つ！？

素早く立ち去ろうとした瞬間ピタッと止めるおれ、逃げるといつ選択肢は消えただ立ち去っていた。

「どうしたのジーク？」

不思議に感じたエリイが首をかしげて聞いてくるがよく聞こえない。おれの意識は奴レガン一点に集中されているから。そして向こうもこっちを向いている、仮面で見えないはずの両眼が真っすぐとおれを見据えているのだと自分の直感が告げている。

『心配するな。今見つけた』

奴は言葉を終えると同時に立つてゐる位置から遠く離れた人混みの中の
おれの胸ど真ん中に持つていていた魔具を投げつけてきた。おれはそ
れを片手でキャッチする。するとつらったように眞の視線が一点に
集まる。

「いた――！　いました！　観客の中に混ざっていました！　間違ひありません。あの姿、そして背中に背負つた巨大な大剣、

ジークさんです！――』

「「「「「「「わあ ああああああああ」」」」」」」

やられた・・・」」れじやあ逃げようがないじやないか。

さつきまでこっちを見ていなかつた隣の人達までおれを指さして大声を上げてゐる。おれの周りにはエリイ達3人しかおりず、いつかの「ごとく一点を中心とした丸い空間が形成されていた。

次第にあらゆる声がまとまつて2人の名前を連呼し会場で大きく木靈する。

「「「「「「ジーク！ジーク！ジーク！ジーク！……」」」」」

「「「「「「レーガン！レーガン！レーガン！レーガン！……」」」」」

・・・・「「「「」

一度始まつた声は止まらずまだ少しづつ大きくなつてきてゐる。

「・・・はあ、これは戦^やうしかないか」

お返しとばかりに背負つていた大剣をぬめがけて投げつける、当然それは当たりはせず半身になつてかわされたがおれの突然の行動に会場が静まり返る。

・・・こんな目にあわされたんだ、覚悟してもらおう。

『・・・・・上等！――』

・・・・・・・・・・・・

おれと対峙するレーガン。近くで見れば着けている額から顎まで
つぱりと覆う白を強調とした仮面はあまり装飾がされていなかつた。
穴は口と目だけの最小限しかなく口は三日月のようで氣味が悪い道
化のようだつた。

「それで、レーガンなんよ、おれなんか」^レ描名してどうしたいんだ
？ドッキリにも程があるわ」

「さつきも言つただろう、ただ純粹に君と戦いたかつただけだが」
まじわされる会話はまるで朝の挨拶のように軽い、だが実際は笑つ
ているジークの内心は真つ黒、
互いに武器を構えてくる。

「こしてはやつてくれるじゃねえかよお。覚悟できるだろうなあ
？」

頭の中で田の前に立つこの男を一體どうやってヤッてしまおうか模
索する。唯倒すだけじゃ氣が済まない。
潰す・折る・捩じる・・・おつといけない。

「君を倒す覚悟か？」

結構威圧してゐるつもりだが飽く迄余裕を崩さないレーガン。しかし大会中のような隙だらけだった構えではなく、決勝戦で使っていた薄く紅い剣を持ち腰を低くしていた。

「チゲえ」

「テメエがボコられる覚悟だつ！！」

合図と共にダッシュ、敵は迎撃つ形で構えている。先制を取つて大剣の長所であるリー・チの長さを使い相手の間合いに入る前に叩きつける。予想どうりかわされるが距離を保つてそのまま振り下ろす、横薙ぎ、突き、切り上げと連続で叩きこみ自分のペースを作りひたすら攻める。

「早いな。先の者たちとは段違いだよ」「まだ余裕だなお前！」

そして大剣を振りきつたところにタイミングを合わせて身を長剣の間合いで潜り込まれ高速で繰り出される突きが肩に迫るが半身になつてかわす。

反転に出るかどこやがれ！ その攻撃で
くつまく攻めに入ることが出来ない。

一日飛んで距離を置こうとしたが奴は張り付くよつておれを追従して一息で三回の斬撃で攻め込んでくる。

だがまだこれは様子見の域。

あまり力を晒す意味はないけど押されるのもなんだから先に仕掛け
てみるか・・・

「ツラアアー！」

ベースを上げてさらに力を込めた一撃を振り下ろす。そしてそこで初めて鉄と鉄がぶつかり合う音がなった。

「つー？」

大の大人一人ぐらいの大剣とその半分ぐらいの剣がつば是り合つてゐる。

その展開に驚いたのはおれ。客席からも同様の声が上がる。

理由は今の一撃が防がれたからだ。

そう・・・耐えられてるのだ。

力は抜いてない、最低でもさつきの熊の獣人が繰り出した一撃よりは数段上のはず、その証拠に敵の足元に亀裂が出来ている。その力を出してる自分が言えることではないがその力は人間が武器一つで耐えるはずはない。相手がそれほどの力を持つてる様には見えない、だが実際に目の前の敵は受け止めて見させた。確認でさらに同じ斬撃を出したが同じく防がれた。

となると・・・

「その剣、魔剣の一種かー！」

「『名答、この『ハバス』の能力はいたつて単純でね、持ち主の身体強化、または打ち合う瞬間相手の力を大幅に削ってくれるのさ』

パワー型の相手きみにはもつてこいだろ？」そう告げて今度は逆に虚を

突いた攻撃がおれを襲う。

寸前、大剣を盾に防いだがとつさの行動に力を乗せられず、魔剣の効果を發揮した一撃でふつ飛ばされた。

「づつ！！」

「ジークつ！！」

少女の声と同時に背中に衝撃がはしりすこしむせる。すぐに立ち上がるが敵の追撃はなかつた。

くそつ、なんつうモン持つてやがる。・・・・・けど、なんだ、マジで単純じやねえか。

「こ」の剣は大概は敵の力を無くしてくれるんだがな、それでもこの力か

手をぶらぶらせ痛がる素振りを見せる、多分演技ではない、それなりに力はとおつているはず。

「感想ありがとよ、・・・だつたらドンドン（力）上げてぐわつ。
耐えてみろ！――！」

最初と同じような感じで走り出し最初と同じように大剣を叩きつけた。

何の変哲もない斬撃が最初のものと違つていたのは大剣に込められた力・敵が大きく後ろに飛んで避けたことだった。

当たつた瞬間に地面が爆ぜ、大きな爆音を起こす。もし当たつてい

れば大抵のモノは原形をとどめることはできないだろう。その後には小さなクレーターができ、振り下ろした大剣は3分の1ほど地面に刺さっていた。

「どうしたよ、その剣の能力でおれの攻撃の力無くなるんじゃなかつたのかよ」

刺さった剣を引きぬき肩に担ぐ。おそらく敵は驚いてるだろう。

「打ち消す力の量には限度がある、そして君の力は驚くことにそれを上回つていただけだ」

「えらく素直に教えてくれるじゃねえか？いいのか、そんなにペラペラしゃべっちゃって」

「いや、こんな戦いが出来るとは思つても見なくてね、楽しいのだよ」

よ

魔劍の効果が通用しないことがわかつたはずなのにそれでも本当に楽しんでるようだ。

「はつ！だつたらその氣味の悪い仮面取つて顔見せろよ

「それは無理な話だ、君が取つてみるか？」

「よつしゃそれ乗つた！…！」

俄然やる気の話いたおれは今度はただ我武者羅に大剣を振りまわした。だがさつきとは比べ物にならない力で振るわれる大剣は振ったあとに大きな風を生み出し、地面は掠つただけでも大きな爪痕を残した。中途半端に良ければ強風に体をあおられてバランスを崩しかねないがそれでも敵はおれの攻撃の嵐をかわし・いなしてなお且つ反撃まで見せる。

その攻防はすでに常人の理解の域を超えてさらに激しさを増しその爪痕を地面に刻む。

『す、すごいつ。なんて破壊力、そしてそれを防ぎ、かわす技術、こんな戦い見たことがありませんつ。

ていうかジークさん！！会場を壊さないでください——い！』聞こえない、聞こえない

でもこいつほんとナーバー者だ？最低でもランク4はあるぞ。まあおれ以外で上級ランクの強さは見たことはないけど・・・「戦いの最中に考え事かな？」

一瞬の油断、会場の驚愕の声で我に返ったがおれの前にいる筈の奴がいない。

そして振り切つたあと後ろに伸ばした大剣にナーバー力が乗った感覚を感じる。

「つー！」

驚いたことに奴はおれが振り切つた大剣に乗つてやがつた、敵が身を沈めた瞬間、本能にしたがつてそのまま大剣を大ぶりして攻撃の回避と同時に奴を空高く打ち上げる。

チャンス！！いくら避けるのがつまいとはいえ“空中”だつたら逃げ場はないつ。

次第に上昇をやめ重力にしたがつて落ちてくる“目標”に狙いを定

めて構える。

・・・・・ 3 ・・・・・ 2 ・・・・・ 1 ・・・・・ ツ ! ! ?

突然、間合いギリギリで放たれた『アイススピア』に絶好のタイミングをズラされた。避けることが出来ず予定より数瞬早く振り上げてしまい剣先を何処かに掠らせることしかできず勝機を逃してしまい相手に着地を許してしまった。

互いに距離を取り体制を整える。

「相手の剣の上に乗るなんてフザケタことしてくれるじゃねえか。どこの大道芸人だよ」

「君ほどじゃないさ。・・・にしても、まだ力が上がるか、下手すれば魔獣に近い筋力だぞ。底が見えないな」

「それを凌ぎ切るアンタもだよ。どんな神経してんだよ、まあそれについてはおれも同感だ。まだ本気は試した覚えがない」

すると途端に仮面の中から笑い声が聞こえてきた。

「はははははははは。そうかそうかそれほどなのか。やはり君は私と同類なのか」

なに言つてるんだ「イツ? 同類? ビツ見ても違うだろ? が・・・つてあら?」

ひとりヒーラーガンが着けていたはずの仮面が落ちた。ビツヤアツツアツ

きのが仮面の紐を掠つていて切れかけていたのが今になつてきた
ようだ。

そして相手が『取れるものなら取つてみる』的な発言をしたのを思
い出し“してやつたり！”と喜びが込み上げてきた。さあ露わにな
つた顔を見ようじゃないか。

「・・・は？」

田の前の光景に ore の口から間の抜けた声が出た。

うそだろ、なんであんな奴がこんな所にいる！？

晒された顔はよく整つていた戦士とは思えないまるで女性のような
肌、その上で風に揺れる銀色の髪。

女性なら正面で向き合つただけでイチ口、男性なら嫉妬を向けた
くなるイケメン・・・・

だがそんなのはどうでもいい。アレを見たら容姿の事なんか一瞬で
ふつとんだ。

それは『田』だった。それに宿した“色”が異常だった。

瞳の色が一色ではなかつた。紅・蒼・黄・緑・・・・いくつもの色が揺らめいていた。

まるで空に映る虹のよう、虹が人を魅惑するようにおれの意識もそのまま瞳に吸い込まれるような錯覚を起こす。

『おーーーーーと、なんといふことだーーーーー！レーガン選手が着けていた仮面がさつきの一振りで取れてしまつたーーーー！しかも意外に美形！！』

どうやら遠く離れた一般の人たちにはおれの光景は見えないらしくまき上がる驚きはおれの者とは大きく異なつていた。・・・つうか見られたらただじやすまない。

「大会を荒らすにも程があるだろうが、なんでこんな田舎の祭りにあんたが参加してんだよ」

やつとの男の強さの秘密がわかつた、ふざけてるなんてレベルは超えてる。

「おや、私を知つてゐるのか？」

落ちた仮面を着け直し、なおもはぶらかそつとする態度がまたイラツとくるが抑えよう。

「なあーにが『レー・ガン』だ、偽名だろつ！その『田』・その強さ、
わからないはずがねえ！」

なあ・・・・・アレスティナ騎士の頂点、騎士団長にして
加護持ち
おれと同類

コーヴェルト・クアトス騎士団長様よつ！！」

「ジーク宅」

あの戦いの後おれはすごい剣幕で追つてくるたくさんの追手を振り切り先に帰ったエリイ等が待つ血弾になんとかたどり着つくことが出来た。試合が終わって外に出たら一桁を超す人達に囲まれたから一瞬ビビったよ、連中の何人かは目が血走ってたから下手な魔物よりも迫力があるんだよ。

え？ 試合の決着？ そんなのすぐやめたに決まってるだろ。あれでもお互い力を全然出してないんだ。

大体、加護持ちどうしがまともにやりあつたら被害（今回の場合は主におれによる）が馬鹿にならん。

それに相手がこの国最強の騎士、分かつた瞬間やる気が抜けたよ。まあ要するにメンドクサそудだから逃げただけなんだけどな・・・

とりあえず報告するか。

「おかえりジーク、スカウトはどうだった？」 「おかえり。かつこ良かつたよジークっ」

○h エリイの笑顔が心にしみるぜ

「それどころじゃねえよジェス、おれが戦つた・・・おまえらを襲つた奴どんでもねえ野郎だつたぞ」

「私から見たらお前もとんでもないぞ？ それでおまえはわかつた風だつたが一体奴の正体は何だつたのだ？」

「ギルドに所属してる奴で知らない奴はないぞ。

奴の名前は『コードウェルト・クアトス』。

この国の騎士団長で、おれと同じ『加護持ち』、元ギルドランク2だつた男だ。

“不敗騎士” “神眼” “百発百中” (ナニが?) 一二九九
ろじやねえよ。この国が誇る生きた伝説だ。おまえらよくほむち合わせた時に捕まらなかつたな」

やつてらんねえよと息と一緒に吐いたおれの言葉に魔族組がまるで石になつたかのように動きを止める。そして徐々に体の硬直が取れプルプルと体を震わせながらジエスが聞き返してきた。やつと自分たちの置かれた状況を理解したか。

「コードウェルト? 騎士団長? 元ギルドランク2? ……オレトオナジカゴモチ?」

「あれ? 言つてなかつたつけ? あと言葉はあつてるけど言い方おかしいぞ」

「すごい、ジークつて加護持ちだつたんだ」 (エリイ)

「「つ……」

「おいおい、いくらおれがスッゲー奴だつて分かつたからつてそんなに驚くこち・・・どうした? なんでそんな田でこいつち見る?」

気づけばおれとジエス & エリスには距離が生まれていた。
こつちが一歩踏み出せばあつちは同時に一歩下がる。何度もやつてもこの距離は変わらない

ナーニコレ面白い。

そのやり取りはジークにとつて「冗談のつもりが向こうはマジだった。さすがにダメかなと思い唯一魔族で冷静を保つていたリザに助けを求める。

「リザ、これはどういうことだ？」

「すまない、わざとではないんだ。つまりだな・・・

加護持ちとは我ら魔族にとつてはまさに化け物のような存在とされている。魔族と人の戦争では必ず加護持ちが繰り出され、その被害は加護持ち1人につき魔族3桁、中には言葉道理『一騎当千』をした者がいてな、しかも加護持ちは魔族の中からは生まれない。私達にとつて加護持ちは恐怖の対象であつて忌むべき存在とされてい

る

納得、確かにそれが本当なら分からなくもない。おれ達でいえば魔王に置き換えるようなもの。どちらも桁外れな存在だとしてその化け物が目の前に現れたのだ。そう考えるとこの2人の反応は間違えてはない。

「なるほどな。こっちとそっちじや 加護持ちの在り方は真逆なのか。それなら仕方ねえな」

「人でも親が子を躰ける為に小さいころに怖い話をすることがあるだろう？それと同じで私達も話だけだがたくさんのお話を聞かされた作り話のようなものさ。だから大概の者はすぐに忘れてしまう」

「それってあれ？『ほーら、早く寝ないと“加護持ち”が来て食べられちゃうゾオ』とか？」

「そんな話“も”あるな」

「なるほどなるほど。つてことはおれは物語に出てくる怪物なのかあ。んで魔族を食ひ食へると、おれつて怖いなあ

……つてなるか！－誰が食うかっ。あと“も”つてなんだ！－！」。

ていうか魔族意外と家庭的な！」

言いがかりだ！…と強い口調で怒鳴るとそれに過剰な反応をして2人が悲鳴を上げる。

「ひつ！？」

「　　れる！…！」　　おいしいいい！！今何て言った！？

「魔界の教育基準一体どんなだよ。飽く迄躰の範囲なんだろう？この歳でこんなにおどろくものなのかな？」

ジエスは思わずビビッてるてこりで留まってるけど、特に意外にエリスはいつもふてぶてしく余裕を持った態度とは真逆のまるで10にも満たない女の子の怯え方をしていた。そのギャップにその場にいた全員が“え？”と思つたくらいだ。

「さすがに今のは私も初耳だ。まあ、エリス様は特殊な環境（親ばかの過保護）で育てられたから少しそぞれた思考があるかもしれない」

「その特殊な環境つてスゲー気になるんですけど？」

「聞きたいか？」

「やめときます」

「　　れる”つてなに？」

「「きみ／エリイは知らないでいい」」「

結局2人が落ち着くまで無駄に時間をくつた。

滞在先のある貴族の屋敷で淹れたての紅茶をもらい、飲みながらあの男との戦いを思い出す。

「……ふう」

「入れ」

「……失礼します」

「ンンンン」

入ってきたのは部下の騎士だった。

「君か。どうした、報告か？」

「昨日私たちが追つっていた魔族のことです」

「話せ」

「はい。話は魔族の手助けをし、我らを襲つた男について」「私があの時戦つた彼か」

「……やはりお気づきでしたか」

「前の報告と実際戦つてからだな。さらに言えば見つけた時奴の隣には3人ともいた」

「それならばなぜ何もしないのですか?・団長ならばあれぐらいの相手は敵ではないでしょう」

さも当然とばかりに言ひきる部下に思はず苦笑が漏れる。
そういうえば彼については話してなかつたな。

「あれが『加護持ち』だと言つたら……どうする
「なつ・・・・!・!・!本当ですか?」

「ああ。しかとこの“目”で確かめた。あの戦いで彼も力を出し切つてはいない、あれだけでも魔獣に匹敵するがまだ上がると言つていたからな。純粹な“力”的加護を得たなら下手をすればドラゴン種に近いだろう」

ドラゴン……この世界で生物の頂点に君臨する絶対の種族。その体は2階建ての家を見降ろすほどの巨体に一対の翼が生え、大地を踏みしめる4本足を持ち

全身を覆う分厚い鱗はあらゆる攻撃に耐え、魔剣にも劣らないどんな防御も貫く爪・牙で敵を打ち碎く。

その口から出されるブレスはタイプで異なるが主に使われる炎ならば一夜で国を焼き尽くすといわれ、たつた一体で国落としたなんて昔話は探せばよくあるものだ。

世界に『ドラゴンキラー』と呼ばれる少數のものがいるがそれは大抵が下級ドラゴンを退治したものに対しての言葉であり、中級・上級はそれぞれが段違いの力を誇る。

そんな最強種と近い存在だと知った部下は言葉を失つ、さすがの私も上級のドラゴンは相性が悪いからな、私よりも強いかもしれないと思っているのだろう。

それでもすぐに気を持ちかえしそれではと告げて来る。

「それほどの人物がこんな場所で埋もれていたとは……すぐに我らの同士とすべきではないですか」

「それこそ難しい問題だ。現に彼はなぜだか知らないが魔族についている。下手につつけば交戦するかもしけん、そうなれば私を除去全滅は必須だろう」

確かに私と彼では加護の能力上私が優位に立つ、決して負けはない。

だが実際に戦うともなれば多対多となり互いにおもり（仲間）がつく、こつちは1分隊（10人くらい）にも満たない騎士達に対しあちらは魔族が3人もいる、私が斬った爵位持ちの女も回復がすでに終わってるだろう。結局味方は誰も残らないのは分かりきっている

「一応誘いはしたんだがな？」『おれを大量殺戮兵器にするつもりか？誰が行くかアホ』と断られてしまつた

「団長の正体を知つて啖呵を切るなんてやりますね。……ですがこのまま敵につかれば「いいじゃないか」……なんですか？」

「そつちの方が面白い、帰還後手配書をまわせ」

「それだと完全に彼が敵につくじやないですか！？」

「そつちの方が面白い」

きつぱり言い放つた言葉に部下はまたも止まる、先ほどの驚きが感じられないのは彼が私の性格をよく知つてゐるからだらう。

「はあ、団長は自分が楽しいことに優先順位を置くんだから。
・・・わかりました、団長は私の上官で私は団長の部下ですからね、従うしかないですよー」

もはや一介の騎士が騎士団長に話す口調ではなく友人を小馬鹿にするような態度に変わつてきているが所詮傭兵上がりの自分からしたらなんも問題もない。むしろこの方がやりやすくていい。最初は誰もが堅苦しい言葉で話すが自分が気軽に話していいと促しつつけるとこんなやり取りができた。

最近、王宮内で“騎士が騎士らしくない”と噂される原因はあらうことか騎士団長にあつた。

かくして、ジークは己が知らないところでとんでもないことに巻き込まれていたのだった。

s i d e e n d

25話 ジークがいない家で

人でにぎわつたあの祭りから3日が経ちジーク宅にはエリーナ・エリス・ジェス・リザのその家の主を除いた4人がそろつていた。

最初は都市を巡り歩いて回るつもりだったエリス達だがそれをジークは良しとせずあまり出歩くなと言われ缶詰め状態を余儀なくされていたのである。

それに対し、自分達が身に着けていたマントには魔族特有の魔力を遮断する効果を付与していて、それを身につければ問題ないと自信満々に言い張るエリスだったが

「全身マントで体隠した連中が歩き回るってどうよ～すっげー不審者じやん。魔族云々より別問題だろ」
ときっぱり言い返され撃沈されてしまったのだった。

因みにこの家の主であるジーク本人は2日前に「おれドラゴンキラーになつてみたかったんだよね」と置き台詞を吐いて一人どこかに行つてしまつている。

普通なら皆笑つて夢物語だと馬鹿にするだろうがこの人物に限つてはそれが可能な力を持つているためジェス達はどう受け取つていいのかわからなかつた。

ぶつちやけ最近の出費が馬鹿にならないので、ちょいと良く見つけた報酬の良い依頼どうこんたいじで金稼ぎしてるのである。

「くそつジーグめ、自分は一人で出かけておきながら私達には外に出るなどと一体何様のつもりだ！」

「しかないでしょエリス。こうして僕ら魔族を家に泊めてくれてるんだから、

迷惑はかけちゃダメだ」「ガシイイ！…」イタイイタイイタイイタイ
つ顔が潰れる！？

理不尽なアイアンクローラーに倒れ伏す僕、同じ場所に閉じ込められ続けられる状況に耐えられないエリスはその苛立ちを僕にぶつけることでなんとか暇を凌いでいた。

彼女は何かといらついてる時なにかと僕に当たつてくる癖がある。

女だからって魔族の握力は舐めちゃあいけない。相手が人間だったらその頭蓋を粉碎出来るほどあるんだよ？死ねるよマジで。

「はあ・・・・・」

「どうしたジエス、ため息は吐くと幸せが逃げるというぞ・・・もつと吐け」

「やだよ。いや、僕達こんな普通に生活できるからや。ほら、今までずっと追われてたじゃない？」

これまで僕たちは魔界から離れ敵しかいない場所を流れ続けていた。人里に着いて最低限の補給を済ませたら素性がばれないようすぐに次を目指し、ときには寝ているときに襲われたこともあって、毎日緊張が張り詰めてまともに息抜きなんか出来なかつた。

思い出せば思い出す程今この瞬間が幸せだと感じる。

「そうだな。いつもは野宿で碌に眠れなかつた」

「えー、エリスは熟睡してたじやないか。豪華なべ・・・」めんな

「チツ」

「チツ」

余計なことを言おうとした僕にぬつと誰の手が伸びてきたが本能が素早く反応し口から謝罪が飛び出し、その手は舌打ちと一緒に戻つて行つた。

「その件では2人にずいぶん世話になつている。エリイよ、すまないな」

「ううん。エリスたちがきて楽しい、迷惑だなんて思つてないよ」「でも結果的に2人は魔族を匿つてるんだよ?こんな良い兄妹がいるなんて僕は申し訳なくてたまらないよ」

そんなことが知れたらエリイ達も断罪の対象になるかもしれないんだ。今更巻き込んでおいてなんだけどどうしてジークといいエリイはこんなに優しく接してくれるのだろうか?

そんな思考中の僕を見てエリイは首をかしげていた。距離的に聞き取れなかつたつてわけではないだろう。表情からして疑問を抱いてる・・・何に?

「兄妹?」

「ん、どうしたのエリイ?」

「兄妹って誰のこと?」

「もちろんジークとエリイ」

「なんで?私とジークは血繋がつてないよ。ここで暮らしが始めたのもジエス達と出会つた1週間ぐらい前だもん。それまでお互いの顔も知らなかつたよ」

「うそ!?」

エリイの思いがけない告白に僕だけではなく目の前と近くで聞き耳を立てていた他の2人も驚きを隠せないでいた。

だつて年の近い2人の男女が一つ屋根の下で暮らしてるんだ、誰もが身内だつて思うだろ？

周りから見たらジークとエリイの接し方はそれほど親しみがあり、とても知り合つて1ヶ月にも満たない関係とは全然思えない。

大体そうとしてもそんな関係で一緒に住んでたの？？？ 恋人？

「自己紹介の時ジークの後に名前だけ言つたからてつきりそつかと」「『ごめんね。私名前しか持つてないから・・・』

何気ない会話から一変、エリイの顔に影がさしそれにつられて周りの空氣に重みがかかる。

その時を見逃さずにすかさず僕に伸びる手

「アタタタタタつーごめんつ今のは自分が悪かつたです！！」

「馬鹿がすまない。しかしそれなら何故エリイはココで暮らしておるのだ？前までは赤の他人だつたのだろう？」

「エリス、それ僕としてること一緒にはづ！」 再度撃沈

「いいよジエス。えっとね、前に私は精霊が見えるって言つたでしょ？」

ジークと会うまで私はある宗教にいたの。中でも特殊体質だつた私は巫女として暮らしてたんだ

そしてエリイはポツポツと自分の過去とジークとの出会いを語り始めた。

・・・・・・・・・・・・・・

「それでねそれでねっ、ジークはすごいんだよー！」

どんな魔物が来ても一振りで“ドックーン・・・キラン”（比喩あらず）てふとばしちやうの。

あと私にいろんなことを教えてくれたし、優しくしてくれるし・・・お肉食べさせてくれたし・・・」

エリイの話はいつの間にか「ジークはすごいーーー！」に代わっていた。今でも両腕を大きく振つて大剣を持つたジークを表現し、口だけでなく手やときには体全部を使ってジークとの思い出を話していた。

「てゆうかジークも犠牲者（肉）だつたんだね・・・

さつきまでエリイは暗い過去を話していた。両親との別れジークと出会いまでを話す彼女は俯き何かに耐えるようだつた。そして救出され一緒に來いと言わたところでエリイの体が止まる。さすがに辛かつただろうと思いつれぞれが慰めの言葉をかけようとした途端にこれだつた。

彼女は顔を華のように咲かせその口からは止まるひとなぐジークをたたえる言葉が出てくる。

その姿はまさに恋する乙女、田にはいる筈のない人を映し、いつもは感じられない女性ならではの色氣が出ていて、元から綺麗な容姿はさらに磨きが掛かっていた。エリイってこんなだつたつけ？

普段近くにいるから長時間いないことでいつそう気が大きくなつてるのかも知れない。

見てるこっちが恥ずかしい気がしてきた。

でも、死の淵に立たされた少女が出会った人に助けられて一緒に暮らしてゐるなんて、まるで出来すぎた物語みたいだ。

『運命』、そんなものがある2人を出会わせたかのように感じる。

「なんて思つてたけどそろそろ止めようかな？聞いてるこっちが耐えられない・・・

目を動かせば、なおも続く話に耐えられないのかエリスが顔をそらし少しこれに震えている。

ちょっとだけ見える顔が赤らんでいるのはなぜだらう？
そして話題を変えるべく僕は即行動を実行した。

「エリイにそんなことがあつたなんて」

「虫睡が走るな。その連中が目の前にいたら、うつかり握りつぶしてしまいそうだ」

「ホントだよ。あれ、目が見えない？つて潰れる！今まさに僕が潰れる！」

悲鳴がこだまし場が一転する。

エリスも分かつていたのか僕の話に続けるといつものペースを繰り出す。

でもだからって僕を使わないでよ！！

「あははっ、エリスとジョスつて仲がいいんだね

「むっ、そう見えるか？」

「うん。ほら『ケンカするほど仲がいい』って言葉みたい」

「じゃあ違うね。これは一方的な虐待だ・・・ケンカにすらなつて

ないよ

そう返すジェスは仰向けに倒れエリスにマウントポジションをとられている。

見方によつては魅力的（？）な状態、しかし実際にジェスが感じている感情は『愛』ではなく『痛い』

だ。ジェスに反撃する様子は見られない。

エリスの手際の良さを見るとここまで旅で何度もこのやり取りが行われていたのだとわかる。

哀れジェス、頑張れジェス、君がその苦痛から逃れられることはまだ先だつ

「えー？」

エリスとジエスのやり取り（一方的な暴行）が功をそつし、エリイは話をやめていた。

「ねえお外行こうよつ」

「でも、ジークは出るなつて・・・」

「大丈夫だよ、私言わないもんつ。それに此処の人達なら大丈夫だよ

両手を握りしめ胸の前でギュッとして己の意志の強さを主張するエリイ。

あまり根拠がしつかりしてないが彼女が言つことにつそ偽りはないだろう、それにエリスが言つことにも一理あると思つ。

この都市は貿易都市でもあり様々な人種が行き来する場所だ。見た目を気にして体を隠すなんて例は港を歩いたら見つかるだろう。当然それを見かける人達もいるが気にしない、種族・見た目隔てなく接するのが此処の良い所だ。

現にエリイも最近住み着いたわけだがたつたの1週間で馴染みこめていた（子供経由）

「うむ、エリイがそこまで言うなら仕方がない。無下に断るわけにはいかないな

そうとなれば早く行こうではないか、暇で暇で死んでしまう。案内頼むぞエリイ」

「うん。どこ行こうかな

「えつ、ちょっと・・・」

着々と準備を始める二人を止めようとするが全く相手にされてない。もはや彼女らの頭の中には僕やジークのことはなくて外の風景で満たされてるに違いない。

助けを求めるよとメンバー最後の良心であるリザを探す、しかしそのリザは腰に帯剣しすでに支度を終えエリスの護衛の準備完了であった。

そういうえばこの人はエリス一番だったなあ

ごめんジーク。僕頑張ったけど止められなかつたよ・・・まついつか。

結局暇を持て余していたのは僕も一緒。エリスたちに便乗して心置きなく観光を堪能したのだった。

彼らに訪れた久々の穏やかな日常
だが、彼らに安らぎはまだ早い

26話 われ帰還ーそして変化（前書き）

遅くてすいませんでした。

結構前から書いてたんですけど、何度も何度も修正してて・・・

26話 おれ帰還！そして変化

依頼を達成（撃退）させたおれは帰る途中、ドリゴンの巣と都市に挟まれた別の都市にいた。

ドリゴンを退治せず撃退させた理由はさやんとある。ドリゴンと いう種族は仲間意識が以外と強く、仲間の死が伝われば仇を打つべくその相手を探し出して更に暴れる可能性があるからだ。

証拠として頭に生えた角を1本折らせてもうつたが、まあ殺さないに越したことはない。

そしておれは一息入れる為に酒場で休憩中なわけだ。

カウンターに座り一人で食事をしていると周りから興味深い話が聞こえてきた。

「おい聞いたか？アドリアが召喚した勇者ってスゲー強やしげや」

「うじいな。なんでも召喚されて3週間すでに魔族の拠点を2つ落としてるって話だろ？」

声の発信源は長いテーブルに向き合つて座っていた2人の傭兵だった。

酒場はこんな感じで各地の情報が座ってるだけで手に入るといつ
といひが醍醐味だな、うん。

そういうえば今アドリアは魔族と戦中だつたな。いつかと同盟組んでるけどこいつちは軽い支援しかしてないからな、ほととど一国と一国が戦争中だ。

つーか異世界から勇者召喚つてふざけてないねえ？

自分たちの問題に他人を巻き込むって何様？・・・あ、王様か。

召喚された方もすぐに武器渡されて戦争行つて来いつて話だから溜まつたもんじゃねえよな。

もし自分が呼ばれたら、敵よりまづ先にソイツらから「ブチのめすわー。

・・・でも、もう拠点を落としたとか異世界人スゲー。

案外いいネタだったから耳を傾けてそれをシマリヒ食事を続ける。

「でも、その勇者って俺らと同じ人間なんだろ？どんな化け物だよ
んだと」
「あのアドリアが呼んだんだぜ。なんでも国宝の魔剣を使わせてる

「あの聖剣と名高い『ヒュペリオン』を？そり納得だな。おまえど
こまで知つてんだ？」

『ヒュペリオン』・・・確か英雄が出てくる本によく出てきた魔

剣の名前がそうだったような。

光を放つ勝利の剣、だつたか？・・・ダメだ、単純すぎて能力がよくわからん。

「最近までアドリアに行つててな。勇者勇者つるさくて嫌ほど聞いたのや。

あと聞いた所によるとだな勇者を中心とした5人ほどの強力な小隊を作つてるらしいぞ。

中には王家きつての魔法使いの王女とかあの凶刃『デュラン』もいるつて話だ」

その名前で酒場が沈黙で満たされた。

どうやら聞き耳を立てていたのはおれだけじゃないらしい。周りで騒いでいた連中も体越しに2人を見ている。今この店はたつた一人の話に夢中なのだ。

その異変に気付き一人が自分達に注がれている視線に驚き会話が中断されるが、周り（おれ含む）の『いいから続ける』という殺氣じみた無言の威圧を受けて少し怯えながら話が再開される。

「あ・・あの『デュラン』って言つたらついに階級を剥奪された元3階級じゃないか。そんな奴を入れるなんて正気かよ。あいつは犯罪者だぞ」

デュラン、奴はギルドや傭兵たちの中で有名だ。

噂によると奴が関わった件には必ず死傷者が出る、しかも多数。

いわゆる戦いに快楽を求める戦闘狂らしく、各地の戦場に現れては敵味方関係なく斬り殺すって噂もありおそらく事実でそれが理由で奴はギルドや傭兵達に嫌悪されている。

今まで捕まらなかつたのは奴が上階級者であるといつ計り知れな
い実力が起因している。

誰も蛇がいると分かりきつた數をつつきたくないといふことだ。
他にも戦いの中で瀕死に近い傷を負つたことがあるが翌日は完治
してたという話もあるけど定かではない。

まあ上階級者つてだいたいはバケモンばっかだしな（笑）。

「あ、ああ。性格はイつてるがな、実力は確かだ。犯罪者と自慢の娘すら戦わせてんだ、それほど力入れてるんだよあの国は。
名声も、魔界制覇したら軽く上塗り出来るからな。現に着々と成果は出てる、絶対悪の魔族を押してくるつて言つたらあの国の連中はそ
んな些細な問題は頭から吹つ飛んでるんだよ」

「マジかよ・・・。まともじゃねえなあの国は」

「元からだろ？こっちと同盟組んではるの表面だけ、実際に敵視し
てるのは魔族だけじゃなくて人間以外の種族だからな。どっちにし
ろ今あの国を敵に回すのは危険だつてことだ。」

・・・あ！そういえばこれは飽く迄噂の域なんだがよ、あの国は今
人集めしてゐらしげ」

男は思い出したかのように手をポンッと叩きちらなる持ちネタを話しだした。

「人集め?当たり前だろ、戦争中なんだから一人でも多くの戦力がいるんだろ」

「その集められてる人つてのが『女』って話さ」

「女?それに特別ねえ。ほんとあの国がやることはわからんねえな」
分からないと黙つて男に対してもう一人に男が意味ありげな笑みを浮かべる。

「・・・こいつを聞いたのは偶然だつたんだがよ、ぜつもその集められてる女の条件があつてな。
精霊を見れたり、会話が出来るつていう」とらしげ。すでに各地から何人も集まつてゐるそつだ」

精霊が見える・・・会話ができ・・・る・・・まさかつ!・!

パリイン!!

「おっお密せん!大丈夫ですか!?」

「あつ・・・つと、スマンつい力んじまつた。別に怪我してねえよ」

答えを知つた瞬間思わず興奮してしまい持つていたグラスを粉々に潰してしまつた。

店員が心配していくが適当に受け流しながら2人の会話へと耳を

傾ける。

「ふーん。どうやって“集めた”のかが気になるな。どうせ碌なやり方じやねえだろうけど」

「だな。・・・はいっ、俺が知つてるのはココまでだよ。散つた散つた！」

2人の話はそこで終わり聞き入つていた周りの傭兵たちもはそれぞのテーブルに戻つていった。

静けさがなくなり元の賑やかさを取り戻す酒場。

しかし、この情報はおれに不安を残していく。

・・・・・・・・・・

「…ところでどうしたの？」

田の前には顔を悩ませている魔族3人がいる。

あれから一日が経ち家に着いたおれは酒場での一件（勇者）云々まで）を彼らに報告した。

「私たちが離れていくうちにそんなことになっていたとは……。しかも拠点を2つ落とされたか」

「距離的に近いトロン、カタロスでしょう」

「だな……。ジークよ話ではどちらが優勢なのだ？」

「アドリア。って言いたいところだけどな、国つてこいつのはいい結果しか広めないから断言できない」

「そうだな。しかしあそこは国境の2点だ、先手を取られたのは違いない」

おれの中途半端な答えに少し落ち込むエリス。そのままリザと話しこそでんでしまった。

でも、エリスのこの反応、気になるな。魔界でどんな立場だったんだ「イツ？」

いつも気品を感じさせる態度、おれでもわかる魔法使いとしての才能、護衛は爵位持ちときたもんだ。

以前それに着いて興味本位で聞いてみたが本人にはばぶらかされ、

ジエスは知らない」と言つて、リザは・・・まあ眞づまでもない。

魔族社会がどんなのかは知らないけど、せつとかなり上の位だ
るつなコイツんち。

「わへと、おれはまたちょっと出るや・・・で、どうしたヒリイ?」

「また・・・遠くに行くの?」

それじゃ、てな感じで玄関に向かおうとするときの前にヒリイが
たつていた。

そしてなぜか寂しそうな声と潤んだ目で迫ってきてそれがおれをパ
ニックに陥れる。

「おひおこおいー!どうしたつ

えーなにー?おれ何もしてねーぞ!ああ泣きそう!?

「寂しかったんじゃない?初日は元気やうだったけど昨日は暗くて
さあ『ジーク』って見てるこいつが辛くなつたよ。」

「え?・・・そつなのかヒリイ?」

「・・・(ハクン)」

なんと叫ぶ?とでしょ~

放置すればするほど大きく弾けそうな爆弾のような涙がみるみる
一つの皿に溢れてきているではありませんか。

と、ふざけてる場合でもなくヒリイは今にも涙を流しそうでギュ

つと結んだ口はプルプル震えている。

しかあああし！！長年近所のガキどもと暇さえあれば共に遊び、そして数え切れないほど泣かしてきたおれの経験を舐めるでない！！えつ何したかって？普通に『手放しタカイタカイ』とか『人間風車（両手持つて大・回・転）』だよ？

そして発動！幾度の泣かした子供たちを経て習得した『泣く子も黙る』『ツトハンド』！！！

まだ頭を撫でてるだけだけど、これが結構効果ありなのさ。

なんせ今年も10人くらい泣かせたが全員これでヒタツと泣き止む
んでるからな！

「行かないって。安心しろ。達成報告でギルドに行くだけだよ、一緒に行くか？」

「行く！」

「ベジタブルー？」

答えは喜びの返事といつかのアツクスボアを思わせる突進だった。
くそ・・・選択ミスった。

「ところでジークさん、着かぬ所を聞きますがその袋から飛び出している剣みたい鋭くて赤くて綺麗なソレはなんですか？」

「一人かやの外だつたジエスがあれが持つていた袋から大きく飛び出たアレを指さしていた。」

「これ？あー。・・・『ラバーンの角』」

「あれはマジだつたのか・・・」

・・・・・・・・・

「 ～～」

「えらく上機嫌だなエリイ」

「だつてジークが帰つてきたんだもん」

暗くなり魔灯で照らされた道でエリイはおれより前で鼻歌を歌いながらくるくる回つている。

あれからエリイは随分変わつたがその姿はあの夜の川の時と変わらず、光に照らされた白銀を思わせる髪と容姿は相変わらずキレイだ。

彼女の窮地を助けたことでそれなりに頼られてるとは知つていたけど、離れただけでこうだとは・・。

おれといつ存在は思いのほかエリイの心にくっ込んでしまっているらしい。

「エリイ」

「ん? なーにジーク?」

「エリイはこの都市の人達をどう思つ?..」

「うーんつとねー。とっても良い人達だよ」

「そつか。じゃあジェスやエリス達は?..」

「友達ー!。魔族だけど優しいもん」

偽りなく正直に答えるエリイ

「じゃあ・・・おれは?..」

するとエリイはピタッと止まってなんか下に向いてモジモジし始めた。

「え・・・と、その・・・『』『』『』『』『』」

「ん? 何?」

無粋にも聞き返してしまおれ。

「す・・・あ。なのかな?..」

「いや、逆に聞かれてもなあ」

すると徐々に声の大きさが上がる。
でも話してゐる本人も何だかわからないといつ感じだ

「私がここに来て出会つた人たちは皆いい人達で、みんなスキだよ。
でも・・・ジークへのスキとはなんか違う」

うつ、赤くなつて見上げてくるエリィの顔がおれの心を深く抉つ
てくれる！！

急になんだこの気持ちが、いつまではずかしくなつてきたぞおい。

「ジークとはいつも一緒にいたから分からなかつたけどジークがい
なくなつとき最初は平氣だつたよ。
だけど・・1日くらいしてから少しづつ・・・怖くなつてきちゃつ
て。ジエス達と・・いたのに、
うう・・また、1人に・・つぐ。なるのかなつて」

身の内を話すエリィはついには目に涙を溢れさせ嗚咽をこぼし始
めた。

・・・見てるだけで凄く心が痛い。

「泣くな泣くな。今は田の前にいる。それに言つたら？お前は笑つ
てた方が似合つて」

「うう・・ひくう・・・うう」

「ああもうー」

泣きやまないエリイに自分もどうすればいいのか分からず勢いでエリイの手を取ってそのまま自分の胸に抑え込むように抱きしめた。さつきのアレを使わなかつたのは単に想につくよりも早く体が反応したからだ

ただ抱きしめた。それからどれくらい時間が過ぎたか分からないくらいその状態が続き、気づけば腕の中のエリイは泣きやんでいた。充血させた目で見上げ、おれの一言一句を聞き漏らさないように息すら止めて、ただおれの言葉を待つていた。

「・・・落ち着いたか？」

返事は無言の頷きだった。

「うん・・・、聞く

やつと落ち着いたのを確認してエリイを放し、それでも両手をエリイの肩に残して語りかける

「酒場の一件の話はまだ続きがあつたんだ。ソイツのよると隣国のアドリアがある特定の人達を各地から集めてるらしい」

「それが私に関係あるの？・・・」

告げるのに少し躊躇してしまう。できればこの子にはもう平穏の

中で幸せに生きてほしーのに・・・

「集められてるのは『精霊を目視・会話が出来る女性』が条件だ」

「あつ・・・」

「わかつたか?エリイ、おまえはまだ危ない状況にいるらしー」

実際あの国が何をしでかそうとしてるのかは分かつてはいない。だが戦争中の国に連れて行かれれば無事に済むわけがないのは明白だ。

そんな事はさせやしない。

いつ死ぬかもわからない生き地獄に帰してなるものか!

「じゃあ、また私は・・」

「だからおれが守つてやる、絶対だ!」

エリイの言葉が続く前に、それを書き消すほど声で遮った。

「でもそれだとまた」

「これも前に行つたはずだよな。”おれを頼つてみないか?”って。あの言葉に期限なんてつけた覚えはない。

それになエリイ、お前と出会つてまだたつたの数週間だ。それで も、お前といついた時間はスッゲー楽しかったんだぜ。

たつた数週間だったけど、お前はもう他人じゃない。おれにとつ

てお前は・・・

「わたし・・・は？」

「クシとエリイから息をのむ音が聞こえた。よく見れば彼女の頬は赤くなっていた。

日が沈み辺りが暗くなつていたがそれでも赤くなっているのがよくわかる。

「いもづとみたいなもんだ」

「・・・・・・・

エリイのジット目攻撃がジークに直撃ー！

「あれ？ どうしたエリイ。なんか気に障つたか？」

「むー。まだ妹か・・・」

まるで“子供が親からほしがつてたものをプレゼントされた時それが予想と違つて不満を抱いてる”みたいな顔をエリイはしてる。すると親の立場であるおれはすゞい罪悪感に襲われるわけで・・・

「ふふ、まだまだこれからだもんっ」

何か悪いことをしたと思い落ち込んでいたおれにはよく聞き取れなかつた。

文句の一つでも言つたのかと思つたがエリイは両手を胸のあたりに持つてきてグッと握り、何か意氣込んでるかのようだつた。

「えつ今何て言つた？」

「「ううん、 いこ。」これからもよしとねジーク」

「？・・・。応つ分かつたー。」

話が終わつたところでちよつビギルドに倒着した。

「数日ぶりティーナちゃん・・・ん?あいつ等はもう帰つたのか?」

「ほんとだ、誰もいないね」

「よく帰つてきたのうジーク」

誰もいない静かなギルドでおれとHリイを出迎えたのは杖をついた顔に深い皺を刻み長く蓄えられた鬚を生やした老人、このギルドの長、ギルドマスターだった。

「あれ、どうしたマスター。此処に出てくるなんて久しぶりじゃん。いつも隠居隠居つて言つて仕事丸投げしてゐるあんたが此処に一人つて何事?」

「余計なことは言わんでいいわい。大体ワシはもうヨロジヤダ?もう死ぬぞ?別にいいでないか」

「言ひきるなよジジイ。んで、一体何の用だ?」

するとマスターは視線をおれから外し空いた手で白髪の鬚を撫で

ながらあつひじひと田を泳がせた。

明らかになんか困ってる。

「それなんじゃがのう・・・。おおーその子が噂に聞くお前が連れ帰ったというエリー・ナちゃんか」

「は・・はい、新しくこのギルドに入りました。ようしきお願ひしますオジイちゃん」

「この子は老人と会うたびに“ちりん”だな。その辺はすぐじいと思ひ。

「ほつほ、いい子じゃないか。つむ、合格」

「何がだよ、いいからわざと事件言えよ。もう忘れかけてるだろ？」

「ふおー・・・わづじゅつた」

「これだよ。このジジイもう頭がボケてきてるからわざと話を進めないとすぐ忘れる。」

「今朝、このギルドに通達があつてのう。内容が内容じゃからマスターであるワシ自身が伝えねばならぬと思つてな」

「通達？また別の魔獣が出たのか？」

「そうではない。新しい手配書が来てな、よりによつてその人物が我がギルドから出たのじや」

そういうマスターは何故か呆れ顔だった。

ギルドから罪人が出る、おれ達に取つては身内が罪を犯したのと同義だ。だからその知らせは大きな衝撃を持っていた。

「マジかよ・・・。その馬鹿はじやあ誰なんだ」

するとマスターは深いため息をつき、おまけに冷めた目をつけてこちらを見る

「一応聞いておくがお前は心当たりはないのかの?」

「ないな。最近はギルドによく足を運んでないし、ましてやこのギルドにそんなことする馬鹿がいたのかすら知らなかつたよ」

そのときのジジイの顔はまるで「ゴミを見るかの?」だった。
なんだろう・・・前にもこんなことがあった気がする。

「これがその大バカ者じゃ」

ジジイが懐から取り出した例の手配書を受け取り、おれはその“大バカ者”を直視した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれ?」

26話 おれ帰還!そして変化(後書き)

因みにジークが撃退したドリゴンは下位です

おまけ 勇者

「ほんと、ファンタジーなんだなあ此処つて」

俺は黒川純。^{くろかわじゅん}この世界で言うならジユン・クロカワ。つい先月からここまで日本に住んでた17歳の高校3年生だった。

その俺がなんでこんな所にいるのかといふと、異世界から“勇者”として呼ばれたのが原因だ。

道端を歩いてたら突然目の前が光つて真っ白になつたと思つたら目の前には杖を持った俺と同じくらいで腰まで伸ばした白髪のものすごい美少女がいた。・・・あとその時は気付かなかつたけど彼女の後ろには中世の騎士と似てる人たちがズラつて2・30人くらいた。

開口一発目で「勇者よ、我らをお助け下さい」だぜ？突然のことでも驚いてたけどちゃんと意識を持つてたら絶対吹いてたな。

普通の人たちだつたらパニックになつてただろう。でも俺はそがらなかつた。

召喚？勇者？俺が？この見た目だけはちゃんとしてて実はいつもパソコンにかじりついて運動音痴なこの俺が？クラスの女子から“顔だけ良くてあとはキモい”って言われてた俺が！？

頭の中は歡喜で一杯だつた。

だつてこれあれだろ？ネットとかでよくある異世界召喚もので俺tueeeeつてやつじゃん！！

しかも俺を呼びだした術者によると元の身体能力は召喚されたことで格段に上がつてゐらしく、試しに人通り動いてみたら、体に羽がついたよつと軽くでまるで別の生き物に生まれ変わったかと思った。

召喚の後、王様と面会したときこれでもかつて思ひくらい礼儀正しくそしてカッコよく！振る舞つてやつたらすっげー高評価だつたぜ。なに？性格が変わつた？毎日妄想して、就職先の面接対策した高3舐めてんじやねえ。

あつちの要求は今この国と戦争してゐる魔族と一緒に倒してくれだつてさ。最初はどうしようかと迷つたけど、勝つた暁にはそれ相応の位をくれるし、良ければ娘（召喚の時目の前にいた美少女）をもらつてくれないかだつて。勿論即okした。

最初の訓練で一般の騎士達と戦わされたけど初めてにしては結構いけた。連戦で10は超えた。

今では王宮騎士と肩を並べる強さが手に入った。

そしてファンタジーの醍醐味つていつたらやつぱり魔剣！！

なんでもその魔剣（いや聖剣か）は時代の英雄や勇者しか使えないようで、選択の間といわれる所に深く突き刺さつていた。

内心抜けるかドキドキだつたけどあつさりと抜けた。周囲も聖剣が抜けたことでスッゲー驚いてた。

これでやつと勇者黒川が誕生つてえわけだ。

で、この聖剣ヒュペリオンがこれまたチートつてやつ？

持つた瞬間俺の身体能力はさらに倍、魔法もバンバン使えるようになつた。

しかもこの剣の名前を叫んで振り切つたら大きな光の斬撃が出るん

だ
ぜ
！
！

1回だけ使用したさ

回憶

「ヒュペリオン！-！-！」

オオオオオン！……………！

シーヴィヴィヤン・……………ストボオオオオオオオオオオオオオオ

ちょ
W、これ
クスカリバー
W
W

回憶終了

目の前でいた50匹くらいの魔族が大きな光の波に飲み込まれて塵になつた。何人が味方がいたけど仕方ないだろ?思い出したら笑えてきた。

「どうしかいたしましたかクロカワ様？」

「ちょっとね、前の魔族の拠点の戦を思い出してただけさ」

俺専用に用意された部屋に王女様と2人きりだ。名前はシェルフィー、ほら名前からして美女じゃん。

王女っていうから偉そうだと思つてたけど、意外と可愛くてさ。いつも一緒にいる。戦場でも彼女の魔法は活躍し『アドリアの聖女』と呼ばれてる。うん納得。

彼女も俺に惚れ込んでいた。まさに両思い、ラヴラヴだ。いつもは専用の侍女を連れていてなかなか一人きりになれないから貴重な時間なのだ。

因みにその侍女も姫様専属というだけあって唯者じゃない。何度もシェルフィーを担いで彼女を巻こうとしたことがあるがその度に先回りされてしまう。というか彼女自身戦場でも僕達と一緒に立つて戦ってくれるパーティの一員だ。こういう人に限ってかなりの実力者だから経験不足の僕ではたぶんまだ勝てないと思う。

「あのときのクロカワ様はとても素晴らしいです！…」

「そうでもないさ、シェルフィー達のおかげだ」

「まあ、クロカワ様つたら もつあなたは誰よりも強いでは『いやまだだよ』あ・・・」

あー、そういう『世界』つて強いのは魔装具とか魔族だけじゃないらしい。

以前隣国の騎士団長が来た時、調子に乗つてちょっかいかけてみたことがあった。

ほら『騎士団長』つて名前からして強そうじやん？この国の人たちはそれほど強くなかったからきっといつも同じだと踏んでたんだ。

でも結果は惨敗、攻撃は掠りもしなかつた。常人では反応できない速さでもそいつはヒヨイヒヨイかわしたんだ。それでムキになつてヒュペリオンまで使って挑んだでも結果は一緒。しかもアイツは自分の獲物すら抜かなかつた。最後は「ふん」つて鼻で笑いやがつた！！

これ以上にないくらい屈辱だったね、魔法も使おうとしたけど魔力を練つた瞬間無力化された。

なんだよあのバケモノ、魔族よりよっぽど強いじゃないか。

あとで聞いたらその男は“加護持ち”という存在で今までアイツは負けたことがないらしい。俺を呼んだ術者もそうだつていうしね。ある人は“人の皮を被つたバケモノ”って言つたくらいだ。

最終的な目標『打倒クソ騎士』が決定した瞬間だ。

その後やつ当たりを込めて遠征中に聖剣使つてうさ晴らししたらすつきりしたけどね。

「そう焦らなくともいはずれは超える壁です。私はクロカワ様を信じています」

「ありがとうございます」

「はい（真っ赤）」

「ンンンッ

「どうぞ」

「そろそろ出発です。したくなさい、クロカワ。・・・王女様もおいでのようだ」

入ってきたのは黒い甲冑を着こんだ長身の男性、行動を共にしている元傭兵のデュランだつた。なにをして剥奪されたか知らないが元3階級という破格の階級保持者だつたらしい。

いつもは冷静で紳士のようだが戦いになると笑いながら相手を切り刻む変態だ。

その実力は確かで、今では俺×聖剣とサシでやりあえる一人で同時に他の奴よりも強いということとで彼に鍛えてもらつてゐる。

・・・とせざり舐めずつ回すよつた見るのはやめてほしい。

腰に刺してゐる剣は同じく魔剣で刃の根っこに大きな田玉が着いてゐる
悪趣味な装飾が施されてゐる。凄く興味があるけどテュランの戦闘
狂とその剣の装飾からして碌なものではないと思ひスルーしている。
一度彼に前に来た隣国の騎士に勝てるかと聞いたが勝率はとても低
いと言われた。そしてあの男が元2階級の伝説の傭兵だと聞かされ
てさらに驚いた。

「もう？ 次はどこ？」

「前戦と程遠くないところです、カタロスといいます。あそこは魔
族だけでなくドwarfなどの種族も共存してると聞きます」

ドwarfか・・・そういえばこの世界はいろんな種族がいるって聞
いたけどまだ見たのは人間と戦場で見た魔族くらいだな。人間は言
うまでもなく地球の人と大して変わらないけど魔族はそれぞれが個
性的だつたな。全身紫で一本足で立つ牛男だつたり、リザードマン
つていう人型爬虫類がいて周りの奴らが言う絵にかいたような容姿
だつたが戦つっていた中には人間と全く変わらない姿をした魔族もい
た。

なんというか・・・ねえ？

「まあ、あの魔族と共に存する種族がいるなんて信じられません。で
すが魔族に手を貸すなど愚かなことを。等しく断罪を受けるべくで
すね」

「・・・そうだね」

ま、別にどうでもいいけど。俺はただハッピーエンドを迎えたたら
それでいいさ

ねめか 勇者（後書き）

うーん、よくいるがませ犬？

王女の最後のは別に彼女自身の意志ではなく國の意志のよつたもの
です。

生まれたえよければ・・・みたいな。

27話 『れ』であれも犯罪者

「あれ？・・・・あれ？」

手には“俺のことが書かれている手配書”を持ち、頭は衝撃の事実にショートし口は繰り返し同じ言葉をほき続けた。

「では問うだ“大バカ者”。お前は何時何処で一体どんなバカをしでかした？言つてみよバカ」

一度で二三度もバカと言われた。

「違う！…おれは無実だ！！」

「ホントかのう。とうとう戦闘中に他人も一緒にバツサリいつたんじゃなかろうの？」

「するか！？」

もうバツチリ犯罪者扱いである。いつも何か反論しようとすると頭がついていかず碌な言葉が思いつかない。

「まあ、何をしたかはソレに書いてあるがのう」

「それを早く言えよ！？なになに・・・・

『』の者、我らが領土を侵した魔人である。見つけ次第騎士団への連絡、また、可能なら討伐せよ。

因みに、この魔人は魔族でも逸脱した実力者である。出来る限り無茶な行動は控えるよう『

「なんじやバカ」

とつあえず書いてみた

世には人達し
しや魔人達ししゃね?」

おれの両親は人間だから自分は純粹な人間で

「じゃのう、大体お前とはウリトラがいた時からの仲じゃからなあ、それくらいの確信はあるわい

じゃあ何故散々バカと言つたのだらうか」のジジイ。あれか?日々の扱いの当てつけか?

「じゃがその手配書には魔人『ジーク・クルード』と丁寧に名前までついてある。ここの人たちは真実を分かつてくれるがよそ者や領主はそうはいかぬじゃろうて」

「ジーケは何もしてないよー！」んなの出鱈目だよー！」

必死に否定してくれるエリイに照れくさを感じる。

「一分かってあるみお嬢ちゃん」ワシも彼を信じとる

「さっきまで何度もバカと言われたんだけど？」

「それはお前がバカをしたからじや。本当に何をしたジーク？魔族として手配されるなど前代未聞じやぞ」

「だよなー。なんでようりによつて魔族に・・・・・・・・・あ

魔族・・・確かいたな・・・・家に

「ふお！！突然大声を出すでないバカ者！危うく心臓が止まるかと思つたぞい」

「おれ心当たりすつゝげええあるー。」

問題が家に住んでます。

「実は・・・・・かくがくしかじか」

ジジイは俺の話を静かに聞いてくれた。魔族を助けたこと、魔族に手を貸したこと、たゞつと聞いてくれていた。

「なるほど。それだとこの仕業は大会中にいた王都の騎士団のものか。

しつかし加護持ちと分かりながらお尋ね者にするとはばつ飛んだことをするのー」

「信じてくれるのがジジイ？おれのやつてる」と

「お前がこんな時に嘘をつくとは思つてないわい。確かにお前はバカじやが、それでもちゃんと芯の通つたバカじや。お前がすることに悪意がないのはワシらギルドのみんなは誰よりもわかつてゐる」

バカ、バカ言われたが何だか照れくさくなつてきた。

こんな所でなんだかんだで優しいこの老人はおれ達ギルドの親みたいな存在だ。

「オジイちゃん、いい人なんだね」

「ヤレ」でじや、お前に言い渡すことが幾つかある

さつきまでの優しい顔は消え、代わりに相手を射抜くような眼をした威厳を持つたギルドマスターがあれを見据えていた。

やつぱぱうなるか・・・

「今日を持つて我がギルドメンバーである『ジーク・クルード』を・
・・・破門とする」

静かに、冷徹に、おれの処遇が言い渡された。

「なんで・・・わかつてゐつて言つたの?」

声を上げて異を唱えたのはエリイだけだった。感情を抑えきれずマスターに走り寄りうとしたエリイだが手で押さえ制止する。

「いいんだエリイ」

「でもー・ジークは『いいんだ』・・だけぞ」

これは当然の結果だ。おれは家族に迷惑をかけた。たとえそれが無実だったとしても一度広がった噂は消すことはできない。マスターの選択は家族を守るためだ。そしておれのためでもある。

犯罪者ましてや魔族と噂される人物をもつたギルドがあれば下手すればギルドそのものが潰されかねない。そんなことマスターもおれも望んじやしない。

「それでも、『い』はおれの家で・・・みんなおれの家族だ。それは変わらない」

「すまないなジーク、ワシにはお前を守つてやれなんだ

「いーつて。皆は信じてくれてるんだろ?それだけで十分だ。大体おれはもう一歩だぞ、もう守られるだけじゃねえんだよ」

「・・・やうじやな。

そういうえば、お前にはまだ今回の依頼の報告を受けたなかつたの?。どれ、最後はワシが務めてやるつ

ゆっくりとした足取りでカウンターに行き、よっこりとその身を椅子に降ろした。

その風景は、昔おれがまだガキでギルドに遊びに来た時と変わらなかつた。

「ういえ、最初の依頼を受けて報告を済ませた時もマスターが此處にいたつけな。

「……確かに、依頼はこれで達成のよひじや。……強くなつたの、ジーク」

「ああ

「おおーー良い知らせじや、ジークお前はこれまで階級に昇格じやーーおめでとい」

突然立ち上がつたと思つと意味のわからないことを言われた。このジジイは何をほざいてるのだうつか。またボケたか? 今のおれを昇格とかするか普通?

「は? いやなんですよ。今このときになんだよ」

「なんじや? いやなのかの?」

「べつにまづつてねえ

「なに、旅立つ我が子へのちよつとした贈り物じや。もう階級が上がらぬのじやから此処で上げとかねばな、スマンがこの田舎じやお

前の階級はこれが限界じゃて。じゃが、我がギルドから初の3階級傭兵の誕生じゃ。胸を張れ！お前は手配される前は3階級傭兵じやつたのじや！」

いい年した老人が親指グーするはどうかと思うが、その贈り物は確かに大きく素直にうれしかった。

俺がとつとう3階級か・・・

「ありがとう・・・マスター」

「ふあつふあつ、頑張れよバカ息子。

「ああ、それとな、旅の準備はやつくりするがいい。明日発てばよい」

重ね重ねこの人には頭が上がらないな。この借りはきつと返す。

「ほんと、世話になつた。・・・じゃあな

最後の別れを告げてギルドを離れた。

「・・・ぐすつ、・・・ふえ」

「なんでエリイが泣くんだよ

「だつて・・納得できないんだもん」

「そりか？・・・おれは嬉しかったぜ」

・・・・・・・・・・・・

sideエリーナ

ジークは満足したみたいだけど私はあまり納得がいかなかつた。
だってジークは何もしてないのに（ある意味大犯罪犯してます）
！！

話を聞く限りだと原因はこの前ジークが戦つたこの国一番の騎士
らしい。

決めた！いつかその人に一発お見舞いしてやるんだ！！

どこの勇者と願いが一致した瞬間である。

そして完全に夜になり家に到着すると留守番をしていたリザ達が
何とも言えない空気を放つて・・・と言つより帰ってきたジークか
ら目をそらしていた。あれから一時間も経つてないけど一体何があ
つたんだろう・・・

「お、おかえりジーク」

「ただいま。なんかあつたかお前り?」

すると核心を突かれたようでジェスは私にもすぐわかるくらいい
クッと肩を震わせた。

「えっとね、その・・・」「めん

「は? いきなりなんだよ。さうでも割ったか?」

「違ひよ。・・・そんなんじ」「もういいジェス。私が話す」「リザ・
・」

「ジーク、お前が魔族として手配されたことは知っている。私たち
のせいだ・・・すまない」

謝罪を口にしたエリスはそのままジークに向かって頭を下げ、そ
れに続いてあとの2人も同様に頭を下げる。

エリスの告白に私とジークは驚いていた。だつてあの時はギルド
に3人しかいなかつた。オジイちゃんもまだ内密だつて言つてたし。
「なんでそんなこと知つてんだよ? 確かに手配されたけど公表はま
だされてないぞ」

謝れることに慣れてないジークは困つたなあと頭をガリガリかい
た。

「リザを着けていたのだ。リザは隠密に長けているからな

そういうえばリザさんは影を扱う魔法を使う。前に私たちの前で影の

中に消えてくのを見せられたことがあった。それなら誰も気が付かないかもしれない。

「そうか」

「お前たちのせい……おれは

「あ……」

急にフルフルと震えだしたジーク。それを見て言葉を無くすジエス。

絶対ワザとだ、俯いてるけど私からはにやけてる顔が丸見えだもん。笑いを堪えて震えてるもん。

この状況じゃ誰だつて騙されるに決まってる。

ちょっとジエス達が可哀想だ。この場で唯一主張が許される私がなんとかしないと！

「ジーク、もう止めてあげたら？」

「いいんだよヒロイ。僕達のせいなんだから」

ジークの怒り（おふざけ）に対してジエス達は何の抵抗も見せない。例え許されなくともそれでいいといった覚悟が感じられる。

「これはジークがいけないよね？」

「笑うなんて失礼だよ」

「は？」 「なに？」 「・・・」

「あー言つなよエリイ！！」

焦つて私の口を抑えたジークだけどもつ言つちゃった。こればかりは仕方ないとと思う。

すると突然何かを感じたジークが硬直する。同じく何か危ない気配を感じた私は早急にジークの手を逃れて安全地帯へと逃げ込んだ・・・こわい。

「あーあ、言つちやつたよ。・・・つたく、エリイは『冗談つてもんを知らんな・・・なあ？』

そう言つてジークはジェス達に問いかけるけど返答は全くない。しかし、ジークの開き直った態度にこの部屋にかかつっていた謎の圧力はより大きくなつたと思う。

「確かに今回は明らかに僕達が悪くかったよ・・・」

「さすがの私も頭まで下げたのになあ・・・残念だった」

「エリス様、・・・命令を」

3人名々が剣に手を置き呪文を唱え始めた。

「や、やだな。軽い冗談だろ？ な？ だからその武器を下げる。あと詠唱もやめろ！」

必死の制止も叶わず、さつきの態度から一変し魔族達は断罪を受ける側から断罪する方に変わっていた。

そして愚かな罪人に無慈悲な判決が下される。

「やれ」

「ここから目と耳を塞いでいた私にはジェス達が何をして、ジークが何をされたのかは知る由もなかつた。

・・・・・・・・・

「つたくよー。ちょっとした遊び心じゃねえか、あそこまですることねえだろ」

地獄の一時から解放されたジークは私の治癒を受けて明日の支度

のために家中を歩き回って、それに私も手伝っていた。

治癒と言つても応急処置程度だから私の経験上絶対安静が必要の状態だつたけど、完全復活を遂げてピンピンしているところを見るとやっぱり加護持ちは凄いと思つ。

「ホントに大丈夫？」

「あー。大丈夫大丈夫、エリイのおかげで 完全回復だ！」

「そう? よかつたあ」

私のせいでのジークがあんな目に会つたわけだけど、そのおかげで役に立つことが出来たのは嬉しいな。

私はこれしか役に立てない、・・・ジークがまた怪我をしたら役に立てるかな?

「（ゾクゾク）！？・・・誰かが何かよからぬことを企んでる気がする」

むつ・・・しうがない、別のやり方を考えよう。

「さてと・・・。」それで支度は終わりだな

た。
必要なものを取りだした後、用を終えた各部屋は綺麗に整頓され

やることを終えたジークはその部屋一つ一つにまた入り、そこで何かをするでもなくただ時間をかけて辺りを見回すと次の部屋に入るのを繰り返していた。

何をしてるのかは聞かなくてもわかる。最後となる我が家をみて、その風景を頭に焼きつけているに違いない。この家は数週間私にとっても我が家だった、それに対しジークにとっては長きと共にした大事な故郷だ。何気なく置かれた家具にも小さな思い出がつまってるはず。

「ねえジーク

「あれ？ いたのかエリイ。もう遅いから寝ていいぞ」

廊下を歩いてるあたりから見てたけどジークは私に気付いてなかつたみたい。相変わらず笑っているけれどその笑みは何処か寂氣だ。

「また・・・また帰つてこれるよ

「・・・そうだな。また一緒に帰つてこよう」

「へへへんー」

せつかく励まそうと思つたのに、逆に自分がジークの言葉に困惑してしまつたのがすくなく恥ずかしい。

“また一緒に帰つてこよう”

その言葉は私が寝るまで、頭の中で何度も繰り返された。

s
i
d
e

e
n
d

都市を旅立つてからどこへか続く道を唯歩いていた。

何故おれが知らないのか、それは唯單にエリス達に着いて行つてるだけだからだ。

「すごかつたね。あの見送り、ジークもエリイもかなり親しまれてたんだね」

「つたくよー。ギルド総出、おまけに都市のやつらまで揃つて来るなんて信じりんねえぞ」

あれは驚いた。まだ人が起きるにはまだ早い時間に門へ行つたら何十人もの集まりが出来ていた。
しかも揃いにそろつておれの見送りなのだと。出発を朝早くに決めたおれの浅はかな考えは皆にはお見通しだつたらしく。

「それ程人望が厚かつたつてことでしょ？皆ジークのこと信じてるんだよ」

「そう言つておきながらお前、嬉しそうにヤーヤーしていたださ？」

相変わらずからかい口調のエリスにムシときたがそれに対しても否定もなれば異議もない。

「まあそつなんだけどよ」

嬉しくないはずがなかつた。ギルドの奴らから近所の連中、中に
は無理して起きてきた子供達まででそろつてたからな。ついホロつ
ときちまつたじやねえか。

「一部は違つたけどね」

と笑うジエス。・・・いたなそんなの。感動を返せこの野郎。

中に大きな旗持つたむさい野郎どもがいてや。振つてる旗とき
たら

『いかないでエリーナちゃん！』

つて大きな字で書かれてたからな、そいつ等最後までエリイエリ
イつて叫んでた。

躊躇なく撤去したがな・・・！

そんのが極一部いたが大概は俺との別れを惜しんで泣いてくれ
ていた。

ギルドの皆に、『近所さん一同、依頼で世話になつた人達、酒屋
の飲み仲間、いつもケンカしたジツちゃんこと鍛冶職人達、・・・
数えればきりがなかつた。

さすがに一緒になつて声をかけてきた門番とか兵はどうかと思つ
た・・まあ知り合いだから良いけど。

『いつてらっしゃい！』

最後に『さよなら』と言われなかつたのが凄く嬉しかつたな。
また帰つてきても良いんだと・・・

結局おれ達の旅立ちは静寂には程遠いたぐさんの声援で見送られたのや。

「ホントに良い街だつたね・・・」

また昨日の憂鬱モードに入つてしまつた。おれにあんなどとい
てまだ気にかけてくれてゐるらしい。ジエスも結構なお人よしだ。

「だからそんな顔すんなつてジエス」

「さうだよ、私達はまた帰るんだから。ねえジーク

『いつてらつしゃい』つて言われたからこは『ただいま』つて言
うつもりだ。

「そゆこと、もひやんなこと気にしなくていいだ。もうおれ達は仲
間だからな」

「ありがとう、わかつたよ」

一先ずジエス達の罪悪感は解消出来たか?

「しかしジークよ、今更なんだがエリイはつれてきて良かつたのか？手配されたのは飽く迄お前一人だったはずだ。あの見送りに来てた連中のどれかに預けるのも一つの選択だったのではないか」

ホントに今更の質問を聞かれた、実際エリイは手配も何もされていないし無関係に近いからそう思ったのだろう。

「それは無理だ。お前らには言つてなかつたけど、今魔族と戦争してるアドリアがエリイみたいな性質を持つた女性を各地から集めてるらしいんだ。この国とアドリアは同盟関係だからな、いつあの都市に奴らの手が伸びるか分からぬからな」

「それにジークが私を守ってくれるって言つたんだよ。だから私はジークに着いていくよ」

「あんまつ言つなよ。あーそんなくつくなー」

放しませんとばかりに右腕にしがみ付いてくるエリイ。振り払うと思えば余裕だが可哀想になるからしない・・・何よりおれ得だから。

でもあのことはあまりぶり返さないでほしい。よく考えたらあれは結構恥ずい。

勢いとはいえ何しちゃつてんの昨日のおれ・・・穴があつたら入りたいとはまさに今この状態のことと言つのだろつか？

「・・・確かに言つていたな、2人で抱き合にながら

リザのさつ氣ないカミングアウトは突然だった。

「は？・・・お前なんで知つてんだよー」

リザ、何故知つている？

あ！確かにいつ昨日おれ達を着けてたって言つてたな。
見たのか！？見てたのか！？あら・・・よく見たら少し笑つてる？
見てたんだな！！

「えへへ・・・」

焦るおれを余所に頬を紅潮させて恥ずかしげるエリィ。満更でも
なさそうなのがおれと違うところだ。

他の反応は予想どおりの結果だった。生温かい視線がおれを貫いて
くる。でもちょっと予想外なのがジェスとエリスが少し乗り気でな
いことだ。この手の話は苦手なのかはたまたウブなだけなのか。

「むむ・・・む」

「・・・・いつか・・・・僕も」

なんだろう・・季節はまだ夏なのにここだけが春の匂いがする。
おちょくられるのが避けられたことはおれにとつて吉の方向へ動い
たに違ひないが。

「・・・ま、先に進もづぜ」

……………

「はい！今から第一回お尋ね者達（一人を除く）会談を始めたいと思します」

「何だ、急にどうしたジーク？」

人気のない森で休憩中、もつもつまで煮込んでいた昼飯の鍋を中心
に団をとつていたのを期と思い、おれはいづれ問題になるだらう事
をここで話し合つことにした。

「議題はいつだ。『これからおれ達はどうする？』どうだ、話し合
うべきじゃないか？」

「ああ」「なるほど」「確かに」

おれとエリスは仕方なく都市を離れたわけだが目的は持つていな
い。行くところはないし行きたいところもない。このまま各地
をぶらついてもメンドい追つかけっこ繰り返しになるだけだろう。
それにこれは互いを知るいい機会だ。これまで一線は控えていた
が、もう仲間を口にするからにはエリス達の事情は知つておいても
良いはずだ。

「お互い腹の中ぶちまけようぜ。」少しどちら家もほつぱつ出してきた
んだ。いやつて言つてもついてくからな

「この手を使うのは卑怯な氣もするが気にしない氣にしない。早く話を進めるためだ。

「そんな！嫌じゃないよ！唯でさえこの地を魔族3人がうろつくのは気が気じゃなかつたけど、加護持ちのジークと治癒を使えるエリイ、すげく心強いよ！」

もう少し戸惑つかと思っていたが答えは即答だった。嬉しい意味で否定してくれた。

「そうだな。いくら私達が強いといえど前のような不祥事があるやもしれん。その気持ちありがたく貰い受けよつ。しかし・・・そうだな、私達に着いてくるとなれば私達の目的を知らねばならんな。ちょうど良い、ここで話しておこう」

どんな話が聞けるのだろうか。魔族の事情なんて聞けないからな、オラワクワクすっぞ！

「まずは改めて名乗るとしよう。

私はエリス・ヴァーティア・ヴァルハラ・・・現魔王の一人娘だ」

一瞬世界が止まつたかと思つた。

「は？」「へ？」

んー。聞き間違えかな？よく聞こえなかつたわ。ほら、エリイも
おれと同じ風に首をかしげてる。

「ごめん、聞き取れなかつたからもう一回言つて。出来れば ハ
ツ キリ と」

「この近さで聞き取れないとは仕方ないな、単純で分かりやすいと
思うのだが」

だよなー。おれ等の耳が悪いんだよなー。おれ聞いてないよー。
エリスの口から『魔』だなんて聞こえたはずがない。エリスが『
王』って言つたはずないさ。

・・・なんでだろう、ジロスとリザが『諦める』つて田で見てくる。

エリスは大きくスースーと深呼吸をする。ドでかいのがきそうだ
ぜ。

「もう一度言ひや。私は・・・まーおーつーの！む！す
！め！だー！」

音のない静かな世界が生まれ十数秒ほど経った後

『ええええええええええええええーーー』

人気のない森に男女の叫び声が響き、その声は近くの都市まで届いたといふ。

「じゃなくて！魔王の娘！？お前が！？どうして！？なんで！？
！お前が！？」

現実逃避をやめ勢いよく立ち上がったおれはまともに機能しない頭の内をそのまま吐き出した。

「そう言っておひつが

エリスは世間話のように平然と言つてのけた。しかしおれたち聞いた方にとつてはとんでもない爆弾発言だ。寝耳に水どころが寝てる所に上級呪文をブチこまれた位の衝撃だ。

よく考えてみる、唯でさえ人間にとつてバケモノのような存在のそれまた上の上のバケモノの娘だぞ！これが驚かずにはいられるか！－

「落ち着け」ドス－！

「たばー！？」

リザによる強烈なパンチがあれの鳩尾に突き刺さつた。腹から背中へ突き抜けた衝撃は遠慮が欠片も感じられない。いつかおれが放つた獣人への鉄拳制裁よりも力が乗っていた。肉体の耐久力に自信はあるが、突然それも無防備な急所への攻撃はおれを激痛と呼吸困難の一重苦へと陥れるには十分だった。

「だつ大丈夫ジーク！？」

心配したエリイが凄い速さで駆け付け倒れ伏しているおれの背中を懸命にさする。こういうのに治癒術が効かないのが痛いところだ。エリイの行為は正直慰めにもならないがそれでも不思議と治りそうな錯覚を起こす。

「ぐ・・がふつ・・じほごほつ・・・つふうー。ありがとエリイ。もう背中さすんなくて良いぞ。

つーか何しやがるー！魔族のマジパンチとか洒落にならんぞー！」

「加護持ちのお前にはこれぐらいしないと効かなそうだからな。スマン。それなりに本氣でいってみた」

反省はしてる、後悔はしてないー」の言葉に反響する返事だった。

「効くつて何ー？お前は氣付かせる度に相手に瀕死の重傷を負わせんのかー！」

「イツへの考えはかなり変更がいるな、まともな奴かと思つたらコイツイイ性格してやがる。

「おれが肉体系の加護持ちじゃなかつたら体が爆発する威力だつたぞー！」

「ほくもときどき手合わせしてると分かるけどリザは結構な筋力だよ、それによく耐えたね・・・」

自身も顔を青くさせながら言つジエス。おれらへ今のと近い経験をしてくるのだろう、言葉に説得力が感じられる。

そこでエリスがパンパンッと手を叩き仲裁に入りまた話は戻る。

「続けるが。まず簡潔に言つと私は魔王を父に持つてゐる。いわゆる王女だ」

「「ははーーーー！」

間が空いて頭がサッパリしたおれとエリイの反応は早かつた。即座に両膝を地につけ頭も地に着く勢いで下げる間に両手を添えた。

一般庶民が知る典型的な敬い方だ。

「2人そろって急に身を下げるな。よい、お前達は私達の恩人なのだ、楽にするがよい」

「こちちはノリのつもりだがエリスの方は氣に入つてゐよう。やっぱ姫様だな、『いい』って言つてるけど口調からして下と上という関係が出来かかつてゐる氣がする。

「あつそう、じゃ楽にするか。それでエリス、なんでこんな所にいるんだ?」

「お前は切り替えが早すぎやせんか?もうひとつどぐらい敬え。敵国とはいへ姫だぞ」

「だつて楽にしろって言つたじやねえか。いいだろ、誰に対しても平等に接するのがおれの信条だ」

第一、ここで調子に乗られたらこのままエリスが偉そうにするだろうが、それがなんかムカつく!」

「今さらうと愚痴」ぼしたよね?でも一国の王女にその態度だとむしろ清々しいよ」

「今ほど権力にものをいわせたいと思つたことはないぞ・・・!」

どしたのエリス、全身から黒いオーラが滲み出でるぞ。

ん?なんだエリイ・・・聞こえてた?やべ、またいつの間にか心の声が漏れてた。ここが魔族の領地だつたら洒落になんねえ・・気をつけなければ。

「まあいいや。それは後にしより。私達の目的は一つ、『ヴァルハラ』に帰ることだ」

「エリス、しつもーん。・・ヴァルハラって何？」

「なぬ！魔族の国だ！！知らないのか！？魔学はこちちらほど発展してはいないがこちちらと同じように秩序ある立派な国だ！」

エリイの質問に目を開いてエリスは驚いた。大げさな気もするけど自分の国を知らないと言われたら良い気分にはならないだろ？。ましてや自身が王女という身分にもなればそれは屈辱に近いのかもしない。

「そう言えば魔族の国の名前なんて聞いたことがなかつた。おれも初めて知つたよ」

「やうなの？でも僕らの国つて唯一の魔族の国だからかなりの知名度はあるはずだよ。おかしくない？」

「たぶんおれ達の国からしたらそつちは国としても認めてないんじやねえの？」

昔は魔族がさらに暴れてたつていうし、バケモノが国を持つなんて思いたくないとか？

ほら、魔族の領土は大陸でも孤立して隔離されてるようなものだろ？だからおれ達は魔族の国があるといふを『魔界』って呼ぶんだよ

「うん。私も魔界は『悪魔が沢山いて、いつも殺し合いしたり攫つ

た者を食い散らした血で地面は赤く染まつてゐる』って教えられたよ

「なんだその地獄絵図は」

「要は歴史的な問題だらうな。つてそんないいから早くこゝに至つた経緯を話せ。そこが気になる」

話が進まん!!新しいことを言つ毎に話が脱線してしまう。人間焦らされるのは嫌いな生き物である。

また質問が出るかもしれないからあらかじめエリイには『黙つて聞いとこゝうぜ』と釘を刺しておいた。

「わかった。・・・ごほんつ!

私達がこの地でさすらい始めたのはほんの3ヶ月ほど前だ。最初は私とりザの2人だけでこっちに来ていたのだ。理由は・・まあ正直にいえばこっちの文化に興味があつてな。旅行・・と言つのが真実だ。

お父様も度々こっちに来たことがあるらしい

おい、もう何度も魔王が襲来してたらしいぞ。大丈夫かうちらの国?

ていうかエリスの知りたがりの原因は魔王かよ、バリバリ遺伝してるじやん。

「もちろん正体は悟られぬ様にしていたぞ。認識疎外の魔法も完璧だつた。悟られることはなかつたさ。

ではなぜ・・?そう思うだらう。問題はヴァルハラに帰還する時だ。ここで問題だジーク。今から3か月前の土の月、大きな出来事があつた。それはなんだ?」

「土の月？待てよ。その時つて……そうだ！思い出した。アドリアが魔界に対する宣戦布告をして戦争が始まったんだ！」

あの出来事は大陸中に衝撃を生んだ。今までおれが生まれてから、と言つよりここ百年くらい魔族との戦争は起こつていない。歴史書に載つてる聖戦を最後に魔族は突然侵攻をやめ今に至る。確かにそれは魔王が代わったことが原因らしい。侵攻をやめた魔族は依然何の動きも見せなかつた。お互い百年不可侵が続き『平和』の日々が続くさなかの出来事だつた。

「そうだ、まさにその行軍中のアドリアに目を着けられてしまつた。いくら認識疎外の魔法をかけていたとはいえ虫をも許さぬ警戒網、多数に対しても効果は意味をなさなかつた。あともう少しで国に帰れる所で逃亡生活が始まつたのだ」

エリスは徐々に元気をなくした、思い返した過去は彼女のトラウマとなつて残つてゐるのだろう。

次第に体が小刻みに震える様は何かに怯えるようだつた。

「こわかつた。・・生まれて初めてだつた、あんなにたくさんの殺氣を受け止めたのは、思わず腰が抜けた。

リザが囮になつてなんとか時間を稼いでくれたが、すぐ追いつかれるのは目に見えていた」

そりや怖いに決まつてるだろ。数え切れない程の敵を前にしたら常人は失神もの。

いくら魔族が強くても圧倒的な数の暴力にはなす術はない。・
魔王は大丈夫そうだけど。

彼女らによくぞ生き残つたと称賛を稱えたいくらいだ。

「そこ」で僕はエリスと出合つたんだ。たまたま狩りに出でて逃げてる途中の彼女と

言葉を繋いだのはジェスだった。なるほど、だから一緒にいたのか。

「でも相手は軍隊だる、どうして逃げ切つたんだ？」

「そこには僕にとつては庭みたいなものだつたからね。秘密の逃げ道を使つたんだ。・・ヴァルハラとは逆方向だつたけどね。僕にはそれが限界だつたんだ」

「なぜ謝る。ジェス、お前も私達の命を救つてくれた。お前がいかつたら私とリザはここにはいない。だから謝るな、私はお前に感謝している。その・・ありがとう」

「そつ・・あの・・うん、どういたしまして」

あれ?一人だけが違う世界にいるみたいだ。
この二人つて『何か起ころ アイアンクローラ ギャー!』って
関係じやなかつたつけ?

「はははと一緒にいたリザに聞いてみるとこよ。」

(リザ・・おいリザー。) (けいかひか)

(なんだ)

(前々から思つてたんだがあの一人つてどうなんだ?もしかして・・

・「レガ?」

通じるか分からぬが右手の薬指を一本立てて見せる。

(分からぬ。私も日々影に隠れたりして2人きりになつたところをのぞく・・じゃない、見守つていたがどっちも奥手なのか進展がない。互いに気はあるかもしけんが。機会さえあれば・・・)

通じたよ! ていうかアンタ結構楽しんでたのな。それなら・・・

(なんだその手は?)

(協力するぜ。お前はエリィと組んでエリスを、おれはジェスを・・・どうだ?)

(・・・フツ)

ガシイ!!

魔族と人間が世界で初、一つの意味で手を組んだ歴史的な瞬間が生まれた。

「リザ、ジークと手を組んでどうしたのだ?」

お、2人が異世界から帰ってきた。

「いえ、新しい仲間と親交を深めていたのです」

「?・・そうか。これから付き合いは長い、仲良くなれ。ジークも

な

「さこ」「むらー。」

「おの時おれとつざには早くも団結が生まれていた。そして今自分等の考えていたことは同じだう。

『お前らがなー。』

「…………ねい! 聞いてるのかー。」

「ぐ、なんか言つたか?」

「ヒリスが私達に何か欲しいものはないか? だつて

「なんでもた。別に要求した覚えはないぞ。」

「お前達は私達のせいで巻き込んでしまったからな、何かしなくては私の信条に反する。なんでもいい、何か私にできることはないだろうか。」

「やう言われてもなー。」

今はあこにく足りない物はない。金も前の依頼でかなり貯まっている。

「じゃあ、こんなのはどう?

ジークはギルドをやめてるけど元は傭兵でしょ？だったら僕達を『ヴァルハラまで送る』って言う依頼として受けたっていうのはどうかな？』

それって・・す、いい考えなのでは？

「ジョスくんそれ採用！ってことだエリス。今からおれとエリイはお前らに国へ返すまでの護衛として雇つてもうら。報酬は帰つてからで良いし、いるもんが見つかったらこいつで提示する」

「わかった。それまでお願ひするところ。よろしく頼むぞ、ジーク、エリイ！」

「了解！」「おーー！」

依頼受諾！目指すはヴァルハラ・魔族3人の護衛！！

28話 旅立ちと事情（後書き）

一応投稿しましたが多分また修正します。

26話 森での出来事（繪画）

すこません。ほんとすこません。

結論。おれとエリイはエリス達をヴァルハラへ向かうまでの護衛といつ形で雇われることになった。

因みに経路はと言つとアレスティナ アドリア ヴァルハラとなつてゐる。徒步だ。わざわざ敵地を通らなければいけないのはヴァルハラはアドリアとしか国境を持たない。地形的にひょうたんのくびれの部分の様な感じだと言えば分るだろうか?つまりどのみち避けられない道ということだ。周りは海で囲まれているから一応『海路は?』と言つたが即却下された。

そして、おれ達は相変わらず森をさまよい続けてたりしている。

「こしても・・この森つて広いよー。見て、向こう山があるけどその麓まで続いてるよお」

「確かに。まだ疲れはしないがいい加減うんざつしてくるといふだな。気分転換に此處一帯を焼き払つてみるか」「やめとけ」

「なに、この私に掛かれば5分もかかるん」

「そういう問題じゃねえんだよ。やめてくんない?おまえ仮にも魔

王の娘だから冗談に聞こえないんだよ!」

「エリスは前からこうだよ。退屈が嫌いで暇つぶしに小さな池を蒸

らせたり草原を焦原に変えたんだ」

「なんちゅう自然に迷惑」

「これからはジークも一緒に止めようね・・」

いやだ！－そんな悟った目でみんな！誰がそんな胃が痛むよつな仕事をするか！

・・・わ、話題をそらさねえと。

「あ、あれー。エリイが見当たらないなー」

「・・・ふう・・あつ待つてー」

声はちよつと離れた後ろから。息を切らしたエリイが走ってきた。そもそもこの森に入つておよそ3時間、それだけ歩いてもまだ終わりの見えない森の大きさにエリイの心身は共に疲れきっていた。もともと馬車も使わず山道から獸道を通る厳しい旅、異常体質ぞいの4人にエリイが着いていくには苛酷な話だった。むしろ気付いてあげられなかつた自分達が愚か者だ。

そのうち馬車か何かでも調達しとくか・・・

エリイの言葉で気づいたことだが、最初にこの森に入つた時に見えた山の距離が今見ても縮まつた気がしない。だつこの森に入つたときには見た山との距離が変わつた気がしないから。

「大丈夫かエリイ？結構歩いたから一休みでもするか、きついんだろ？」

「いつ今のは違うよ！靴紐結んでたんだよ。だから気にしないで先に行こひつよ」

迷惑をかけまいと必死に元気をアピールするエリイ。その行動は仲間の中で自分だけがお荷物になつてゐるのではないかといふ後ろめたさから來ていた。もつとも息は次第と絶え絶えになり己の首を絞めたことに気づいて落ち込む結果となつてしまつた。

「ジークの言う通りだ。まだ先は続くだろ？ 定期的に休憩を挟もう。なに、追手もここには来るまいしな。何も無理をして先を急ぐ必要はないから辛い時は素直に辛いと言つておけ。エリイが倒れてしまつてはそれこそ困つてしまつ」

「…はあい」

自分のふがいなさを感じたエリイが首を垂れる。

「じゃあお前らはココで休んでる、おれはちょっとドリル回りを回つてくる」

「えー。一緒に休もうよ。ジークもたくさん歩いたんだから」

「はははっ、気遣いありがとな、でも遠慮しとくわ。大体このぐらいでバテるほど柔じやないんだよ。それに気になることがあるからな」

「気になること？」

「ああ、この森はどこかおかしい。これほどバカでかいくせにまだ一度も魔物と遭遇してないんだぜ？ 今まで何度もこんな所に来たことがあるけど、これだけでかけりやもう十回は出会つてもおかしくない。」

「それって良いことじゃないの？」

「まあ普通はそんなんだけだな。ことは静かすぎて逆に不安になるんだよ。だから、リザ」

「わかった。ここの警戒は任せとおけ」

「よひしが。ま、このメンツだと出合つた魔物の方が可哀想だけどな」

「の4人…やつぱ一人除いて3人は強い。

一番は爵位持ちであるリザだらう。あの影を使った戦術は一言でいえば反則だ。自分の影からウジャウジャ触手を出し、それが一斉に

敵を串刺しにせんと攻撃する。他にも使用法があるらしい。

エリスはあの魔王の娘、遺伝したものの中にはその才能も含まれている筈。

そしてジェスは魔界で狩りをしていたと言つた。苛酷な弱肉強食の世界で生き残つた彼の技量は疑うまでもないだらう。かつてのベヒモスだろうが彼らの敵ではない。

「ジーク、私は？」

「あつ、エリイも凄いからな。治癒術はエリイしか使えないんだから期待してるぜー！」

「うん！頑張る！」

さつきまで疲れてたんだからほどほどにな・・・

そしておれは一人離れてあたりを調査しにさうに奥へ進んだ。

・・・・・・・・・・・・・・

「にしてもほんとになんにもでてこねえな。こんだけ広くて森も豊か・・・。まものアイツ等の餌になる動物も皆無ときた。ホントにどうなつてるんだ此処？」

調べた結果、結局生き物一匹見つからなかつた。あちこち探して何かの巣らしきものをいくつか発見したがどれももぬけの殻と化していた。茂みに隠れてるかと思ったがそれも外れ。職業柄魔物特有の匂いや動物の気配には敏感なのだがまず生き物の気配すらない。気

持ち悪いぐらいに孤独を感じる。

「『』まで何も出ないなんて……いや、これはまるで」

ふと経験したことのある感覚が頭によぎる。

そう……これは依頼の行き先でよくある現象だ。

内容はどれも魔獣やそれに匹敵する敵の討伐だつたはずだ。武器片手にその場にたどり着くまでその配下の魔物以外は大概いない。危険を察知した生き物はすべて逃げ出しそこにはその『危険』以外は残らないのだ。だとするとこれが意味することは……

「『』の森『ナーカ』がいるのか……む」

「の匂い……

「くさいな」

さつき見た周囲を見渡す。そして無造作に生えた茂みの奥に先ほどまでは気付かなかつた気配があることに気づいた。またそこから鼻にツンとくる傭兵にとつては慣れた生臭い鉄の匂い、しかもかなり濃密だ。

「なにが出るかな……つと…」

邪魔な草や大木を大剣で一閃して吹き飛ばしそれまで見えなかつたものが露わなつた。

「うわあ……」

その光景に思わず顔を歪めた。

そこは血の海だった。狼の魔物の死体でできた・・・辺りにあらゆる肉片や内臓が飛び散りどれも原形を保たず四肢を欠損せている。

そこは激戦が繰り広げられた後のようで、紅い地面には深い爪跡や魔法でも使ったのか3つほど爆心地が出来て周りの木々もへし折られなぎ倒されていた。

時折見える大人くらいある大きな胴体、人間の子どもを丸のみしそうなでかい口、たしか狼の魔物の中でも大型に入り強さでも一二を争い高い知能も持っている天狼だつたはず。それを数えるとその数はなんと三十にも及んだ。

これまた不可解だ。ここで死んでいる数の多さ、そして天狼と言えば一体一体が並みはずれた強さを持ちしかもその上群れで行動する。もし遭遇すれば大概は数秒もたたずに骨にされると言われギルドでも特に危険視されている部類に入る。それが全滅・・・ハツキリ言つて信じられない。

そして特に気になるのは、死体が残り過ぎているところだ。

もしこれをやつた犯人が同じ魔物だとしたら此処まで死体は残らない。ソレを食糧として持ちかえるのが自然の摂理、魔物同士の縛張り争いだとしてもそうだ。この有り様だとコレをした犯人はそういつた目的ではなかつたということだ。しかし群れの天狼を全滅させる魔物なんて聞いたことがない。誰かが討伐で来たにしても群れの天狼討伐は騎士団でも手に負えない。

・・・ 一体どんな奴がコレを？

「早くあいつらのところに帰るか。もし近くにコレをした奴が残つてゐるならリザは大丈夫として……エリイ達は荷が重すぎる、つかピンチ？」

『オオオオオオオオオオオオオオ…』

「おわ！なんだ！」

突然空に野獣の咆哮が響いた。武器を握んだ手に力を入れとつさに辺りの警戒をするが何の影も見当たらない。そして一一度三度と続いて聞こえた咆哮でおよその位置を知る。

「あーもう。よりもよつてあいつらの所かよ。心配はするだけ無駄かもしれないけど……やつぱり不安だよなあ」

来た道を無視し音源に向かつて直進する。邪魔になる物は全て斬り払いながら。

・・・・・・・・・・・・

s i d e リザ

私達を取り囲むのは狼の群れだった。しかし毛の色が統一でない、見る限り3色はある。種類の違いの見分け方の最たるものとしてまず外見の形や色を見る。それからするといまここには3種類の魔物がいることになる。そしてそれらが空に向かつて咆哮し何処かの仲間を呼ぶ。

別に脅威ではないわけで負けることはないが……。

「随分と沸いてくるな」

「・・・だね」

この群れ、とにかく増える。私達の周りはすでに五十体を超える狼で埋め尽くされ木々の影の中まで唸り声が聞こえてくる。さつきまでは虫一匹いなかったのとのうのに一体何だとこののだ?

「見てー向こうに誰かいるよ」

エリイの声にしたがつてその方を見ると狼たちの後ろにある木の下に人型の影が見えた。

そしてそれが進むと前にいた狼たちはそれに襲いかかることなく逆に道を空けてどいた。

「魔物を人が従える?」

「違う、彼らは同士だ。従えるのではない」

ジエスの疑問に答えたのは「ちらに進んでくる影、そして森を抜けその身が露わになった」。

シークより一回りも一回りも大きい体躯。

一目で分かる鍛え抜かれた屈強な筋肉に包まれた肉体。

「一の腕や胸の周りに生えた人間には決してない毛深く白い獸毛。獸毛と同じく白い無骨に生やしたたてがみに似た荒々しい髪。髪から飛び出した耳は毛に包まれている。

獸人がそこにいた。

そして私はその獸人から漏れだす鬪氣とその後ろから発せられる容赦ない殺氣を感じ取りいち早く行動を映した。

この殺氣の濃密さと獸人の後ろにまだ控えている輩の数は決して油断できるものではない。特に前に見える獸人の強さは自分と同等と考えられるだろう。

すぐさま自分の影を伸ばし黒い円でエリス様達もろともを中に入れる。

「リザ。奴は……」

「はい。かなりの腕前のようにですね、私でも油断すれば討たれかねません」

「それだけじゃない。後ろに数人いるよ。あとでつかい狼も」

「・・・う」

「お前達はもう帰つていいで、良くなさせてくれた後は私達がしよう」

獸人は私達に目もくれず此処に集まる狼たちにそう言つ。そしてそれを聞いた狼たちは頷いて散り散りに去つて行つた。・・・分かつていたがこの獸人は狼の獸人か。

そしてこの場に残るは私達4人と森から出てきた新手の獣人4人とそれぞれの横に寄り添うように立つその獣人達と同じくらい大きい白い巨狼。確かに足取りで進み来る彼らは私が敷く影の周りを一定の距離を置いて取り囲んだ。

癪に障るがその判断は正しい。この円は相手にとつてのキルゾーンだ。一度踏み込めば足元の影は刃となり敵を容赦なく切り刻み、串刺しにする。この敵に何処までそれが通じるかわからないが牽制にはなる。しかしこのままでは緊張状態が続くだけだ、防御を捨てこの影を攻撃に転じることもできるがそれでも確実に安全といえるのは私だけだ。エリス様とジエスはそれなりに戦えるがこの状況はさすがに分が悪い。護衛としてエリス様の安全が最優先なので防御に徹しなければならない。

「ふん。ここはお前達の住処だったか。しかしだ層な出迎えだな」

この状況でも欠けることのない気丈さを見せるエリス様・・・さすがです。

「よく又ケヌケとそんなことが言えるな。・・・この醜い魔族風情が！」

今度は別の獣人が応えた。見るからにジークと同じくらいの歳、しかし彼の顔はいつも笑顔のジークとかけ離れており目を血走らせ私達をにらみ殺すかの如く見て、今にも襲いかかってきそうなくらい興奮していた。

「なんで分かつたの！？三人ともマントは脱いでないんだよ！」

「はっ。そんな布切れ一つで魔力を遮断した所でおれ達の鼻を騙せ

ると思うなよ。いくら人に似せたところで意味はない。形は違えど貴様らからはあいつらと同じ匂いがするんだよこの化物が……」「やう怒鳴るな。エリイが怖がっているだろ？が、落ち着け、禿げるわ。・・・む、そりいえばお前わしき『あいつら』といったな？此処には前にも魔族が来たのか？」

相手の怒り狂つた声に揺るぎもせず逆に煽つてもしろ自分の質問をするエリス様・・・さすがです。

そして当然その態度に獣人の青年は一層顔を赤くさせる。

「戯言を！－あれは貴様らが仕向け『沈まれシャドット』ヘルケン様・・・」

遮つたのは最初に出てきた男。^{ヘルケン}どうやら彼がこの獣人達のまとめ役のようだ。

「ほう。まともに話が出来そうな奴がいたな」「いや、もとより話し合つつもりはない。・・・我らが此処にいる目的は唯一つ」

「結局話しにならん。いいだろう、早く始めようではないか、こちらもずっと歩かされていて飽きていたしな。ジークが帰つてくるまで戯れる」としよう

「此処にいない仲間がいたか・・・だがそれは期待しねえことだ。一度離れたならもう戻つてこねえよー」

シャドットの言い方に絶対の自信が感じられる。もしや・・・

「二の森に入つてからひょっとすると迷つてしまつた気がしていたのだがそれはあなた達の仕業か」

「やつぱり僕達って迷つてたのか・・・」

そうだと頷きヘルケンが応える。

「この森のあらゆる木々に『まじない』を掛けている。それを知っている我ら以外はこの森を出る』ともできず延々と迷い・・・後は餌となるだけよ」

「さながら『迷いの森』、いや『獣人の隠れ里』と言つべきか。だがどうしてこうもよくしゃべる?」

「知れたこと。貴様等を此処で始末するからだ」

なるほど、確かにいつていたな。

「リザ、私の守は良い、その獣人が危ないのだろう? リザはそいつを抑えておけ。心配するな・・・私もアレを使う」

そう言つてエリス様は服から取り出した皮袋に入れ中からアレを取りだした。それを見てある程度の安心を得た私は広げていた影を閉じ元の大きさに収めて剣を抜いた。

エリス様が切つた啖呵に準じてジェスが剣を抜き周りの敵が身を構える。

「行くぞ」

誰のものかわからない言葉で戦いの火ぶたが切られた。

30話 迷子の迷子の・・・ト犬とおれ

sideエリーナ

私達の中で一番強いリザに最初に現れたムキムキのお爺さん（プラスおつきな狼×2）を任せて私たちは残りの3人と2匹の相手と対峙していた。

そして一人の獣人が（シャドットではない）エリスに話しかけてきた。

「見る目はあるなその娘、確かにヘルケン様は我が部族でもさらに腕の立つ方だ。さすればヘルケン様と戦っているあの女はお前たちの中で一番の腕の持ち主、全員で当たりず一いつに分けたということか」

「私の生まれたところではどれも強者しか居なかつたからな、戦いについての鼻が効くのは当然だ」

強者の代表は『魔王』だもんね・・・

「ほう、しかしそれは自身が強者ということではないだろう。残念ながら私の鼻はお前達3人が私達を相手に出来る程の力は匂わない」

敵は自信気にそう告げ自分達の優位を主張する。

「それ位弁えている。集団戦なら相手が連携が得意な狼ではなおさらだ」

「え！」

「大丈夫だよエリイ」

ジェスが声をかけてきたがエリスのやり取りを聞いて物凄く不安が沸いてきた。エリスは事実上『勝てません』と言ったのだ。いつもと変わらない態度で向き合っているから勝てると思っていたのにエリスはそれをバッサリ否定した。でもそんな危機的状況になつているのにエリスどころかジェスも自信の氣に満ちた顔を崩さなかつた。

「ならば何故そもそも自信にあふれている?」

「お喋りはそこまでにしろ!さつさと逝きやがれ魔族!」「危ないエリス!!」

瞬間、後ろで耐えていたシャドットが怒りを爆発させエリスに飛びかかった。

その勢いはまさに疾風、咄嗟に叫んだがエリスが迎撃に魔法を使うには致命的な早さでシャドットは接近する。

その時エリスは臆することなくそれどころか微笑んで自分に迫りくる敵を見ていた。

「言つただろ?『集団戦なら』と。だからこそこのコレなのだ!」

エリスはそう言つとわざわざから持っていた拳ほどの青色の小瓶に管を刺して引き抜くとそのまま口に入れて目の前に迫る敵に向かってそれを笛のように吹いた。だがその管からは音は出ず代わりに巨大で透明な丸い膜が出てきた。

「ふざけるな……」んな子供遊びなど割りてしまえば……」

このときシャドットは誰よりも怒っていた。魔族に肉親であるまだ幼く自分を良く慕ってくれた弟を殺され、魔族と相見えた時全力を持つて仇を取るという復讐に燃えていたのだ。

しかしそれは愚行、普通の狼ならそのわけのわからない透明な玉にさえ警戒をしたに違いない。なによりこの状況で出るものに意味のないものが出る筈がない。だが怒りに我を失っているシャドットは今は怒り狂った野獸と化し、完全に警戒というものは消え失せていた。

それを見てエリスは言つ。

「まず一人だ」

シャドットがつっ込んだ透明な玉は割れることなくそのままトプンと小さな音を立ててシャドットをその内へと収めた。なのに中のシャドットはその途端嘘のように動かず中で浮いたまま止まり彼の戦いは始まることがなく幕を降ろしてしまった。

そしてその光景に私と他の敵は驚きを隠せない。

「シャドット……だからあれほど怒りに身を任せたなど言つたのに」

「仇を討つぞ！」

「ヴォフ！－！」

「ねえジェス、あのシャドットって人はどうなつてるの？もしかし

て死んじゃつたの？」

念のため問い合わせた。エリス達は良い人だと知っている、だからこんなにあっさりと他人を殺せるのかと思わずにいられない。それにこの人たちは何か勘違いしてるみたい、聞くに多分悪い人達じゃないと思う。それにこの人たちが敵意を向けているの飽く迄私を除いたエリス達だけで私にそれを向けようとしてない、私には手を加えないとしているのが分かる。

そしてその問いにジエスは笑つて答えてくれた。

「大丈夫だよ。あの人は今幻術にかかるてるんだ。体に害はないよ。あの膜は一見すぐ破れそうに見えるけど唯触つたりしても壊れない。術にかかった本人が術に打ち勝つかエリスが解くまではあのまま」つまりあれに捕まつた者は後は煮るなり焼くなりなんでもござれ、エリスの気分次第ということだ。

それにエリスもそつだと微笑んで・・・

「安心しろエリイ。別に殺しはせん・・・せいぜい半殺しだ」

笑顔で悪魔のささやきをした

「は、半分殺すの？」

「やめてよ、安心するところだつたのに台無しだよ！」

エリスのこれは唐突で内容が半端ない。私が慣れない物の一つだ。

「ふふふつ。エリイは可愛いな、そう真に受けれるな冗談だ。それよ

り、これで相手は4人。これなら一人2つだ。・・・行けるなジェ

ス

「え・・・うん、こっちは任せて！」

声を掛け合うと二人は互いに背を任せるように立ちそれぞの前に立ちはだかる敵を二人は考えを共有してゐるかのように笑って見た。その眼は絶対の自信に満ちている。

やつぱりこの二人は仲がいい。

あとと思うことがあるとすれば・・・空氣を呼んでまだ襲つてこないてきの人たちはやつぱり良い人達なんじやないかと思つ。

s i d e e n d

「だあ～もう！なんで着かないんだ―――？」

やつ当たりも兼ねて目の前に立ち並ぶ巨木を走りながらに両断する。状況を考えておれはそれなりに本氣でダッシュしてるつもりだ。自分が来た道は覚えてるが急いでいる為記憶を無視して直線ルートを

選んでけもの道を爆走中。道を隔てる数多の巨木も大剣一振りでスパンだ。

だが何故着かない！？

おれあれから結構走ったからねーあいつ等とはぐれた時よりも走つてるからー！

それなのにあれの周りには相変わらず木、木、木・・・いい加減飽きたわ！

しかしそんなおれの心の叫びも虚しく同じような風景は終わる気配がない。

走つて斬つて走つて斬つて・・・おれがやつてるのは道を作る伐採作業か！？

「あーもひやめたやめたー仕方ないからー旦もと来た道に戻るか・・イダー！」

前進を諦めて踵を返した途端田の前が真っ暗になり同時に顔面、主に鼻の頭を強打してしまった。

「いってー。つたくなんだよ・・つて木かよ」

ぶつかつたのはそこいら辺にあるのと変わらない木だった。おれとしたことがうつかり振り向く方向を間違えたらしい。

「いひちだつたつけ？・・つてまた木か。んじやあこつちか・・・

ドーンと木が生えていた

「……………じやあいつか

ドーンと木が

「じやあ」

ドーン・

おれは見渡す限り（伸ばせば手が届く距離の）木に囲まれていた。
何故か頭がいつもよりもせえていた。こんな時は気を乱さず深呼吸
だ。

スウ・・・ハア・・・スウ・・・ハア・・・スウ・・・スウ・・・スウ・・・

せ
の

なんで?え、なんで?さつ今までおれは我武者羅に木を切り倒して此処まで突き進んできてたよね!それがどうしておれの後ろにあるはずの切り株とか丸太が一つもないの?無い筈ねーだろ!!

「ねーよ。どうやつたらこの状況で迷子になれるんだよ。来た道すらないつてもはや空間移動だろこれ。でもこの森にそんな大掛かりな術施してるのはずねえし・・・」

この森に何があるのか、はたまた今おれに何が起こっているのか皆
目見当もつかない。結局現状を開拓する術をおれは持ち合わせてい
ない。パニックを起こした頭はすでに田指す方向さえ忘れてしまつ
た。

「やっぱ道間違えたのか～。19にもなつて迷子になるなんて・・・
くう（泣）！ おれ何か悪いことしたか？ おれ最近こんな目に遭つ
かあつてるだ！」

嫌ホントに。思い替えしたら次々とそんな思い出が沸いてきやがる。
もうその星のもとに生まれたんじやないかと思うくらい。
ああ小さい頃は母さんに迷惑ばかりかけたっけ？ “ごめん謝るから助
けて・・・。

（実際は生えている木一本一本にかけられた『まじない』によつて
強制的に迷わせられているのだが、エリイ達と共にいなかつたジー
クは知る由もないのである）

「よしー…やうとなればやることは一つだー！」

自分の置かれている状況を素直に受け止めたおれは唯一の方法を見
出し賭けに近い策に希望と羞恥心を抱いて上を向いて大きく息を吸
い込んだ。

「誰かああああああああああああああああああああああああああ
…………」

“た――すけ――てくう――ださ――――い――！”

“すけーでくうーださー————い！！”

“くうーださーーーーーい！”

“-----い・・・”

帰つてくるのは期待する肉声ではなく自分『達』が発した声が向こうの山に当たつて帰つてくるやまびこだけ。逆に孤独感が際立つてしまつた。

「ふつ、来るわけ……ないよな。なんか目から熱いものが出てるぜ……」

「本当やで。これから血分等はどうでしょうんやー（泣）」「じりなるつて、決まつてゐるだらつ。誰とも会わずにこの不思議な森をさまよへ続けるのさ・・・死ぬまでな」

子犬の泣き声に似た悲鳴が上がる。自分は言つてないがかなり共感が沸く。おれと同じ境遇のかわいそうな奴がいたのだろう。

「泣きじ」と言つたよ。辛いのはお前だけじゃ……」「

「 もうやな。くもくよしても仕方あらへ・・・・・・

そして気付いた大きな疑問

・・・あれ?

おれは何を言つてゐるんだ?誰に言つてゐるんだ?

そもそも『おまえ』って言葉は話す相手がいないと使えないと思つ
んだろうが

・・・とこうか“～やで”とか“～や”ていつ変な口調をおれは使
つたことなどない。

「 「 ～ん・・・・・ん?」 」

後ろから同じ疑問の声が聞こえて振り返り・・・おれはいつの間に
か後ろに立っていた人物と初めて顔を見合せた。

一先ず孤独死は避けられたようだ。

「 「 おまえ(アンタ)は誰だ(や)?」 」

・・・・・・・・・・・・・・

「なるほどなるほど。話をまとめると・・・
お前の名前は『カトル』。この不思議森改め獸人達の隠れ里に住む
ウル族（天狼を祖とする）。

此處にいるのは昨日仲間と採集に出ていたところを謎の怪物に襲わ
れた。

付き添いで数人の戦士がいたがおそらく全滅。

（おれがあの時見たのがそうかもしだねえな・・・）

なんとか逃げたがその時に足をけがして身動きが取れなかつたと

それに目の前の幼い獸人力トル（因みに9歳）は頷いて続ける。

因みに容姿を上げるなら背丈はジッちゃんぐらい。茶色い獸毛はま
だそれほど生えておらずそこらの人間の子と変わらない。しかし狼
型の獸人の証である獸耳と尻尾は小さいながらもツンと生えている。
顔は大きな青色の瞳を持ち活発に遊びまわる悪ガキのようだが可愛
い気がある。

なんつーか・・・和む。

「そや。誇り高き森の獵人ウル族の戦士や！

でもつてジークの兄ちゃんの方は・・・

とある理由で此處にいない4人の仲間とこの森に踏み込んだ。
あろうことか仲間と離れ一人で散策に出た。

異変に気づいて仲間の所に戻ろうとしたけど案の定この森に掛けら
れてる『まじない』に囚われて迷子になつた。

・・・いい年してだらしないのう」

ムカツ、「こつ言いやがったな。

「ひっせい。歳は置いといてお前もおれと大差ないからな。そんなこと言ひてつと置いてくから、頑張れよ」

そう言ひて立ち上がるとカトルは皿の色を変えて足の傷はどうした

と問いたい勢いでおれに迫ってきて

立ち去らんとするおれの足をガツチリと両腕で抱きとめた。

「嘘やウソーアンタがこないな所におつてホンマに助かつたわ！だから行かんで、置いて行かんで、一人にせんといつーや…（泣）」

その姿はまさに『必死』を形容していた。

絶対に離さないと子供にも拘らず尚も腕に力を込めしかしおれを見上げる顔は泣きそうでまるで雨の日に道端に捨てられた子犬のようだ。それに捨てられた子犬というのもあながち間違えていない表現だ。カトルはその謎の化け物という恐怖に怯えながら一人で一夜を過ごしたのだ。そこに現れたおれが唯一の希望になつてているのだろう。

それを見て物凄く罪悪感を感じるおれ。勿論冗談だった。最初から身捨てよとは思つてないし身捨てても後味が悪すぎる。それにカトルはおれが迷子という現状を解決してくれる糸口になるはずだ。こつちだつて抱きとめてでも逃す『気はないの』だ。

「わ、悪かった。冗談だつてジョーダン」

「グスツ・・・ホンマに？」

「ほんまほんま。だから一旦放せ。一緒にじてやるかい。誇り高い

ウル族が泣いてどうする」

「ヒグツ……分かつた。放す」

なんとか言いぐるめおまけで頭を撫でまわして子犬を泣き止ませる。罪悪感と血の毒があれの心を壊す前の応急処置だ。

「とにかくだ、田が暮れる前にあれかお前の仲間と合流するぞ。おれの仲間はそこまで遠くにはいなはずだしお前の仲間だつて探しに来てくれるだらうぞ。だからお前は道を教えろよ、あいにくおれの眼には相変わらず木しか見えん」

「！」これだけやつとこで木が見えるつぢゅつのも凄いもんやで。アンタホンマに人間？こいら辺の木ほとんどその剣だけで斬り倒してきたんやろ？軽い広間になつとるで

見えないがそれ程切り倒したのかおれ。引かれる程つてどんだけやつちやつたんだろうか。

「讃めるな、照れるだらうが

「……………」

何故か変な空気が流れた。

「まあ心強気に越したことはないからええけど……でもジークの兄ちゃんの目が見えないのは不都合やな。よし、『まじない』を払つたるからこいつち来てや

「マジか！？スグよろしく……」

これ異常にない提案におれはまたに一瞬でカトルに飛びついた。そ

れにカトルはのけぞるが直ぐに持ち直して負けじと顔をおれの眼前に突き出して……

ペロンツ

とおれの顔を一舐めした。

「……………」

思わず言葉を失つおれ

「……………キ

ヤツ」(b y カトル)

何を思ったのか両手を頬にやつてこの女によつて恥ずかしがりやがつた。

それを見たおれはどういつと……

ガシイ!!

その顔へアイアンケードーを決めた。

「イダダダダダダダ！？」

「何してくれとんじやこの犬つころがあああ！！人のこと舐めやがってバカにしてんのかあああああ！」

「誤解や誤解！！いや確かに舐めたけども人としては舐めとらんつて！！試しに周り見てみいや！『まじない』が解けてジークの兄ちゃんが見る光景も元に戻つとるはずや！」

何？それを早く言え。

カトルを掴んでいた右手を放す。

「あつホントだ。ありがとな！・・・つたく誰だよこんな酷え」と
したのは「

言われて周りを見渡すと根元から切り倒されて木の後がおれより後ろへ大きな曲がりまくつていてるが一本道を作っていた。『まじない』のせいで方向性が失われているのが分かる。

誰の仕業か・・・勿論おれ自身である。

「…………そやな」 痛みから解放されたが下手に
ツッこんではいけないと踏んだカトル

「「」ねんだ」ねんだ。つこつこカツとなつちまつた。まあ氣を取り直して仲間探しに行こうつや。ほら乗れよ怪我治つてねえんだろ?おぶつてやるよ」

「いつまつておれは風ふうでカトルに顔を向けた。

「お、おひ・・・・・・・・」

背中に乗つたカトルは何故かおとなしくなつた。

「どうした?」

「なんや・・・・・・ワイのアンかけやんみたいな背中やなあつて」

「あんちゃん?誰だそれ」

「ああ。兄ちやんのことや。こつもワイのひと構つてくれて、ほんで強おて・・・心配しとるやう一な」

さつきまでの元氣は見る影もなくぼそりと駆くカトルの声は心なし
か震えているようだつた。

「すぐに会えるや。だから元氣出せつて。あーあと道案内してくれよ。ひとつにじむおれが迷子なのは変わりないからな。お得意の鼻で見つけてくれ」

辛氣臭い空気を変えようと話を振るとカトルは予想外の反応を取つた。

「あーーアンちやん達の匂こいやーー」

早えなおいーー！

しかしカトルの言葉はなおも続いた。

「あとワイラを襲つた化け物と人間の匂いやーー！」

「・・・・・」

この時頭によぎつた思いは間違いであつてほしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9835w/>

特殊能力？ハイ、馬鹿力です。

2011年12月29日18時53分発行